

8

外 外
探 勝

その日

うら



82-708

探郊
勝外
そ
の
日
歸
り

落合浪雄著

有文堂發行

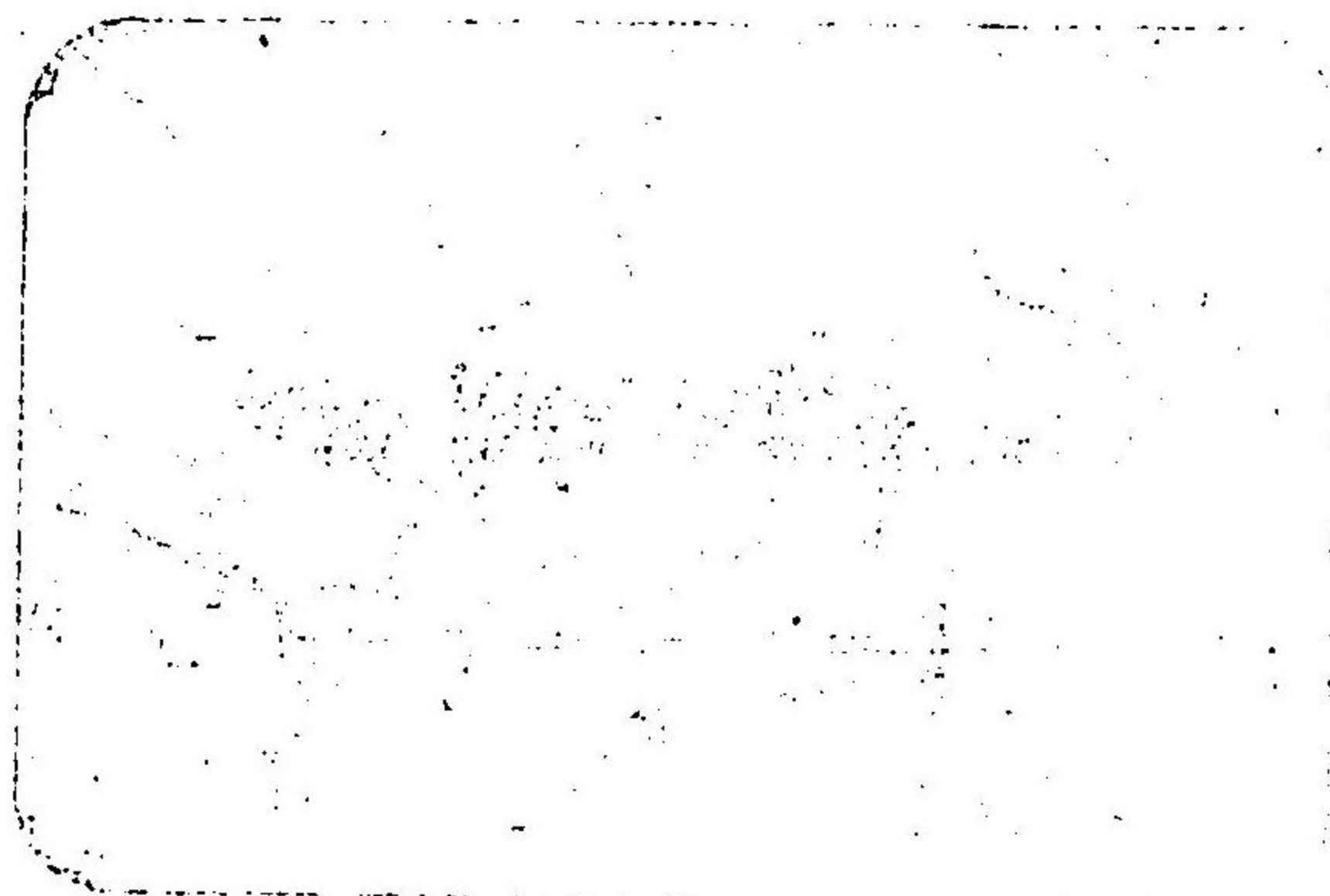
明治
44. 6. 17
内交



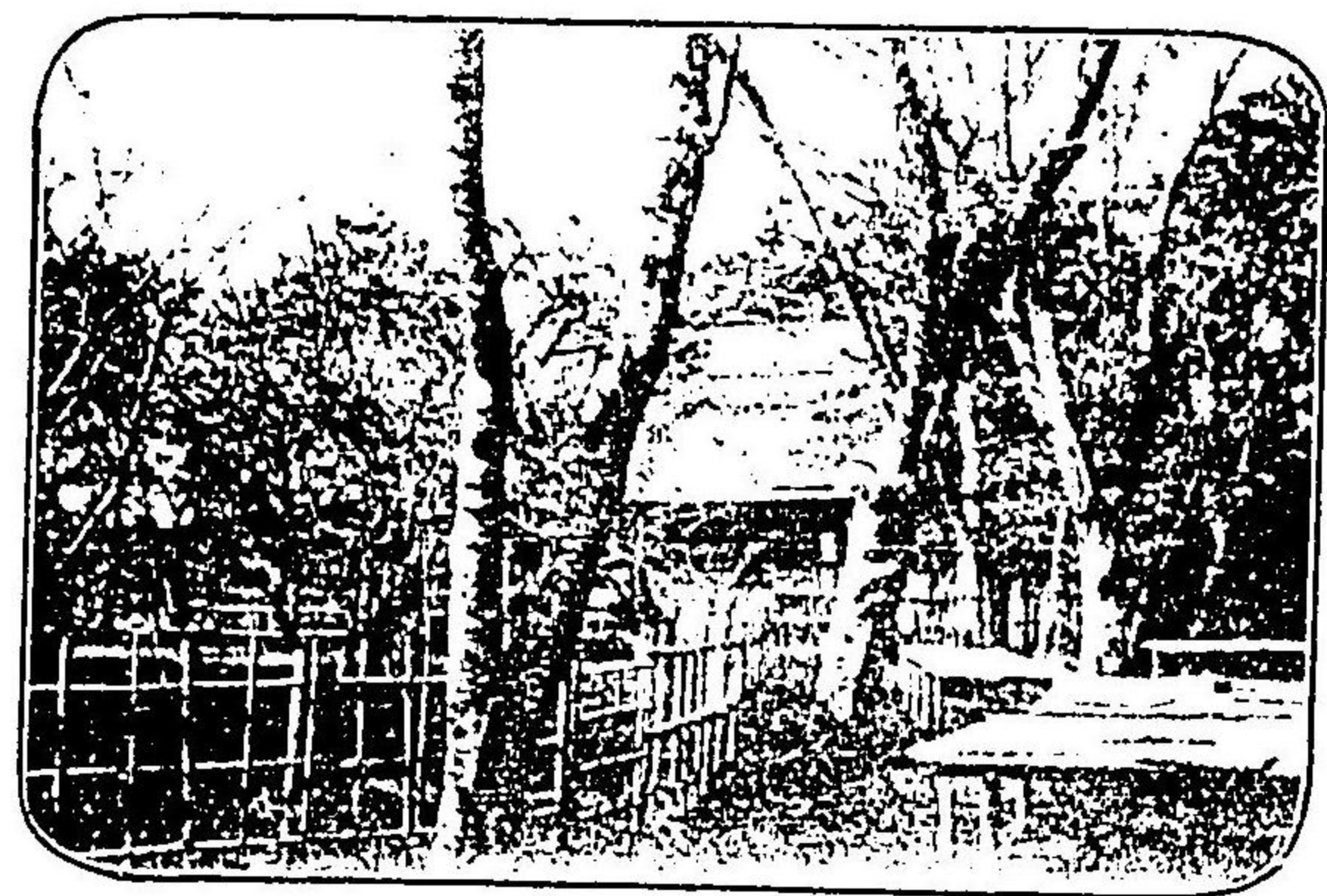
高輪泉岳寺表門



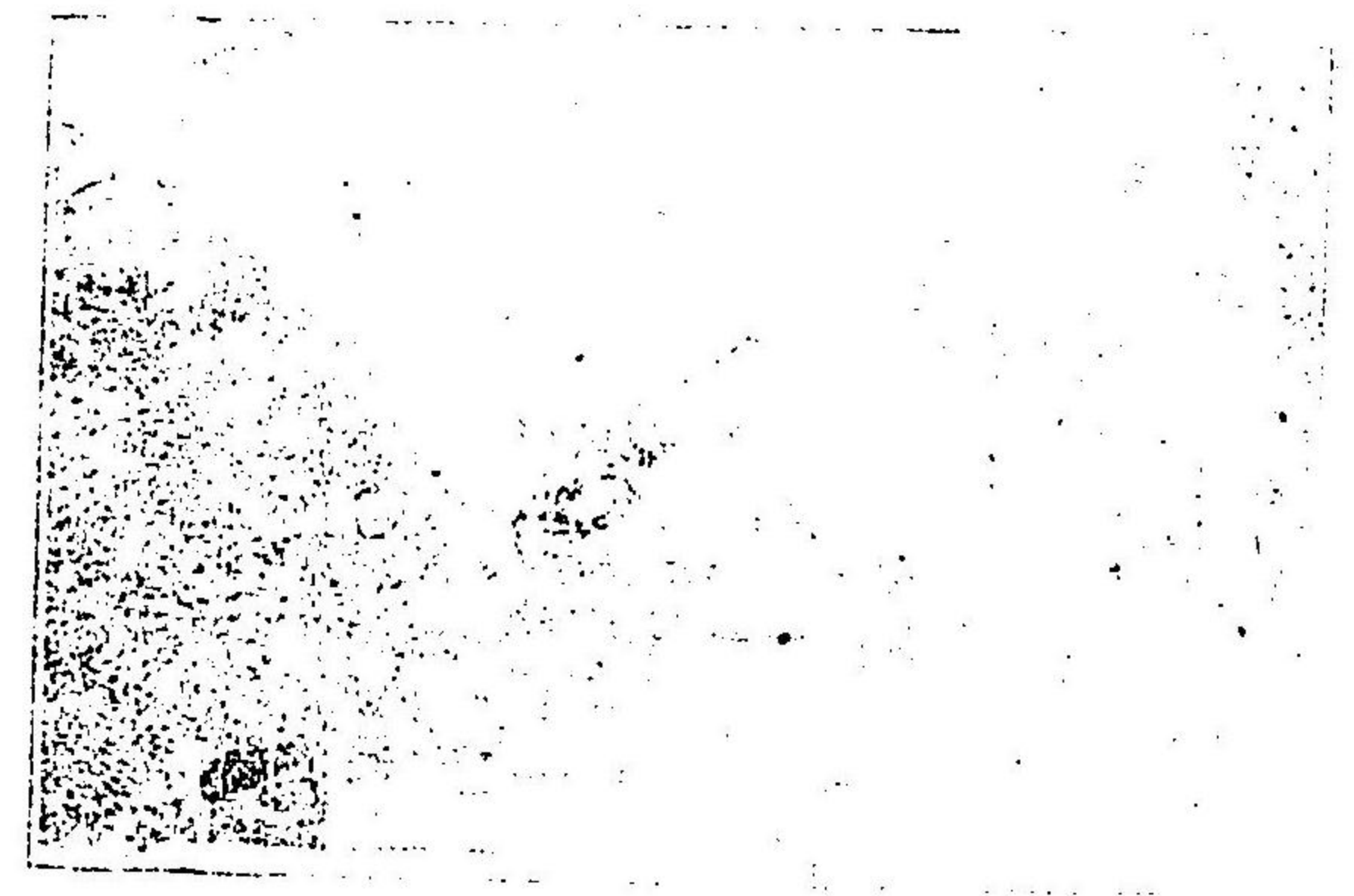
林ヶ崎海岸



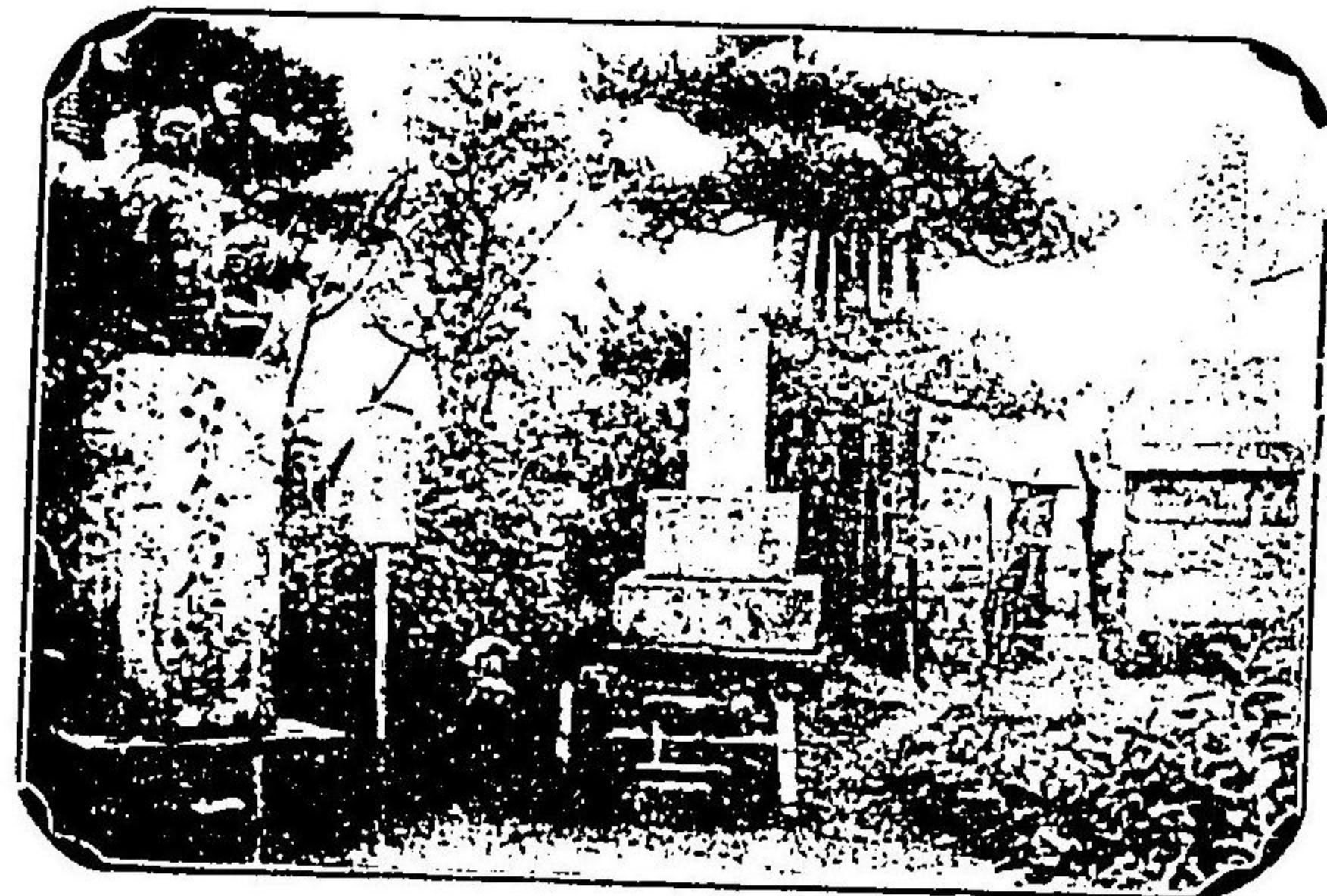
梅の園景八森大



梅の園景八森大



鐘ヶ森の晩鐘



鐘ヶ森の晩鐘



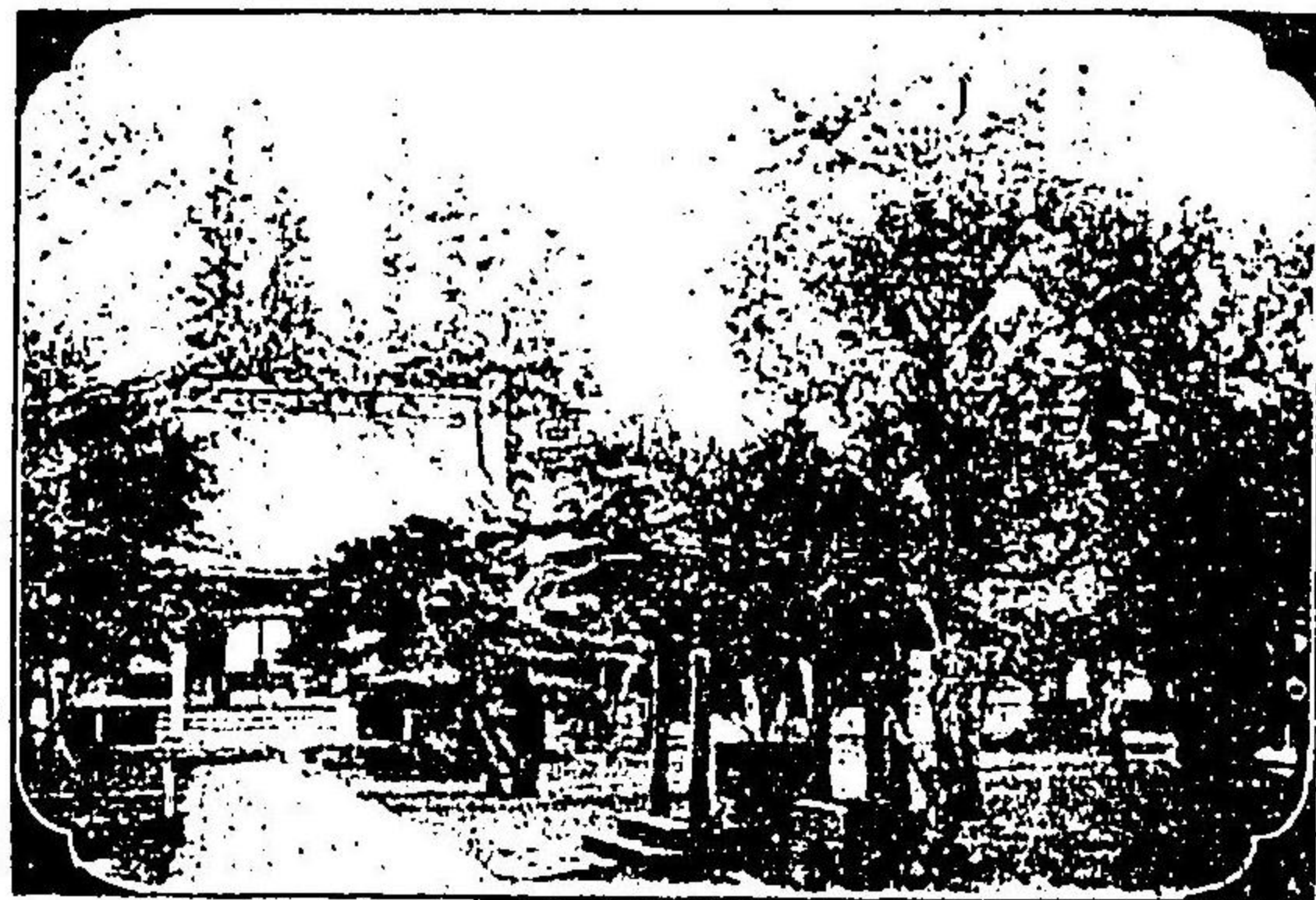
花 櫻 の 島 向



塔 の 重 五 内 の 堀



松の打籠軍將代三川徳黒日



寺天祐黒堀

□□□□□□□□□□□□□□□□

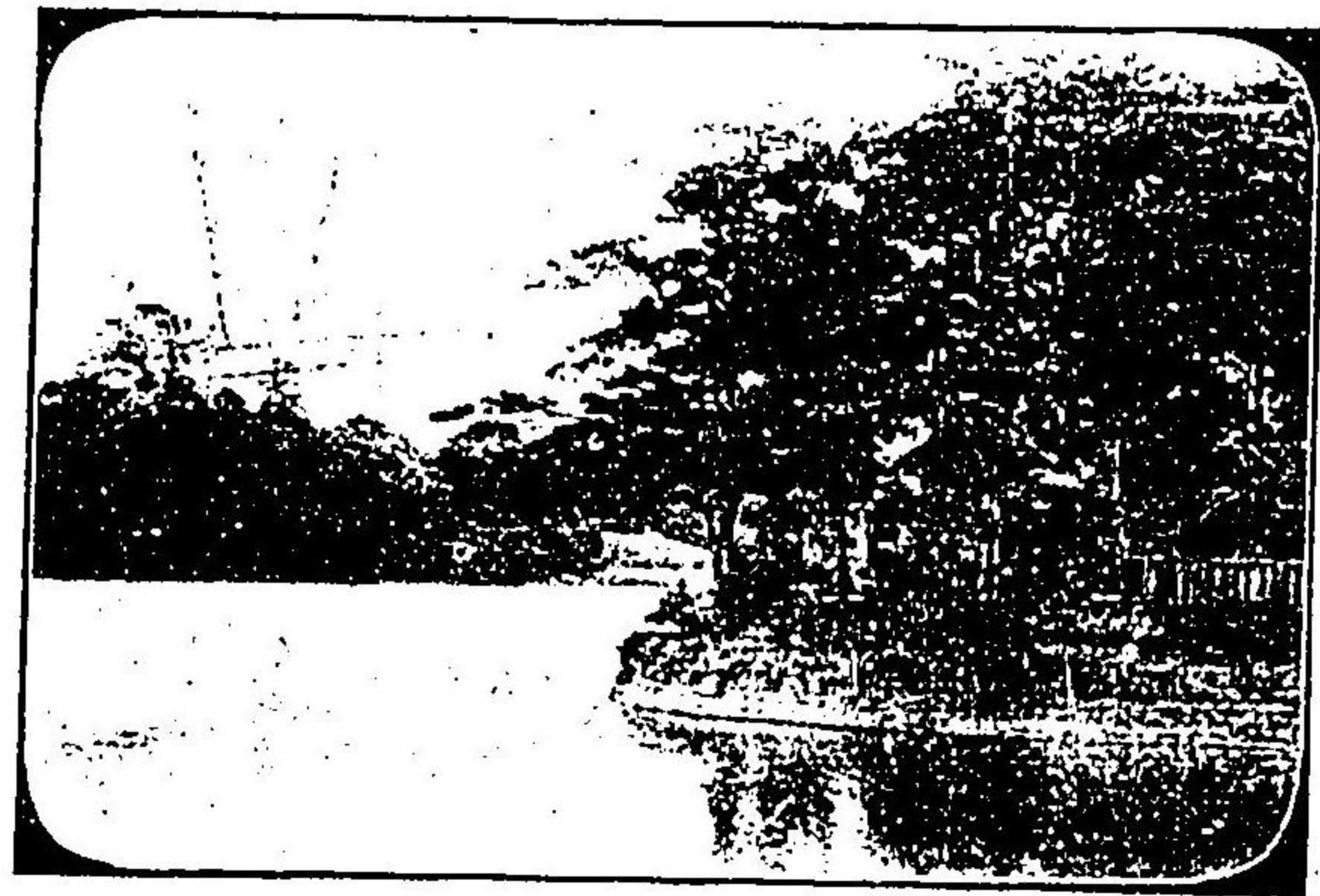
樂は十分ならざるを佳き況して旅の樂は餘りに食らざるを專一とす。湖水浴湯治時を費し金を費す事多きに從つて樂みの徹殺され行く事は何人も知る處長逗留に將基も甚も體風を凌ぐに足らで、里心の付くに至るは大串の食へ飽をして茶漬の味を優れりとする者と選まず、茲に『七日の旅』に續いて『その日歸りの旅』を梓に

小序

□□□□□□□□□□□□□□□□



波の屋竹島向



池の洗足上池

□□□□□□□□□□□□□□□□

上すものは忙中に閑を求め、川事も、秋かす、焚火の散財もせず、外見を張らす、氣を悠然として、週日の内に唯一日なる日曜日を利用し、山を樂み水を樂み、潮風に煤煙に汚れし袂を拂ひ、松樹に砂塵に塗みれし耳を洗はん事を凡ゆる天下の樂の爲めに生き、樂の爲めに生さんとする人々に勸めんとてなり

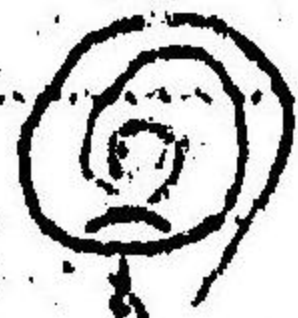
落合 沢 雄 述

□□□□□□□□□□□□□□□□

郊外 探勝 その日歸り目次

- (も)のはな)……市川……………
真間の弘法寺、手古奈の洞、國府齋、法華經寺
- (を)まわり)……成田山……………
宗吾神社、光勝寺
- (う)め)……杉田……………
横濱見物、金澤八景
- (海)水(浴)……一の宮と大原……………
房總の海岸
- (を)まわり)……川崎……………
穴守稻荷、大森
- (ゆ)さん)……江の島、鎌倉……………
藤澤遊行寺、大佛、鎌倉八幡宮

その日がへり目次



- (み)ち)……御嶽……………
日原の鐘孔洞、新月が淵の吉野村
- (か)い(す)わ(よ)く)……稻七……………
甘粕先生の墓、千葉見物
- (お)ま(わ)り)……堀の内と新井……………
善は清み草、秋は酒飯
- (う)め)……蒲田と小向井……………
小杉村最明寺
- (海)水(浴)……館山……………
名所は鏡ヶ浦、觀音は
- (お)ま(わ)り)……池……………
近くは八景園、

その日がへり目次

（とうち）……成東……………三二
 東金に出て九十九里見物、佐倉へ寄つて
 宗吾刑場を訪ふ
 （ほとる）……大宮……………三六
 櫻もよし、蓮の花もよし、温泉もあり
 （かすいよく）……大磯……………三九
 鴨立澤を見て、化粧坂の化粧園子を召せ
 （さくら）……小金井……………四一
 國分寺の古瓦、玉川の新緑
 （とうち）……箱根……………四四
 早雲寺の寶物と玉簾の瀧
 （海水浴）……銚子……………四七
 男性的海水浴と大漁踊の野趣
 （おまわり）……大雄山……………五〇
 二十八宿の山道、莊嚴寺猷供式

（あゆりやう）……

納涼にもよし、泳ぎに
 （海水浴）……大磯……………四七
 眞の磯節を聞く磯濱、平磯
 （梅）……水戸……………五三
 好文亭の眺望、弘道館の跡
 （もみち）……高雄山……………五五
 歸へり途は八王子を見物
 （海水浴）……新子安……………五七
 碧皿の碑と浦島寺
 （もみち）……瀧の川……………五九
 花は飛鳥山
 （七福神詣）……向島……………六一
 東京中で七福神詣でが三通り出来る
 （おまわり）……雨降山……………七〇
 日本武尊と親鸞上人の古跡

（おまわり）……六阿彌陀……………七一

後生願ひの年寄に負けてく／＼とや
 つて見給へ
 （さくら）……荒川堤……………七四
 熊谷寺と薩摩守忠度の古跡あり
 （海水浴）……茅ヶ崎……………七六
 海傳ひに平塚あり、鵜沼あり
 （あさがほ）……入谷……………七八
 歸りは笹の雪かさては池の端で一風呂
 （おまわり）……鬼子母神……………八〇
 山吹の里と穴八幡、も一つ高田の馬場
 （つじ）……大久保……………八二
 十二社権現に廻はる
 （海水浴）……葉山……………八四
 小坪の古戦場、六代も前の墓ある櫻
 その日がへり目次

（ふじ）……箱根……………六六

二房五尺もあり、一株五十坪に餘る藤花
 （つじ）……館林……………六八
 香龍様へ詣り茂林寺には文福茶釜を見よ
 （ふじ）……龜井戸……………七〇
 柳島の蘭玉と、萩寺のはぎ
 （おまわり）……目黒……………七二
 楳八小紫の比翼塚、甘藷先生の墓もあり
 （もみち）……海晏寺……………七五
 谷垂の伊藤公の墓、東海寺に澤庵の押石
 （おまわり）……泉岳寺……………七七
 師直首洗の井戸と義士の遺物を見落すな
 （ゆさん）……金澤……………七九
 金澤文庫の跡あり、泥鰌に有名の牡蠣あり

その日がへり目次

(おまわり)……………喜多院……………一〇二
 道灌の城跡と、三芳野神社
 (おまわり)……………東京の八十八ヶ所……………一〇三
 いそげば二日、三日ならゆる
 (おまわり)……………布施と柴又……………一〇八
 手賀沼と利根川
 (えんそく)……………飯能……………一一三
 能仁寺の十六羅漢、子の楯現の深山幽谷
 (えんそん)……………荒幡……………一二四
 元弘戦死碑、今將軍塚
 (おまわり)……………小岩不動……………一二六
 星下りの松、行徳の菖蒲
 (すいみ)……………桐ヶ谷の瀧……………一二八
 大圓寺の五百羅漢
 (しやうぶ)……………堀切……………一二九
 綾瀬の景色

京阪の部目次

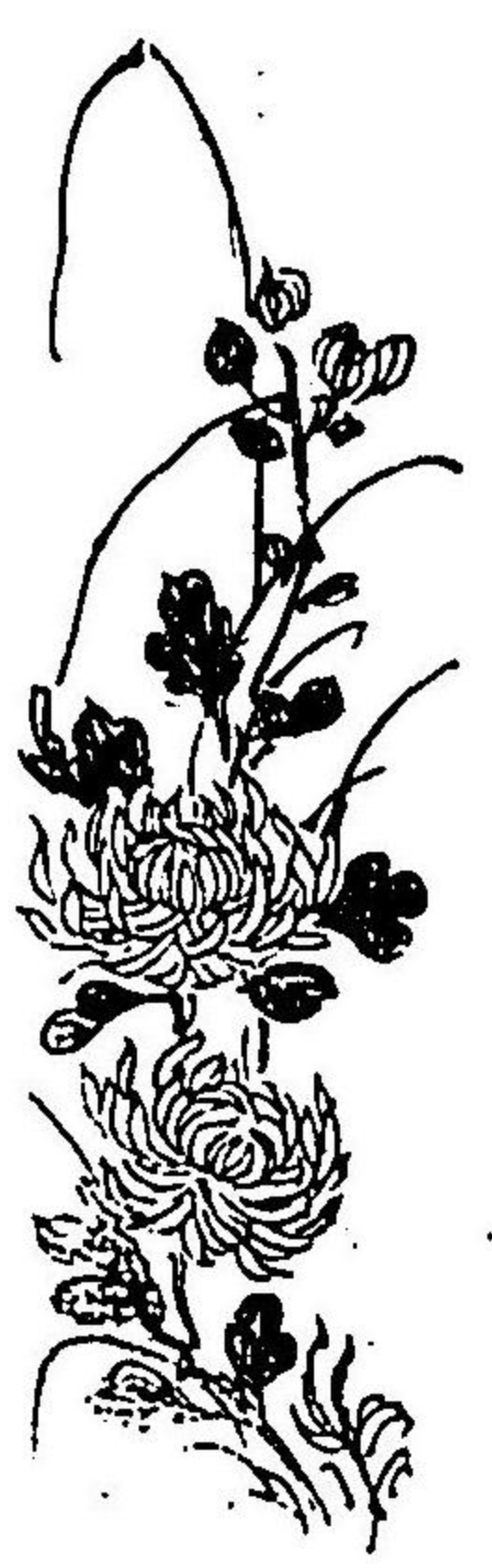
(ゆさん)……………和歌の浦……………一三一
 片男波に記三井寺、歸に和歌山の公園
 (海水浴)……………堺、住吉……………一三三
 お土産には庵丁に段通、焼蛤に水ほい薩摩芋
 (おまわり)……………野崎の観音……………一三五
 古戦場飯盛山に、四條驛神社
 (ゆさん)……………宇治……………一三七
 頼政の扇の芝、佐々木梶原の平寺院など
 (ゆさん)……………奈良……………一三九
 三笠山に猿澤の池、正倉院と東大寺
 (うめ)……………月ヶ瀬……………一四一
 一目千本の勝地あり
 (もみち)……………保津川……………一四三
 兩岸の紅葉は錦繡を曝すが如し
 その日がへり目次

(すいみ)……………等々力の瀧

玉川の鮎を漁し、細井廣澤の墓を訪

(おんせん)……………寶塚……………一四五
 天然炭酸水の湧いて居る所がある、樫葉嶽
 (もみち)……………箕面山……………一四六
 瀧安寺の辨天櫻楓の葉の揚げたのを召しませ
 (ゆさん)……………須磨、明石……………一四七
 一の谷、鶴越、敦盛塔、松風村雨の墓
 (おまわり)……………楠公神社……………一四九
 生田の森、梶原の井、布引の瀧をば見物あれ
 (おんせん)……………有馬……………一五二
 有名な湯女、有馬節を聞き給へ

探勝その日歸り目次終



郊外 探勝
その日取り

落合浪雄著

もゝのはな

市川

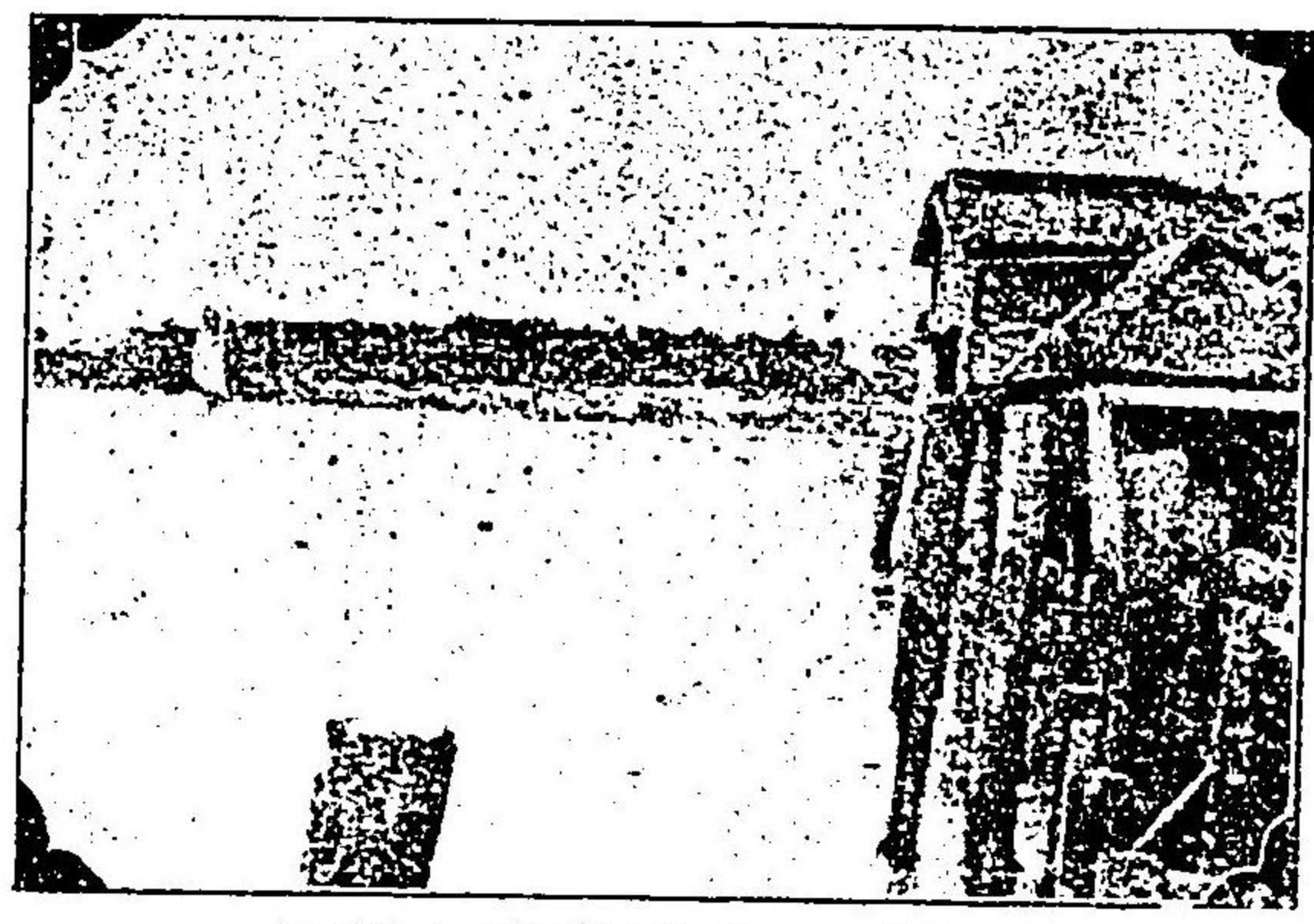
(真間の弘法寺、手古奈の祠、さては國府の臺へも廻られる)

桃の花は鄙びたりなど言ふ勿れさ、梅はやんごとなき際の令嬢品高き装ひ、櫻は黒人の狭な姿形と見れば、是は名も無き町娘の優しき處あざけない處が命なる可し、市川まで兩國橋停車場から僅に七哩、時間は三十分(賃金三等十三錢二等二十錢)市川の停車場へ下車して真直に半町ばかりで市川の町へ出右へ折れると其處邊中に桃の花畑、入口に紙の小旗、裂の大旗で客ひきの看板、すつと這入と盤蛇たる桃の

もゝのはな

枝縦横に延びて緋桃白桃の花盛り、花の中に亭もあり、へられけで歸りを船橋の八兵衛が許へど快しからぬ義を結ぶ若い人あれば、吳坐一枚に一家團樂うで玉子に海苔巻のたのしそうな子供連、桃の下枝ぬけつ潜りつ鬼ごっこをする娘さん、雑沓のなかに桃の趣味はあるものとして桃の砂糖漬おみやげにぶら／＼と北へ真間の弘法寺へ志す、麥畑杉の林まで處々にある桃林を名残に弘法寺の大通りへ出ると晴れ晴れした野の草色、雲雀も定めし鳴いてるのであらう、陽炎も立つ美しい色彩の蝙蝠傘が春の日に照らされてそらろ浮き立つ足で、七八町は雑作もなく弘法寺の石段の下まで、右手に見へる祠が即手古奈の祠、祠のそばの小流が昔は大きい川であつて、川中へ柱を立て兩方から板を渡して行き交をしたので、真間の繼橋と云ふ、繼橋と云ふ名は萬葉集にもある、下つて慈圓の歌にも『葛飾や昔の真間の繼橋をわすれず渡る春霞かな』とあり、祠のある邊りは其當時の真間の後であつて手古奈が二人の男に戀ひて彼方立てれば此方が立たぬ、思ひ餘つた最期を遂げし處なりと傳へてある、石段を登り盡せば弘法寺、日蓮宗のお寺で正面は釋迦堂、仁王門の仁王

運慶の作といふ、振り返へると今来た途は眼下、汗ばむた肌に風すや／＼と遠水茶



利根川より國府臺を望む

屋に腰を卸ろして澁茶に葛餅、麥畑の青いのにところ處の桃林、東京では見られぬのんびりした好い眺めである。

弘法寺を裏へ抜けると砲兵旅團の兵營、營舎に沿ふて北西へ半道ばかりで、鴻の臺へ出る、下は江戸川遠くは東京の人烟幽の間に淺草の十二階、五重の塔も見へよう、國技館も見へよう晴れてさへ居たら富士は固りである、華な桃林とは打つて變つたしつとりした松林の間で、ゆる／＼と食事をし臺を下つて江戸川縁へ出で、真帆片帆で上下する船を見ながら市川の町へ出る。

時間の都合では國府の臺を先にして弘法寺から市川の桃、それから田舎道を中山へ

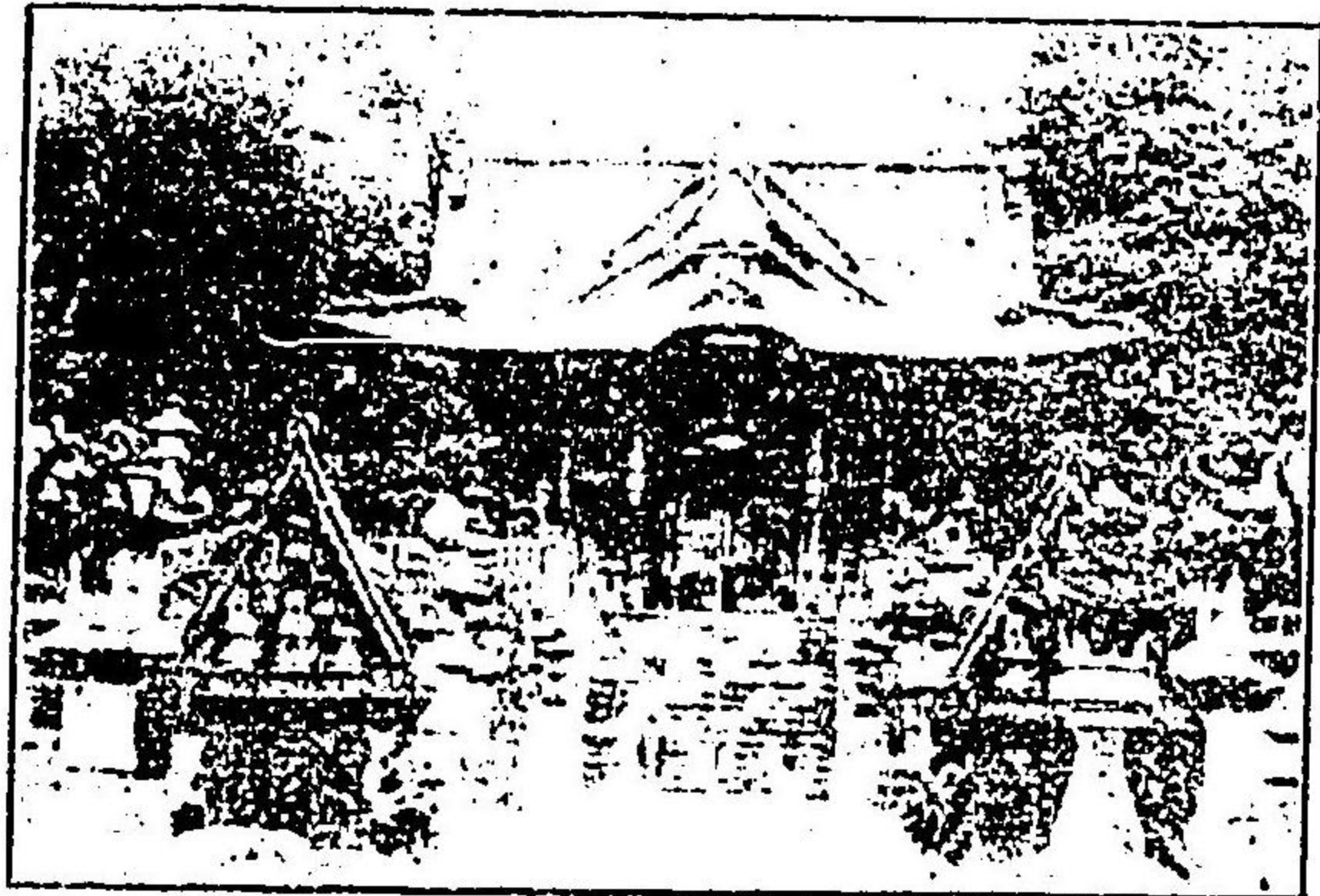
出て法華經寺へ參詣するもよし、法華經寺は日蓮上人の百日説法のあつた靈場、本堂を中に骨堂、五層堂、經藏などあつて此界限では立派な寺、中山まで行けば法華經寺から二十町の妙正ヶ池、池の主が女に化けて日蓮上人の説法を聴き上人の曼陀羅を受け妙正と法名を授けられ、其曼陀羅を池の側の櫻に引懸けた儘姿を隠したと云ふ因縁のある處へも行き、停車場から程遠からぬ八幡神社へ參詣して有名な八幡知らずの籤で度胸だめしをして見るも面白い、籤は僅に十坪ばかり、が併し、是迄に這入つた者で、よし出るにした處で屹度祟があると云ふ事だから、迂濶には踏み込めない。

中山停車場から兩國まで汽車の道程九哩八鎖、時間五十分、汽車賃は三等で十七錢二等で二十六錢、

おまゐり

成田

(歸りは宗普橋、みやげは梅びし)



成田山本堂

成田山新勝寺へは上野からでも、兩國橋からでも行く事が出来る、上野からは直行が四回其外は我孫子で乗換へ、哩数は四十一哩、汽車賃は三等で七十錢二等で一圓五錢、時間は二時間と十分、兩國橋から行くは直行列車の外は銚子行へ乗つて行つて佐倉で乗換へ、哩数は殆ど同じ汽車賃も同じ唯時間は三十分ばかり遅くなる、成田の停車場から不動の門前まで人力車賃は十錢前後山門を入り十四間四面の本堂は安政中の建築であつて、腰板の五百羅漢は杉本道山、扉の二十四孝圖は島村俊表、本堂裏手の十六羅漢は狩野一信の筆、一切經

堂の額は白川樂翁公、光明堂は龜田鵬齋の扁額、見る可き物は非常に多い、朝日觀音堂、三重の塔、鐘樓、開山堂、護摩堂、其他を見る、寺寶は天國の寶劍を始め珍什其數を知らず、本堂たる不動明王は天竺毘首羯磨の作、弘法大師が入唐の際授けられて歸り高野山に安置してあつたが、平の將門の下總に叛を圖るや、時の高野山宣教大僧正此不動像を奉じて下總に下り朝敵降伏の祈を舉げ、將門亡びて後靈像を奉じて歸らんとしたるに、像の重量急に重くなりて動かす、已むなく茲に伽藍を造り本堂として安置したるものである、成田の町は殆ど此新勝寺の爲めに存在するが如く、新勝寺も又成田の爲めに盡す事尠からず、幼稚園、圖書館等の設備など頗る見る可きものもある、宿屋は貞松館、若松屋、大野屋等あり、梅びしほ栗羊羹のおみやげ、成田より佐倉への途酒々井の驛にて下車すれば木内宗吾を祀りし宗吾靈堂あり、途中宗吾の叔父光善が命乞ひの祈禱を凝らせし光勝寺あり、是等に參詣して優に一日に歸る事を得可し、此頃成田より宗吾まで成宗電車と云ふが出来たれば便利は一層よくなれり。

うめ

杉田

(横濱見物 而して金澤八景)

杉田の梅を見るには先づ横濱まで汽車、哩數十八、時間は急行ならば僅に廿八分、遅くも五十二分普通賃金三等三十錢二等四十五錢、割引往復切符もあり、横濱では伊勢山の大神宮、野毛の不動、掃部山の井伊掃部頭の銅像、序に横濱居留地本牧等を見られれば見て杉田へ向ふ、横濱停車場から西の橋まで電車(往復七錢)夫より橋を渡りて右に川沿ひに中村に出で屏風ヶ浦に達す、石川より杉田まで約二里、人力もあり、乗合船もあり、屏風ヶ浦の風光を稱しつゝ、行く程に大隧道を過ぐれば早杉田、白雲所々に蹊ぎ、衣袂に香あるを疑はしむる程である、杉田の全村海に面し山に沿ひ全村梅ならざるはなし、中にも妙法寺の珠籠梅其名最も現はれしも樹老ひて此頃は花漸く尠く其名をのみ朽株に止むるに至つた、梅林を穿つて山に上れば、山上茶店料理屋軒を並べて客を待つ、床几に腰を投じて山下を眺むるに梅林を隔てて屏風ヶ浦一帶の景色文人畫の如し。

杉田から金澤へは山越しに一里半餘、十三峠と名に聞えし嶮所も實は左程の道には
あらず、峠を上り切つてばつとバナラマの様に金澤の入江即ち八景のある所が眼下
に展開されてから、爪先下りに降る事十餘町、洲崎の晴嵐、瀬戸の秋月、小泉の夜
雨、乙艦の歸帆、稱名の晚鐘、平瀨の落雁、内川の暮雪、野島の夕照、と云つた處
で實は餘りに大きい景色ではなく筆捨山の能見堂へ上れば八景を一目に見られる、
元來明の大越禪師が支那の西湖に似て居ると云ふので八景になつたので近江の琵琶
湖とは規模に於て頗る霄壤の差がある、泥龜と云ふのは金澤の町の中で有名な牡丹
の名所はだけでも態々見物の價値があるさうだから四五五月頃に茲を通つて鎌倉へ抜
けるか、茲から朝比奈の切通しを抜けて約二里鎌倉へ行くのも好い、金澤での宿屋
は吾妻屋、千代木、野島屋、一息入れて金龍院へ上れば山頂に九覽亭あり是も金澤
の名所を一陣に集める事が出来る、昔しは定めしと思ふが入江が淺瀬になつて満潮
の時でもなれば泥海の様な形があつて面白くない、見物す可き處は瀬戸の明神
辨天社、北條實時父子の建立に成る稱名寺の境内に金澤文庫の後がある云ふ。

海水浴

一の宮と大原

(房総の海岸は、實に心安く遊べる。)

房總の海岸で海水浴に好い處と云へば新大磯の名ある一の宮と大東、大原の三ヶ所
であらう、此内一の宮は停車場の所在地から町を一の宮川まで出で、川を下つて海
へ近き處に青松館、一の宮館等の海水浴旅館がある、川は水清く流静に鯉鮒鮓等
を産し船遊び漁りによく、海は外海岸の割に浪高からず、近年舊領主たる加納子爵
が河口の北岸に別荘を建てられしを始めに紳士紳商軍人學者等の別荘を建てる者多
く忽に新大磯の評判高くなりし處、土地の人は質樸にして旅館等も決して暴利を貪
らず、平民的の避暑地としてよし、一の宮の海岸は松林を脊にして平洲限りなく觀
る可きもの妙きもの一の宮町は舊城下なれば城地、月の名所高藤山、玉前神社などあ
る。

大東は九十九里濱の南端、犬吠ヶ岬と相對する大東岬に擁せられたる海岸にある太
古彦火々出見尊が釣を垂れ給ひし處なりと傳へらる、釣崎、同じ處に波濤の反響絶

えず聞ゆる、音信山、一に鳴山と云ふもあり、

海岸處々に筆草を産し、魚類は思ふ

儘に食へ飽きが出来る可し

大原海水浴場は停車場より七町餘小濱海岸にあり

小濱海岸は天正年間鎌田某の城地にして八幡宮を

安置し海上岩島雀島の絶景あり、奇岩浪に嘯まれ

て風景佳絶の處に旅館帆萬千館あり房總線は此大

原を以て終點とし御宿、勝浦の方面には茲より馬

車通ず、總じて此邊人氣まだくよろしく宿賃な

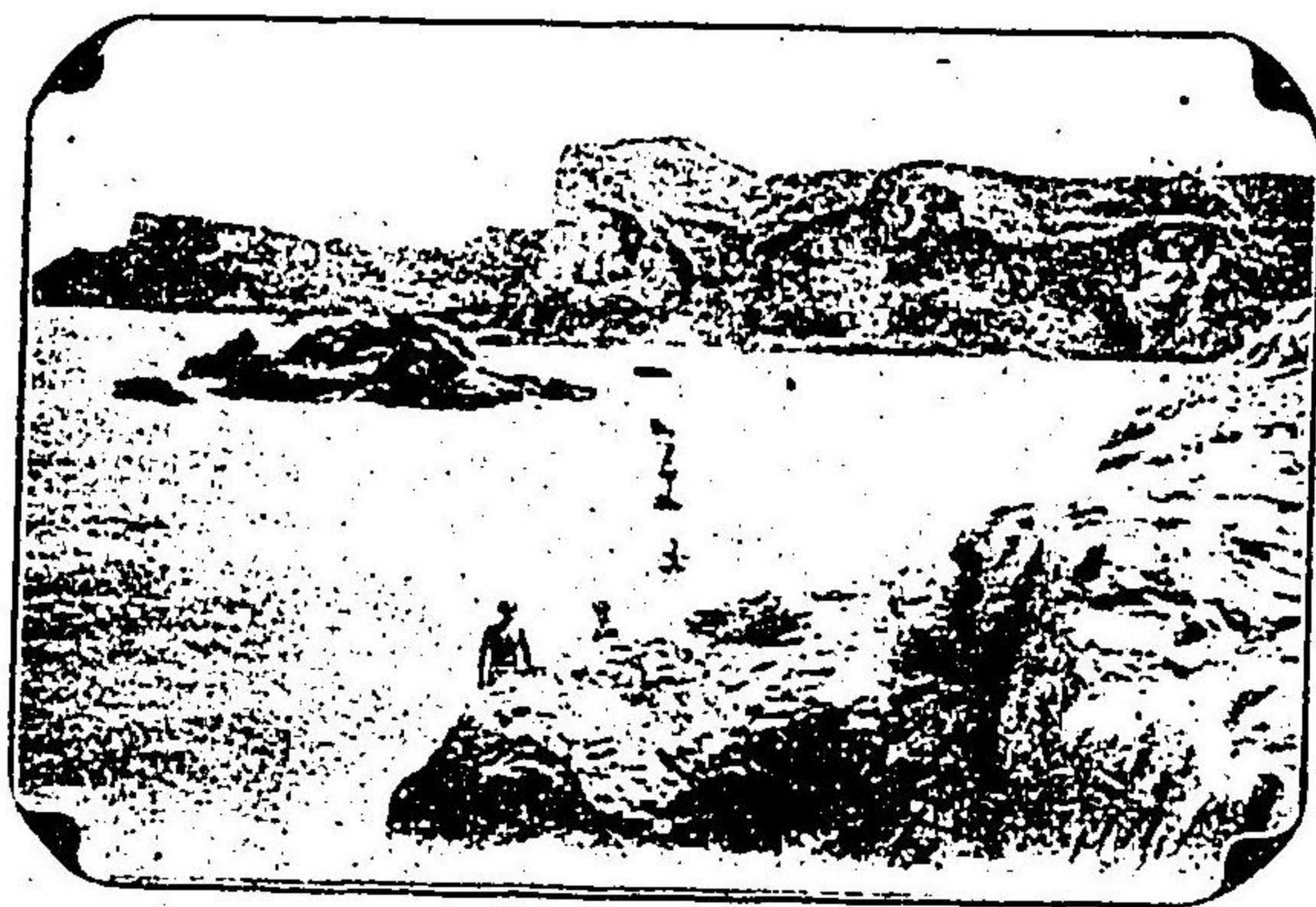
ご安し、東海道海岸の如く贅澤の競争をする必要

もなく心安く鮮魚を味ひ海風の涼を買はんとする

人には最恰好なる可し、

兩國橋一番(午前五時五十分)の汽車にて千葉にて

大東へは九時五十七分、大原へ十時十八分に着、



大原觀音岬

乗換、一の宮へは九時四十四分、

歸り途大原發午後六時五十五分、大東七時卅三分、一の宮七時四十一分を終列車と

し是に間に合へば千葉乗換にて兩國へ十一時三十七分に着、暑中には一の宮大原行

割引往復券を發賣す。

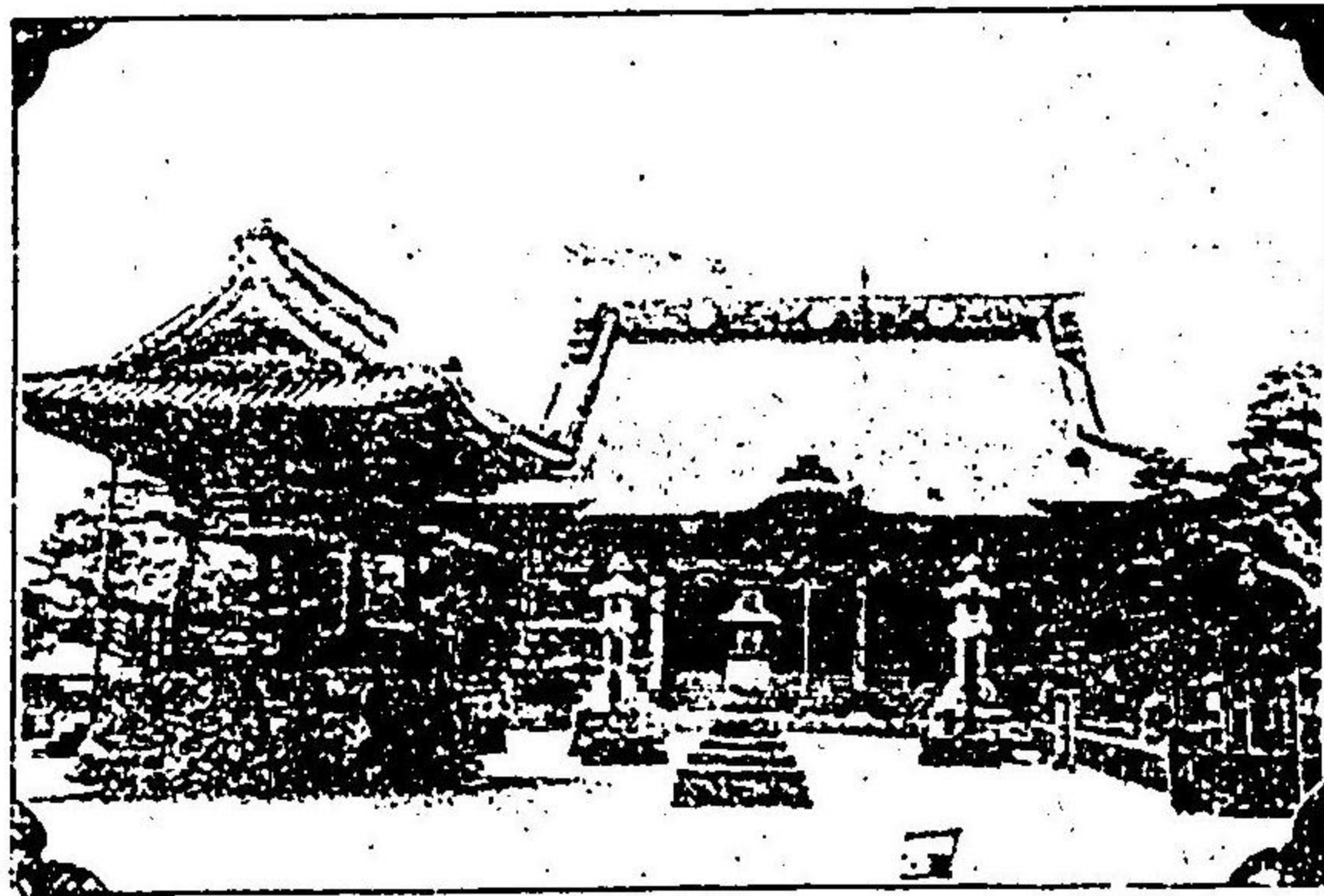
おまわり

川崎

(穴守へ廻るか
歸りば大森か)

川崎の大師は京濱間で最も多くの信者を持つて居る名刹である、大治年間此地の平間某といふ人が海中から弘法大師の像を網にかけて拾ひ取り、是を安置する小堂を作つたのが始まりで、今の如き大伽藍となつたのである、川崎の大師へは汽車でも行ける、電車でも行ける、汽車は新橋から十哩時間三十分、賃金は三等が十七錢二等が廿六錢、電車ならば品川まで市内の電車に乗り、八ッ山から京濱電車に乗つて大師まで僅に十三錢、汽車だと川崎の停車場から人力に乗るか又電車に乗る必要があるが、電車の方は川崎で乗り換へるだけ、すつと大師堂の裏手まで乗つて行かれる、大師堂のあるのは川崎停車場から廿七町、町へ出で左りへ六郷の川ばたを傳ふて西へ行くので此途中兩側に櫻樹數百、花時にはまるで櫻のトンネルに化する、夫かあらぬか大師の毎月廿一日のうち正五九を重しとし更に五月には花見傍の參詣者が非常に多い、花の盡くる處が電車の停車場、夫よりは茶店、小料理屋、目なし

達摩、麥程細工などの店が軒並で納め手拭掛け暖簾赤まへだれが出て招くといふ有様、俗臭紛々たるものである。



川崎大師の本堂

居る六郷川の川下も渡るに何の危険もない、向ふ岸へ上つたら田圃道を凡そ五六町

穴守様の赤い鳥居が數十百千萬と数へる程にあるのを見る、神殿で御利益を願ひ、裏手の所謂お穴へ行くと、石を積み上げセメントで固めて、其石に誰々献納と一々事面倒に記した其麓が山窟になつて茲に又御供物が累々としてある穴守様の御利益はあらたかなものであらうが、信心する人は難有いのでか、名聞にかと疑はれる程、俗臭の劇しさは大師以上であらう、鑛泉の湧き出る處があつて羽田館と云ふ立派な宿がある、其外に幾軒も料理兼宿屋がある、此邊で晩飯を認めて歸るか、大森は海岸の松淺、伊勢源へ寄るか、さらすは穴守様の歸りだけあつて用心に用心を重ねて犬の川端で歸宅後食事と云ふものも洒落たものであらう、穴守から電車は川崎まで十錢、大森の海岸からは四錢。

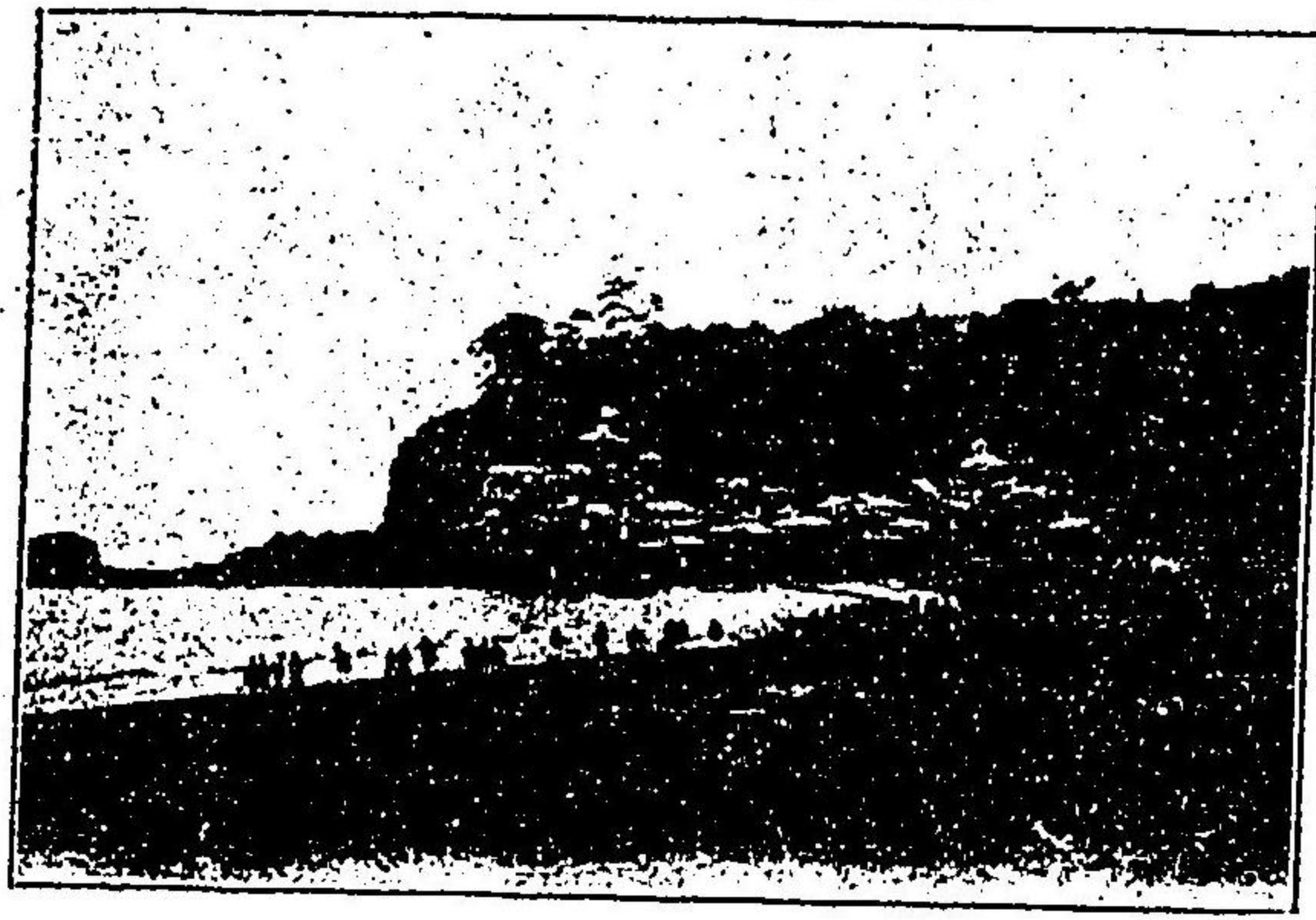
居島大守穴田羽



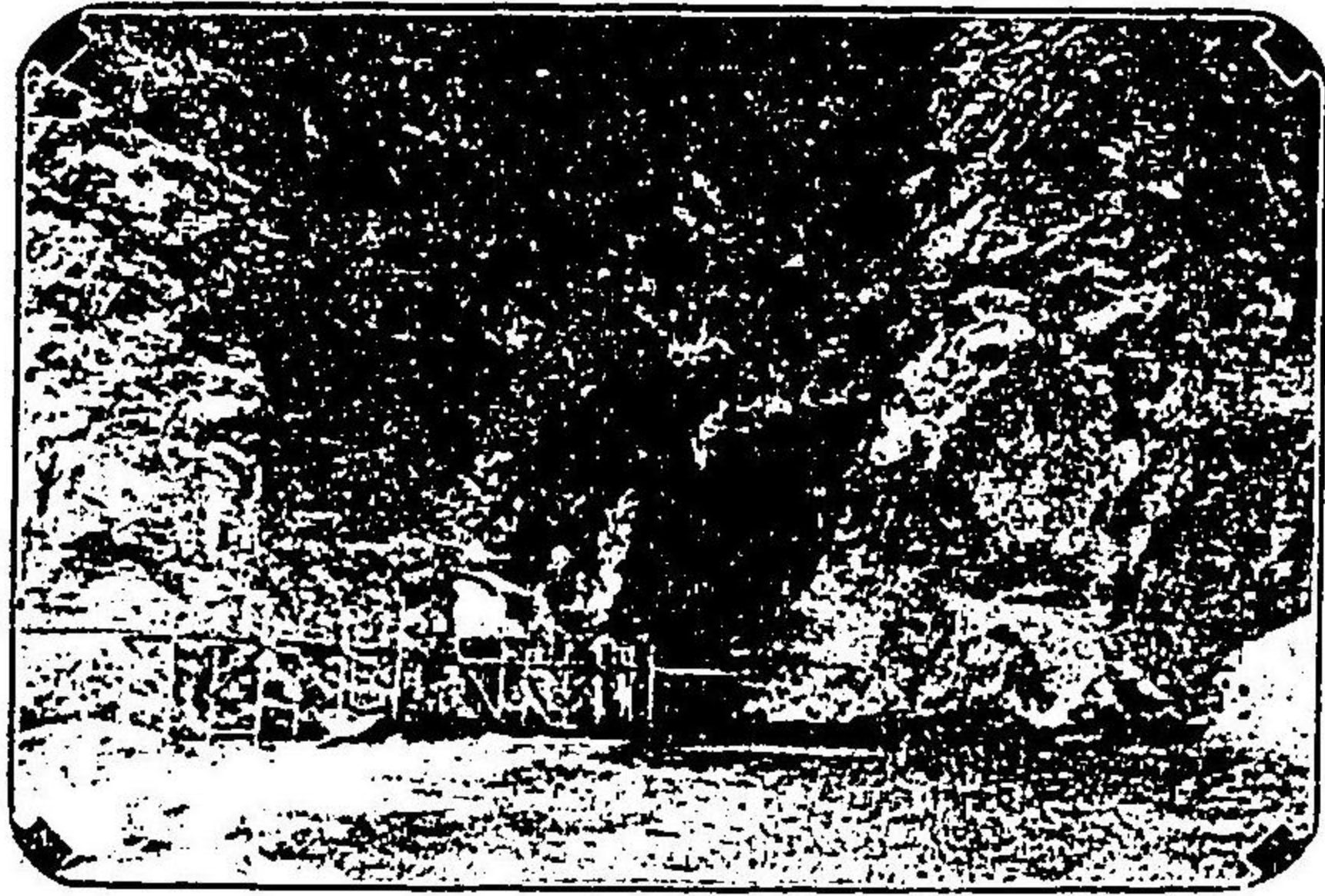
江の島鎌倉は東京から日歸りでの小旅行には最も適當した處で、江の島から廻はつて鎌倉へ行くとも、鎌倉を先にして江の島を歸り道にするとも自由自在、江の島を先にすれば藤澤まで汽車に乗り、茲に下車して、人力を備ひ小栗判官の古蹟を尋ねる可し、遊行寺までは藤澤の町を通つて約十町、本名は藤澤山清淨光寺、境内には判官を祀れる小栗堂、判官の愛馬鬼鹿毛の轡、照手姫の鏡などがある、新橋から藤澤までは哩數三十、時間一時間と四十分、賃金は三等五十一錢二等七十七錢、鎌倉へ行くのは大船にて乗換へ、哩數三十哩、賃金は同額、時間は少し餘計に掛る。藤澤から江の島へは電車あり、人力もあり片瀬川を下る乗合船もある、が矢張電車が好からう、江の島へ行くには片瀬迄の切符片道八錢、片瀬で下車したらば一寸龍の口、寂光山龍口寺へ參詣す可し、茲は日蓮上人御難の地で信心家は見逃しは出來ぬ處、夫より電車の踏切を通つて砂山一つ越へれば目の覺める様な江の島の景色、

江の島は今更でもなければ竹生島、巖島と合せて日本三辨天の一つ、棧橋を渡つて島に着く、両側は宿屋貝細工屋で通り切れない程、宿屋には恵比壽屋、岩本樓、讃岐屋、江戸屋、北村屋、なごあり、坂を上つて左へ更に一二町行くと金龜樓と云ふのもある、何れかを撰んで食事をするなり休息をするなり、偕て御參詣となる江の島神社は三つに分れて邊津の宮、中津の宮、奥津の宮となつて居る、奥津の宮を過ぎると、建長寺の兒白菊が身を投げたと云ふ兒ヶ淵、名物螺の壺焼を味ひながら沖を見る景色は大森から品川沖を見た様なものぢやない、巖を切り崩しては足場を作り鐵の鎖と手摺りして危き道を左りへくと廻る事約一町鮑取らしてお呉れなど水潜りの漁夫どもが赤銅色の體をして取り

む望を島の江りよ濱ヶ里七



圍んで來るのに、試みに十錢を投じると、眞逆様に怒濤の中へ躍り込み、小さな鮑



窟岩天財辨島の江

を持つて來る、金を取つて來る品物とが相應して居るのに驚く事勿れ、チャンと海中に仕懸あつて十錢の鮑廿錢の鮑と品分がしてあつて夫を掴んで浮み上がつて來るのだと云ふ、棧橋に打付ける浪にゆらくする危い處を通り抜けるともう巖窟だ穴は次第く狭く而して低く、人聲、足音の反響物凄く、手に手にお蠟を振り照らして進んでも次第に暗は深くなつて薄氣味の悪い事夥しい、奥へ入ると道は胎藏金剛の二筋に分かれて亦一つに合し、突當りに大日如來が安置してある、是から先へ突き抜けると富士の入穴まで行かれると案

内者の言葉、段々穴が小さくなるから到底も歩いては行かれぬとは洒落にもならぬ

話、歸りには繪葉書貝細工のお土産を調べ、再び電車に乗るか、七里ヶ濱の長汀曲浦をぶらりくど歩くか、いづれにしても草臥れたら電車に乗る事にして、途中見ること可きものは腰越の満腹寺、義経が京都から引返へして来たが、兄頼朝が逢つて呉れないので辨慶に腰越状を書かせて引返へした處、それから日蓮上人龍の口御難の時鎌倉より赦免の使者と刀の折れた奇瑞を知らせの使者とが行合つた行合川、新田義貞が鎌倉攻めの時黄金造りの太刀を投げて干潮を祈つた稻村ヶ崎、日蓮上人の袈裟掛の松を見ると、やがて極樂寺の切通しへ出る、茲からもう鎌倉第一に長谷の觀音、切通しを下りると星月夜の井戸がある、覗いて見たれば豈でも星が見へる、左様かと井戸側へ掴まつて一生懸命に見ると何だか瀬戸物の皿の様なものが見へるが是が星かも知れない、觀音は佛工春日の作で二丈六尺十一面、カンテラを紐に縛つて引上げると同時に端嚴微妙の御相を拜して外へ出ると、由井ヶ濱の打寄する浪磯馴れの松中々に好い景色である、も一つ鎌倉權五郎の社に賽し權五郎の手玉石袂石是かと怪しんではいけない、證據に指のあとが付いて居る、が容易に手玉にはなり

そうもない、けれども社前の力餅を澤山に喰べれば持てる筈だと餅屋の親爺の言葉



鎌倉大佛

觀音の前を戻つて大佛へ參詣、奈良の、次ぎの大佛だ、高さは三丈五尺、膝の周圍が五間半、腹の中に觀音六體阿彌陀三體が入れてあるので大きいものぞ知れよう。大佛を見たらば大急ぎにて由井ヶ濱へ出で鎌倉宮へ參詣す可し、鎌倉の宮は護良親王の靈を祀つた處で、本殿の脊には親王が尊氏の爲めに押籠められ、最後に淵邊伊賀守の手に御命を喪はれた土の牢がある、神官に頼めば牢の入口を開けて中を覗かせて呉れる、ぞつと土臭い風が身に染みて、今でも親王の賊徒を怨む御心が残つて居る様に思はれる、夫から荏柄の天神、頼朝の墓、大江廣元島津忠元の墓などを見る、頼朝の墓

は鎌倉幕府を開いた人とも見えぬ程、質素な丈は僅に五尺ばかりの五輪塔、苔蒸し草茂く英雄畢竟生きてる内の感がある、夫して墓から下に見る田圃は昔源家三代の邸宅が美々しく建て連ねられて居た跡だと云へば尙更の事、茲より僅三四町鎌倉の八幡宮に着く、運池を圍はつて鳥居を潜れば第一番に朱塗の拜殿、是は静が法樂の舞を演じ賤やくの歌を味じた處、夫から石段に掛つて直ぐ左手の大銀杏が、公曉が賀朝を打たんとして隠れた處、石段を上り切れば樓門、拜殿、左右の廻廊には寶物あり、樓門の前に立つて眺めると正面の大道は並木の古松遙に海まで續いて其先には由井ヶ濱の白浪、此外に淨明寺、光觸寺、光明寺、建長寺、延覺寺、といづれも名刹だから見物して廻はつては鎌倉だけでも一日では足らず、青戸藤綱の錢を落した滑川、藤原の俊基朝臣が斬られた葛原岡神社、景清の土牢のある化粧坂等は又ゆるくの時に讓る可し、八幡社から鎌倉停車場へは僅に七町ばかり。

ゆきん

御嶽

(新月ヶ瀬の吉野村に御嶽の乳洞へは茲からは遠くなし)

飯田町を甲武線の汽車に乗り立川驛で乗り換へて日向和田まで行く、哩数は約三十四哩、三等の賃金五十六錢二等八十四錢、飯田町を五時の一番で出れば日向和田へ七時半に着く、茲より多摩川に沿ふて甲府街道を二里、萬年橋と云ふ處で街道を放れ橋を過ぎ拂子澤を経て、御嶽へ上る、麓から頂上まで坂路三十町、絶頂に御嶽神社あり、崇神天皇七年に大貴已命、少彦名命を祀つたもので海拔三千八百尺、盛夏も秋の如き氣候本社拜殿の壯麗を見、袂の瀧、七代の瀧、綾尾の瀧に心身を清めおほん岩、圓山、日の出岩、那具雄峯等の奇勝を見る可し、歸路は新道を取り此頃新月ヶ瀬の稱ある吉野村、駒木野にて多摩川を渡り青梅町に入る此間御嶽より三里、多摩川の沿岸繪の如きを賞しつゝ流を下るは燃ゆるが如き満山の紅葉と、白絹を晒すが如き清流と對照の妙亦面白からう、御嶽の山中には祠前に御師の家十數軒あり、頼めば食膳を供し又夜泊させて貰ふ位の事は出来る、日向和田より甲府街

道を多摩川を溯つて氷川村と云ふに至り多摩川の本流日原川に沿ふて山間に入り日原村の鐘乳洞を尋ねるも亦有益なる旅行であらう、日向和田より日原まで十八里氷川まで約半分道は人力車あり。

かいすゐぶく

稲毛

(藤根に甘藷先生の菜を
訪へ歸途は千葉見物)

稲毛は海水浴場としてばかりでなく夏は冷しく冬は暖で日歸りで遊びに行く處としては非常に好い、汽車は兩國橋から稲毛驛まで二十哩時間は一時間半、賃金三十三四錢二等五十一錢、稲毛の驛を下車するともう僅に七丁鬱然と繁つて居る松林が目あて、右に東京館左に養生館、中央の森の中のが海氣館と云ふ宿屋、松は御料林だどやら千古の翠滴るが如く、海は遠淺の浪靜に左には房總の山々、遠くは東京灣を往來する白帆を眺めて繪の様な處、海氣館には松林の間に離れ家が幾棟となくあつて、松風の颯々たる間に獨茗を煮て啜れば浮世を放れた奥山住居の感がある、内所話も人には聞かれず眞に落ち付いて居心の好い事此上もなし、窓を開けば後の山も前の庭も松ばかり遙に海の色も松の翠を通して眺め、味ふには鮮魚の庖丁鮮やかなるものがあり、遊ぶには碁將碁、玉突臺もある、浴場には海水の湧かしたの、一浴び浴びて松林の中を散歩する館の西に當つて八幡社、更に西するに檢見川

かいすゐぶく

かいたるよく

の町、鐵道線路の方へ出で幕張の方へ足を向けて行く



浦ヶ袖りよ山松毛稻

の青木昆陽が地を相して第一に茲邊に植え試みたものだそうではらん、松の二三本ある小山の中に甘藷先生の墓と云ふのが建てられてある、館から東へは磯づたひに僅一里で千葉へ行かれる、宿泊料は三館とも壹圓から貳圓、晝食は壹圓見當、朝早く出て悠つくりして食事の後、精々膝まで位しかたない海の遠淺を飛び廻はつて鰈を手取にしたり蛤を掘り出したり、巖に付いて居るほうづきを取つたり、子供連れでも危険のない愉快な遊びに疲れた處で、晚餐を認めて歸る事が出来よう、或は行き路に船橋習志野を見物するか、歸りに千葉寺院内にある千葉神社、大日寺、金渡神社、寒川

の名所、千葉氏の城址猪の鼻臺、

神社、さては寒川や袖思が浦にたつ畑君を待つ橋身にぞ知らるゝの君待橋を見物し夕方の汽車にて千葉より兩國橋まで、哩數は二十二哩七鎖、時間は一時間四分三等賃金三十八錢二等五十七錢。

かいたるよく

おまわり

堀の内と新井

(春は摘み草
秋は栗飯草)



堀の内仁王門

堀の内のお祖師様と新井の薬師とは同一日に参詣する事が出来よう、堀の内へは甲武線中野迄、電車で行かれる、中野で下車して南への道は堀の内、踏切を通つて北へは新井への道、堀の内へは約十七町許り、納め手拭の軒先にひらくする茶店十数軒を通り過ぎるといかめしき柵、門、池上の本門寺ほごには行かないが伽藍頗る壯麗、本堂は日蓮の高弟日朗の作になる日蓮の像であるそうだが、毎年池上本門寺と前後してお會式がある、満都の難有連が殆ど堂内構内に溢れる程に詣るそうである、新井の薬師へは中野驛から僅に十二三町、兵

營の側を通つて田市路の突き當り俗に子育薬師と云つて参詣者は中々に多い、秋は枯野を見ながら、名物の栗飯を喰ひ雑木林の紅葉を賞しつゝ、一日のそいる歩きには丁度手頃の場所であらう、甲武線の汽車で吉祥寺まで行き驛から四町ばかりで井の頭の辨天がある、池は其水清冽、昔徳川家康が茶を煮る料にとて態々汲ました處、後に神田上水の源となつたのだそうだが、池の周圍幽邃閑雅、紅葉の頃もよし、涼みにもよろし。

蒲田と小向井



蒲田梅屋敷

蒲田には汽車の停車場もあれども、京濱電車の停車場梅屋敷は蒲田梅林のすぐ前なれば是に依るが好し、茲まで電車賃八ツ山より七錢、下車した直ぐ右手の大きい家が梅屋敷の山本と云ふ家、其庭に入ると老梅數百、庭廣からず何の眺望もない處であるから風情は妙い、園内には天皇陛下の嘗て御休憩になつた玉座の跡がある、梅干、梅びしほをお土産にして茲を出で、再び電車に乗り川崎で下車して（川崎まで電車賃五錢）西北へ十五町許りで小向井の梅林を探る可し、梅林は六郷川に沿ひ香雪全村を掩ひ樹の多いのは蒲田の比にはあら

す、成島柳北等が是を評判して以來世間に知る人多くなりしも此頃には又さびれたる風あり、土地平坦なれば雅致はなけれど、茲の梅を探り、直に川端に出で舟を備ひて川崎若くは穴守へでも廻はらば好い遊山となる可し、若又流を溯つて西へ十二三町を辿れば小杉村に最明寺と云ふ寺あり、本堂には大日如來を安置し北條時頼の建立と稱せられ今は見る影もなければ尙閣魔堂觀音堂あり昔の壯麗なりし係を殘せり。

海水浴

館山

(名所は鏡ヶ浦
観音は那古と船形)

東京湾汽船を利用して曉の六時靈岸島を發する一番の船で東京湾に乗り出せば北條



船形の觀音

に樂しからう、北條も館山も有名な那古の觀音も船形の觀音も同じく鏡ヶ浦の灣に面して汽船の發着所になつて居る、北條と館山とは沙入川を境にして相並んで何れ

館山へはいづれも十二時前に着く、汽船賃は片道六十四錢、歸りは最終の館山發船が午後八時で靈岸島着は午前三時、目的地に居る時間が僅に八時間、少しく心細い感もあるが、都人士は馴れないが海上の旅行は、非常に愉快なもの、殊に歸途を月夜の晩にでも選めば如何に面白く如何

も海水浴場として五六十錢見當で宿泊する事の出来る手軽な避暑地として、景色もよし食物は魚が豊富にある事などで近年中々學生などの評判が好い、北條には木木屋、吉野庵、吉田屋、館山には松岡、藤屋、鶴屋、田村屋等がある、館山公園は町の丘上にあつて鏡ヶ浦の風光を一陣に集め海上鷹の島、沖の島を手取る如く見る事が出来る、大日岩、琴平神社、さては里見義實の城址と傳へられる城山など見、那古、船形を見物する都合にして急ぎ出發す可き事、那古は坂東卅三觀音の一、那古の山腹にあつて、うしろは斷崖、前は鏡ヶ浦、頼朝の建てた仁王門三重の塔などあり、船形も殆ど那古と相似て斷崖中に本堂あり、那古は行基の開基にして茲は慈覺大師の草創、同じく鏡ヶ浦の風光も、館山公園で見ると、那古、船形、見る處の變はるに従つて千態萬様、面白き事限りなし、鏡ヶ浦には灣内多々良の落雁、船形の歸帆、那古の晚鐘、湊の夕照、八幡の晴嵐、城山の秋月、宮城の暮雪、沙見の夜雨一々海岸を尋ねて見るも面白からう、忙しそうでも男の足、草鞋脚絆の覺悟あれば日歸りの旅で十分。

おまぬり

池上

(近くは八景園邊
くは矢口の渡)



池上本門寺

日蓮上人が入寂の地である池上の本門寺大森停車場より約二十町、新橋から汽車で往復が十三銭、京濱電車でなら八ツ山から往復九銭、大森停車場から人力車は二十銭から三十銭の見當、徒歩でも道はよし三十分もかゝればゆるりと行かれる、踏切を越して突當りは梅花で有名な八景園、山上に上つて東を望めば大森の海岸松緑に浪ほの白き景色遠くは房總の山々まで青煙を敷いた如き海の彼方に見られる、本門寺の山號は長榮山、創立は弘安四年、彼の元寇の國難を日蓮が法力で起した神風に防いでから問もなくの事である、高き石段を

上ると右手に五重の塔、本堂の左には釋迦堂、眞骨堂上人廟などの建物あり、上人廟の傍に日蓮上人硯水の井、廟の中には上人寄り懸りの柱あり、廟の前の櫻は毎年十月十二日丁度會式の頃に開くを以て會式櫻と呼ばれて居る、會式の當日は大森より池上まで殆ど人を以て埋めたる如く、お籠と稱して本堂に徹夜する人数千、沿道大箒を焚いて徹夜押返へされぬ様の參詣人に便する程である、本門寺の北隣には礦泉の湧く處があり、夫を温泉にして旅人宿兼割烹の明ぼの樓と云ふのがある、山より中腹に掛けて建連ねられたる幾棟の間に梅樹數千、南天約一萬株、花時には美しいものである、其上見晴はよし閑靜で、都はなれがして如何程好いか知れない。本門寺から西へ半道勝海舟の墓のある馬込お洗足の池、夫から多摩川に沿ふて下流の矢口村には新田義興を祀つた新田神社、義興が江戸太郎左衛門等に討たれた矢口の渡近くには義興ご死を共にした臣下十人を祀つた十騎社あり、是等を見物して夜に入らぬ間に歸る事が出来よう。

とうち

成東

(東金に出て九十九里見物佐倉へ寄つて宗吾刑場を訪ふ)

成東の鑛泉は獨逸の何とやら温泉と同質であつて婦人の病氣には非常に利く、茲で



成東浪切不動原

ち頂上に一つの祠がある、昔は九十九里の濱が此邊で太平洋から打寄する波濤は此巖石に打切られたと云ふので、茲に安置されて居る不動様の名を浪切不動と云つ

ゆつくり湯治をなされれば子供の無かつた方でも屹度出来ること云ふ、汽車は兩國橋から銚子行へ乗つて哩數四十五哩時間は約三時間、(二等賃金一圓十四錢、三等七十六錢) 停車場から鑛泉の成東館へは僅に十町ばかり廣々とした平野の中に二階建の一棟がそれである、裏手には巖石聳え立

て、海上安全の守り神であるそうだが、樓上にと廣々とした景色、春ならば處處々に桃の花を點じて麥隴菜圃、うらくとした景色に、此家の方針として成る可く家族的にと云ふので心置のない食事を濟ませて鑛泉に入る、體の筋が緩むた様に心持の好くなつたのに任せて浪切不動の山に登る、左程の高さでもなければ、切立てた岩道頂上まで行けば一寸息が切れる、頂上からは遙に九十九里の濱が見える、歸つて又一風呂ゆるく夕飯を喰べて歸るもよし、人力を備ふて東金まで一里を走らせ、東金の城址、三王臺、小野の小町の生地、本漸寺、鶴沼池、さては日吉神社、八坂神社などを見物して東金から房總線に乗り大綱で乗り換へ千葉を経て兩國橋に向ふ、又は成東より佐倉まで汽車に乗り、茨臺と稱し舊佐倉藩の刑場を訪ひ佐倉宗吾處刑の跡を見、將門山に將門祠に賽し千葉より兩國橋行に乗車するもよし。

ほたる

大宮

(櫻よし蓮の花も
よし温泉もあり)

昔は關東の中樞として牟差志の府が置かれてあつたと云ふ大宮は其名残か武藏の一の宮と稱せらるゝ、官幣大社水川神社が二千餘年の舊社として松杉暗く生ひ繁り神寂びたる町外れに鎮座ましまして居る、其境内が大宮公園、二萬餘坪の廣い處池には蓮の花、松杉の緑を彩る櫻、其上に本社裏手の山からはアルカリ鑛泉が湧く、静に遊ぶ可く病を養ふ可く宿屋が萬松樓、八重垣などあり。

上野から大宮驛まで汽車卽數十六哩六鎖二等賃金四十二錢三等は廿八錢、時間は約五十分、停車場に續いての大宮工場は規模頗る大きく汽車をぞしく製作して居る、停車場の前を半町ばかり兩側の宿屋茶屋の掛聲を聞き流して大通に出る、左に折れて又右に曲り七八町で水川神社の入口、人力車に乗つても十錢か十五錢の所、神社の入口から兩側は杉の並木正門を這入つて拜殿、結構壯麗と云ふ程ではないが壯嚴のお社で素盞雄尊、大己貴尊、稻田姫を祀つてある、拜殿から右へ折れると池

がある、池の兩側に幾軒もの宿屋、温泉は色々の病氣に利く食べ物も決して悪くはない、宿を出て池の周圍裏手の小山を散歩する、公園から北へ五六町の鹽田山と云ふのは上杉管領の旗下鹽田忠資が城址だと云ひ傳へてある。

螢は大宮の名物であるが螢狩までしてその日歸りと云ふのは頗る困難な仕事、出来るならば泊り懸け、翌朝早く歸るとしたいものである、螢の多いのは公園から東へ七町ばかりの見沼川、川幅も廣からず兩岸は草生ひ繁つたつまらない川であるが螢の大きさと來たら、又其の多いと來たら東京の人は必ず吃驚する、先づ船を仕度して午後八時頃下流から次第に漕ぎ上る、螢火亂飛と云つても東京の人の目には想像は出來ない、縦横無盡に大きいのが飛び廻る、線香花火を揚げ詰めにして居る様なもの、兩岸の草叢には是又露が宿つた様にべつたりと止まつて譬へる物のない程美しく光つて居る、此方の岸へ寄せ又彼方の岸へ寄せて舟の上から手を延ばし手捕にして用意の籠へ入れると忽に三十や五十は取れる、其面白さは云ふに云はれず形容も出來ない、若舟に酒肴の用意あり、流に任して舟を浮べ飲みながらに賞翫した

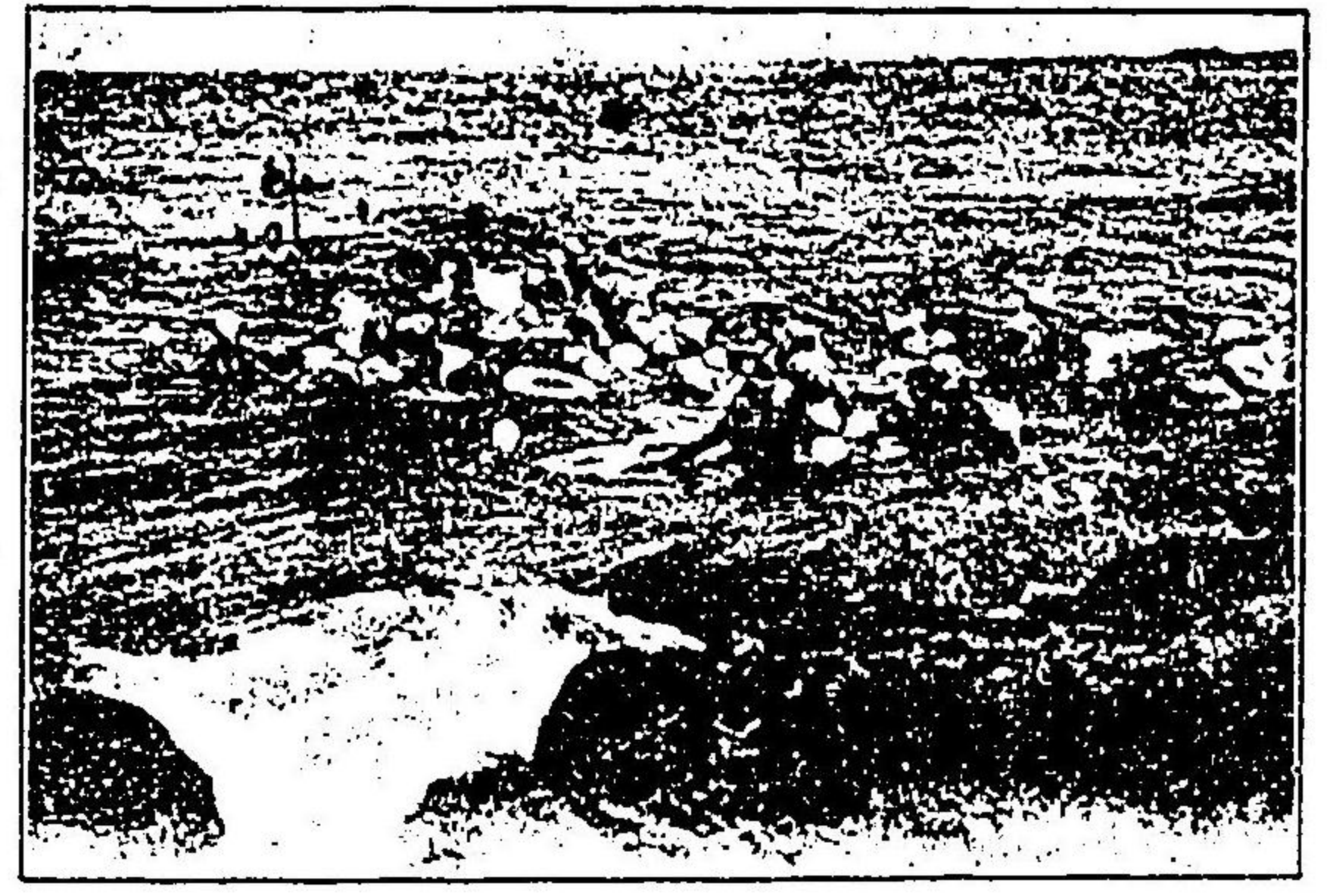
ほたる
 ら如何程の愉快さであらう、螢は出始めが大きく、次第／＼に小さくなるのであるから、「螢も近々御飛散相成り」と螢を御の字で扱ふ大宮の宿屋の廣告が新聞へでも出たら早速出掛けて御見物が願ひ度い、夜露で浴衣は濡めつぼくなる、従つて疲れるが、急げば終列車で歸れない事もない。

(38)

かいたすいぶく

大磯

(鴨立澤を見、化粧坂の化粧園子に召せ)



かいたすいぶく

大磯海水浴

鎌倉時代には海道第一の繁華な處、虎、少將等の遊君を出して鎌倉の銷金窩であつた處、明治になつて松本順先生が海水浴の効能を唱道してから忽ちに繁昌を極める小都會となつた、謂はゞ海水浴場の先達で、諸般の設備が完全して居て、今では洋食屋玉突場、新聞場、小料理屋、藝妓屋等何でも無いものは無い姿で俗化し盡して風雅な田舎らしい處は無くなつたが、却て當今の人情華美を競い驕奢を誇りとするには合ふかして矢張盛に人が出る、別荘は山手と云はず町と云はず軒並にある、其外海水旅館は、有名な濤龍館、招仙閣、

長生館を始めとして甲喜樓、山本、百足屋等數十軒ある、停車場から海岸へは僅に三町許り、海は遠淺で浪こそ少し荒れ危険の少ない女子供にも泳がれる處、停車場から西へ五町の町端れに彼の有名の鴨立澤、西行法師が『心なき身にも憐は知られけり』と詠じて庵室を結んだ西行庵、歌にばかり有名なのではない、寶永中俳諧師大位三千風が庵居してから俳諧にも道場となつた處である、町の中央延壽寺の本堂には曾我兄弟の木像、寺内に虎子石あり、鎌倉時代に遊廓なりし化粧坂は停車場より東の踏切の邊にして昔の名残としては化粧團子を賣る茶店あるのみ、夫より東へ數町にして相模灘を一望に眺むる高麗山、更に一町にて花水川、頼朝が花見に來りし時花既に散りたる跡なればとて花不見橋の名ある橋あり、新橋より大磯まで汽車四十哩餘三等賃金六十八錢二等一圓〇二錢、時間は二時間と少しなり。

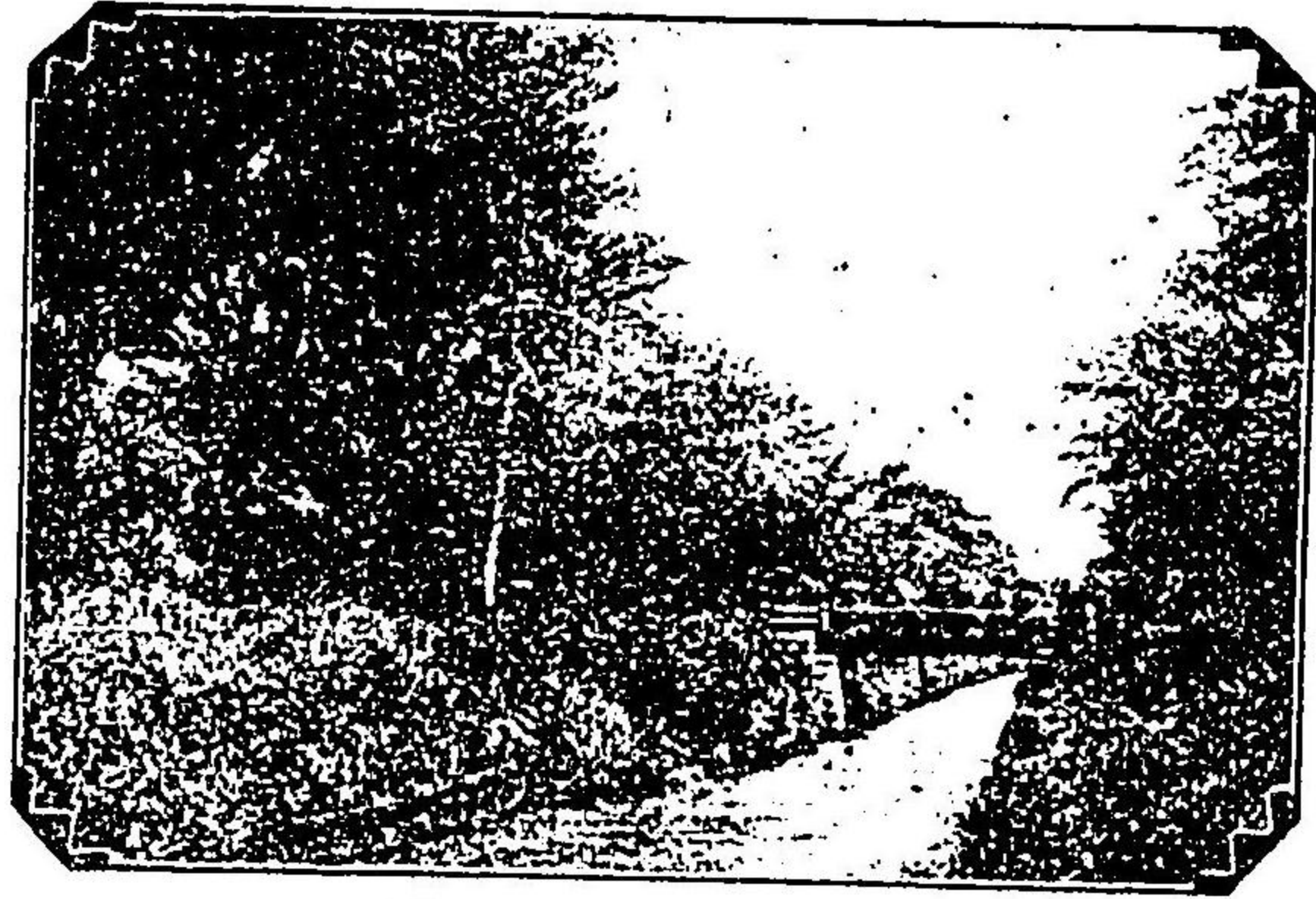
さくら

小金井

(國分寺の古瓦)

小金井の櫻は悉く八重であるから上野隅田を見盡したあとでよろしい、承應年中常陸櫻川から移し植えたもので多摩川上水の兩側の堤約二里と云ふもの櫻のトンネル水は清し花は艶なり、飯田町から甲武線境驛まで僅に十三哩、時間約二時間、賃金三等廿三錢二等三十五錢、境國分寺共通の往復切符花時に限り發賣さる、境で下車して約十二三町多摩川堤に出るテラリホラリと櫻の花を眺めながら次第に上へ上るに従つて花は漸く多く、堤の中央小金井橋の附近は枝は枝に相連なり、香雲水に映じ、落花は緑に紅の友禪模様、向島を二つ合せて向ひ合せたもの、如く、唯美しいとより多くは云はれぬ、兩側に料理屋水茶屋軒並にあり、うで玉子の六錢、海苔卷の一人前廿五錢など、高い處もあるやうなれど、矢張腰掛に敷いた赤毛布の田舎びた處に、面白處あり、草鞋かけ、編上げでの花見るは先づ好い處、小金井橋より更に流を上り櫻漸く少くなる邊より左に折れて約一里で國分寺の停車場へ出

る、停車場を前に左へ十数町、



小井の櫻

少しは干渉するかして左程の事も

昔の國分寺の跡が山門の礎のみを印に境内へ這入れ
ば古瓦累々として山の如し、手に取つて見れば布
目あり、是は何百何十年のものサなご一寸捻つた
講釋でもする人には結構なお土産、但し重いのは
御覺悟の事と仕る、國分寺から半里で府中へ着く、
昔の八王子街道の要衝で今でも頗る賑なもの、
町の中央に六社明神と云つて大國魂命小野神、
小河神、氷川神、松山神、金鑛神を祀つた、大ま
い社がある、是が評判のお祭即毎年五月五日、
神輿の假屋へ移る晩に町中一つも燈火を點せず、
近郷近在から男女老若の別なく出掛けて来て色々
の悪事が遠慮なく行はれる處、併近年は警察でも
明神の西南十町で多摩川の岸へ出

る、新緑の未若く流の音淋々正平年中、新田と北條の戦つた分倍河原といふのは是
である、國分寺へ戻る、草疲れたら人力車あり僅に十五錢か廿錢、國分寺から飯田
町まで十七哩、時間は一時間と五分、三等賃金廿九錢二等で四十四錢。

とうぢ

箱根

(早雲寺の瀧)

箱根へ日返へりて遊びに行かうといふのは頗る六ヶ敷い問題であるが、箱根も塔の澤か湯本などは裕りして一日を松籟洞壑に心耳を終まして暮す事が出来ようか。新橋から箱根へ行くには國府津まで汽車四十七哩、三等で七十八錢二等で一圓七錢、回遊列車の時には更に幾割かの割引がある、時間は二時間と二三分、急行車に乗り込めば一時間半以内で行く事が出来る、國府津で下車して湯本までは電車鐵道が約五十分、賃金は三等で三十錢、途中酒匂の川を渡る時既に箱根の山に白雲の濛々として掛かるのを見るであらう、小田原の町に入つては、町の家並を越して鬱蒼たる城跡の木立、小田原名物いろいろ屋の看板を見、早川の流れに沿ふて走り出せばぢきに湯元である、福住橋を渡れば福住をはじめ温泉宿澤山と湯元細工の賣店軒を並ぶ、福住橋を渡らず川沿に上へ上り對岸に渡り爪先上りの坂道を上る事五町にして塔の澤に着す、溪流は玉の結橋、千年橋の下遙に巖を噛み水聲松風の如し、



瀧の垂玉根箱

塔の澤には環翠樓、玉の湯、細玉の湯、福住等の温泉宿あり、湯元に着する節すぐに見物するか、左もなくば、宿へ着きて後、湯元は福住の前より旭橋を渡り須雲川を溯つて玉簾の瀧を見物す可し、瀧は高さ十數間、幅七八間、素絹を掛けたる如く

又玉簾を掛けたる如し、但し瀧の邊一帶私有の庭園となり入場者の金十錢宛取らるゝは情ない心地なり、歸道早雲寺に立ち寄り北條早雲の木像寶物等を見せて貰ふ可し、早雲寺は質素なる寺院、北條氏勃興の當時を想察し得て面白し。

飯後其邊を見物をして午後ゆつくり湯に浴し食事をしそらく歸途に就かば非常に夜を更かす心配はなし、但し塔の澤よりは箱根山中の都會なる宮の下まで僅に一里、

幽邃閑雅なる底倉へは宮の下より数丁、歸るのが厭にならば日程を變更して更に大に發展す可し。

海水浴

銚子

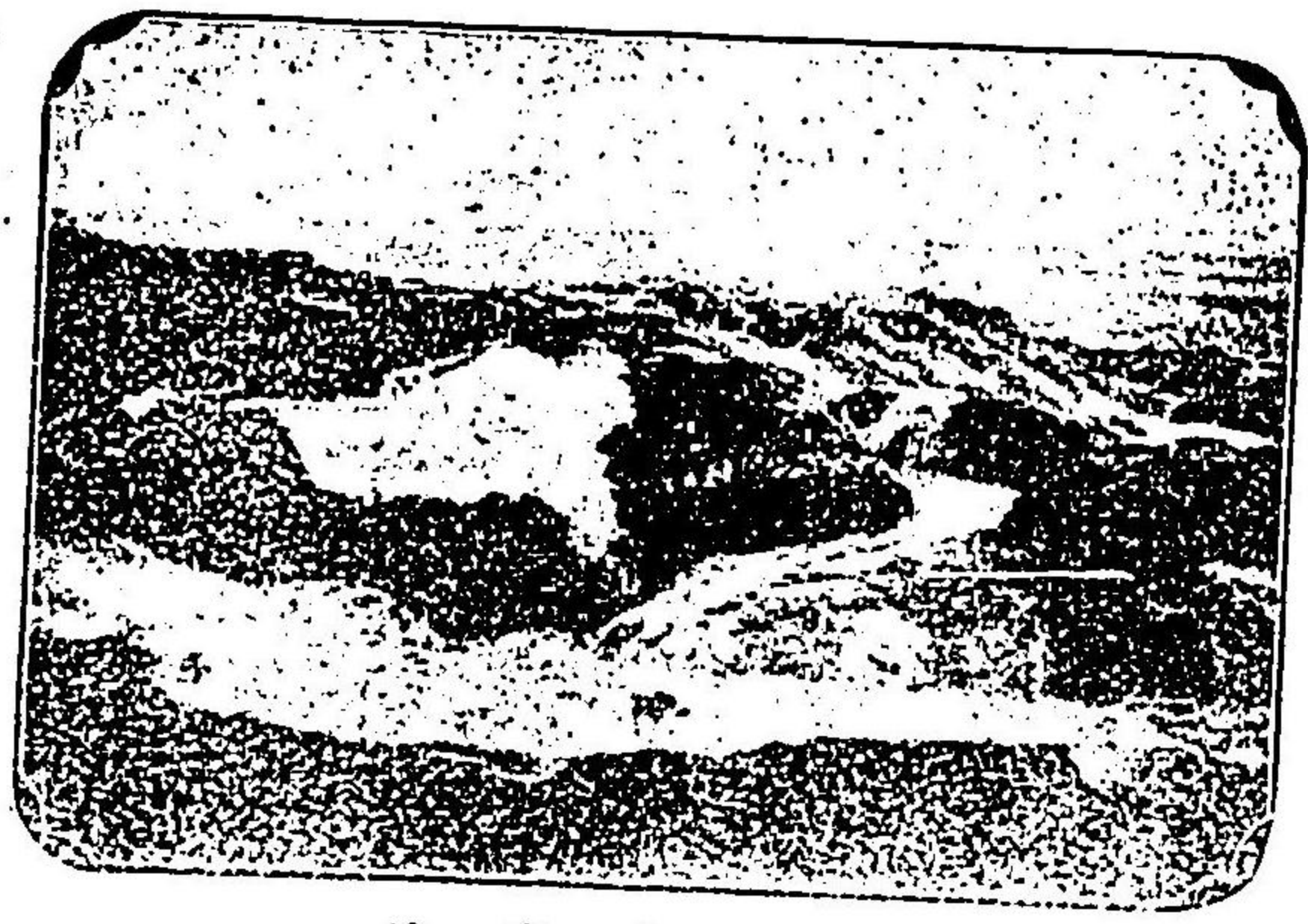
(大漁踊の野趣)

大森羽田さては鎌倉江の島の水も海は海であるが、謂はゞ女性的寄せて來る浪もチヤボトと行水盥を掻き廻はすに過ぎないが、銚子となると海も本物である、對岸は何にしる亞米利加だもの、夫に向つて突出て居る犬吠岬に當つて碎ける大浪小浪は凄まじい許の壯觀、水沫は雨の如く霧の如く、岸に立つて見て居る者は袂や袖を濡すばかりか、腋下自ら冷風湧くの懐があるであらう、銚子の犬吠岬から上總は大東の岬まで船形をなした海岸は鯨の捕れるので有名な九十九里海岸、海岸の名物、大漁踊を船頭の謂ゆる大模様のまいわい着たる姿で見る事の出来るのも漁村の面影いちじるしく莊嚴なる海岸の波濤掀翻に對して面白い對照であらう。

銚子へ行くには總武線兩國橋驛から汽車に乗るのが最便利である、(外に靈岸島から船で霞ヶ浦を廻はつて潮來出島を探り鹿島香取を経て銚子に行く途もあるが、是は稍日時を要する、詳しくは七日の旅を見られよ)、兩國橋から出る汽車には成田行も

海水浴

あり、大原行もあるから、成る可く調べて置いて銚子へ直行の列車へ乗り込む方が



銚子犬吠崎

時五十分發)か二番七時半發にして飲むなら落付いて飲む事にした方が好いであら

好い、兩國橋を朝の一番即五時廿五分に乗り込むと銚子へ着くのは十時半、ザット五時間哩數七十二哩、汽車賃は三等が壹圓拾貳錢二等が一圓六十八錢であるが夏季中は割引往復切符があるから夫を買つた方が便利で而して經濟である。歸りの汽車は銚子發の終列車午後六時五十分發のを選まねばなるまい、夫で兩國へ着くのが午後十一時五十五分であるから、まる一日の遊びとなるのには是では肝心の銚子には九時間しか居られない事になり、肴の新らしいの、夕暮方の海の景色、見捨難いもの、多い人は一泊して翌朝の一番(四

う、銚子の町は何の變哲もない處犬吠岬燈臺に近き處を鶏明と名付け茲に海水浴場があつて曉鷄館、水明樓、浩養館、洗心樓等の旅館がある。

犬吠岬に近く海には大黒島、鶴島、助島、一の岩、二の岩の點景あり、飯岡の圓福寺、川口の千人塚、日高川の清姫に似た其話を由緒とする川口明神等閑あらば見物す可く、大漁の懷温き漁夫を搾つて下腹の毛まで抜いて仕舞ふ筈の松岸の遊廊も昔の俵はない。

銚子より戻り道の停車場のうちで飯岡で下車し岩井の龍福寺に有名な四十八瀧あり、今は其七八を残すばかりであるが、怒濤を見て更に飛瀑に臨むる其趣き自然に相違があつて面白からう。

「海上の沖つ八沙路雲さえて

うらわの千舟朝びらさせり」

春海

おまわり

大雄山

(二十八宿の山道)
莊嚴寺献供式

小田原の道了様と云つたら、東京では可成な人氣のある神様、松田停車場から約一



小田原道了袈裟掛松

里半南足柄村字關本にある、寺號は
最乗寺應永年間に了庵禪師の開山に
係るものであるが、道了と云ふのは
了庵禪師の弟子非常の強力で開山の
時山を拓き樹を切り木石を運搬する
など殆ど神業であつたが、死ぬかど
思ふと忽ち天狗と化して後は永久に
同山の鎮護を誓つたと傳へられてあ
る、其道了權現が殆ど主人同様になつて荒神様として成田に繼いで賑やかな信徒を
澤山に持つて居られる、松田からは人力車で三十錢、馬車なら十五錢位、馬返から

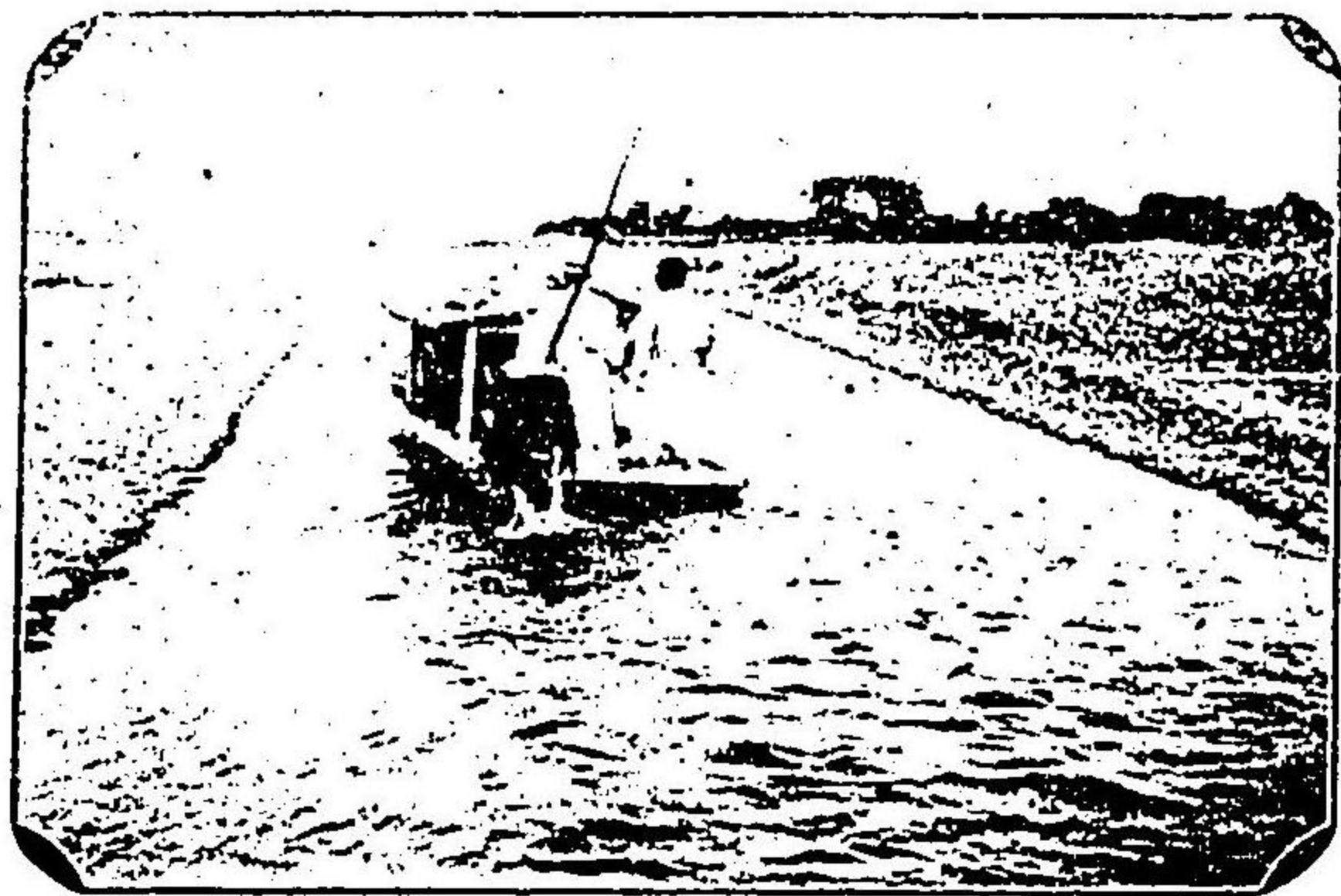
絶頂まで内端の二十八町、是を二十八宿に分けて標石が立つて居る、道は険しい
ないが殆ど眞立に爪先上りに登るので樂ではない、足弱の爲めには駕籠もある、二
十八町を上り切ると本堂、宿坊、奥の院までは更に上る事十数丁である、寺内に感
應の瀧あり、老杉古松鬱蒼として茂り合ひ晝尙暗き様子は如何様天狗の住はれるか
とも思はれる、俗に御供と云つて献供式は夜三更に白衣白覆面の僧が黒塗の桶に供
物を納め、暗中を奥の院に献げ、是は天狗が手づから受取られると云つて難有がる
のである、黒暗々裡白衣の僧が樹間を絡ふて見えつ陰れつするのは頗る神秘的で莊
嚴極まるものである、新橋停車場から松田まで哩數五十三、時間は三時間、三等賃
金八十七錢、二等一圓卅一錢、歸り途には裏山越に箱根へ出る事も出来る、車を備
ふて小田原へ出る道もある。

あゆりやう

玉川

(納涼にもよし 泳ぎにもよし)

玉川と云つても場所は廣いが茲には最も手軽に行かれる玉川の鮎獵を説く、青山の終點まで市内の電車、甲武線か山の手線の電車ならば澁谷の停車場までごちらにしても一町も歩かずに玉川電車の出發點に着く、茲から電車約三十分、終點は玉川線二子の渡の側である、停車場を降りると直ぐ茶店、鮎料理位は出来るから、茲で鹽焼魚田を調理させて味ふもよし、自ら獵して喰はんぞ欲せば玉川電鐵會社から指定の漁師を呼び舟を出させて、是に乗り組むと七厘も乗り砂糖も鹽も醬油もと云ふ風に艦には臺所が出来て、投網、羽網、鶴飼といろくにして取れる、潑刺たる香魚が直に下物となつて膳に上る、腕に覺へがあるならば淺瀬へ下りて網を打つて見るのもよし水中へ眼鏡を差込んで早瀬を渡る若鮎を突いて見るのも面白からう、年々歳々洲も變り波も變れども流を上げるに従つて魚は多い様である、小さきは酢味噌、大なるは鹽焼に、地酒の味も亦格別先へ立つて行く漁師の手先ばかりに見惚れて居



遊船川玉

る内に川は右折左折、兩岸の緑の景色は次第く變り行く、眺めもあり、面白くもあり、而して美味い物が喰べられるのだから日曜の一日を茲に過すのは都會の人には極好い保養であらう、水は深からず流は清し、熱ければ淺瀬で子供衆のちやぶくやるに危からず、家庭的に一家引纏めて出懸けるに費用多からねば經濟をも兼ねるものと云ふ可し、相場は年々變りあれども、屋根舟船頭付一圓以上、鶴飼一組一圓五十錢以上、投網六十錢、友釣五十錢、羽網一組二圓五十錢位の處、若し夫れウンと取つて脊負ひ切れぬ程のおみやげを揃へ様とすれば堰を切つてかい堀をするの方法なれども、是は一寸冒險でもあり、直ぐ

おゆらやう

歸り途世田ヶ谷に吉田松蔭を祀れる松蔭神社に詣で、澁谷の停車場上にある、六孫王經基が建立したと云ふ金王八幡社、金王櫻を見る可し、源義朝の家來澁谷の金丸は此土地の者だそうだ。

「春がすみたらそめぬるがうすもの、
中につゝめめる多摩の横山」

盛章

海水浴

大洗

(眞の磯節を聞く磯濱、
平磯をも廻ける)



水戸大洗神社

海水浴

「磯で名所は大洗様よ」と誰でも知つて居る俗語、磯と云ふのは平磯、磯濱、大洗等所謂鹿嶋灘に面する海岸の總稱であらう、大洗様と云ふのは大巳貴命、少名彦名命を祀つた丘上の磯前神社、潛者たる老松社後の子の日の原に續きて「松が見へますほのく」と漁夫をして命を頼みの羅針盤としたりしものであらう、水戸から茲まで三里廿五町、人力車賃六十錢、那珂川下りの汽船に依れば祝町まで十六錢、祝町に上つて、那珂川を横ぎる海門橋を経て、「客を待つ」と謠はれて居る祝町の遊廓に入る、妓樓數十軒昔の姿はないそうだが二

階建三階建てで中々立派なもの、茲を通り過ぎて、左折し砂原を數町行くと大洗の海岸に達する、汽船の着河岸から人力車を備ても十二三錢で行かれる、大洗には琴弾の瀧、烏帽子岩、鬼洗の澤などあり、磯濱八景など、云ふのもある、金波樓魚來庵、相並で有名なる料理屋であるが、まだ外に小林樓、大洗ホテル、杵屋など云ふものもある、酒は酔ならずとも肴は鮮である、磯濱の老妓一人を聘して眞の磯節を聞くも面白からう、但し夏場などに集つて来る女どもは茲に妓籍を掲げて居ても何處の者やら分らない、其邊の心をせねばなるまい、大洗より那珂川を渡り湊町に御殿山の勝景を見、平磯町に向ふ可し、茲は海水浴場としては却て大洗より好いかも知れない、萬年樓、平野屋、平磯館等の旅館がある、大洗へは矢張上野を出て水戸まで汽車、哩數七十三、賃金三等一圓十一錢二等一圓七十錢、行き道か歸り途にか水戸を一巡するならば水戸の章を参考にし給へ。

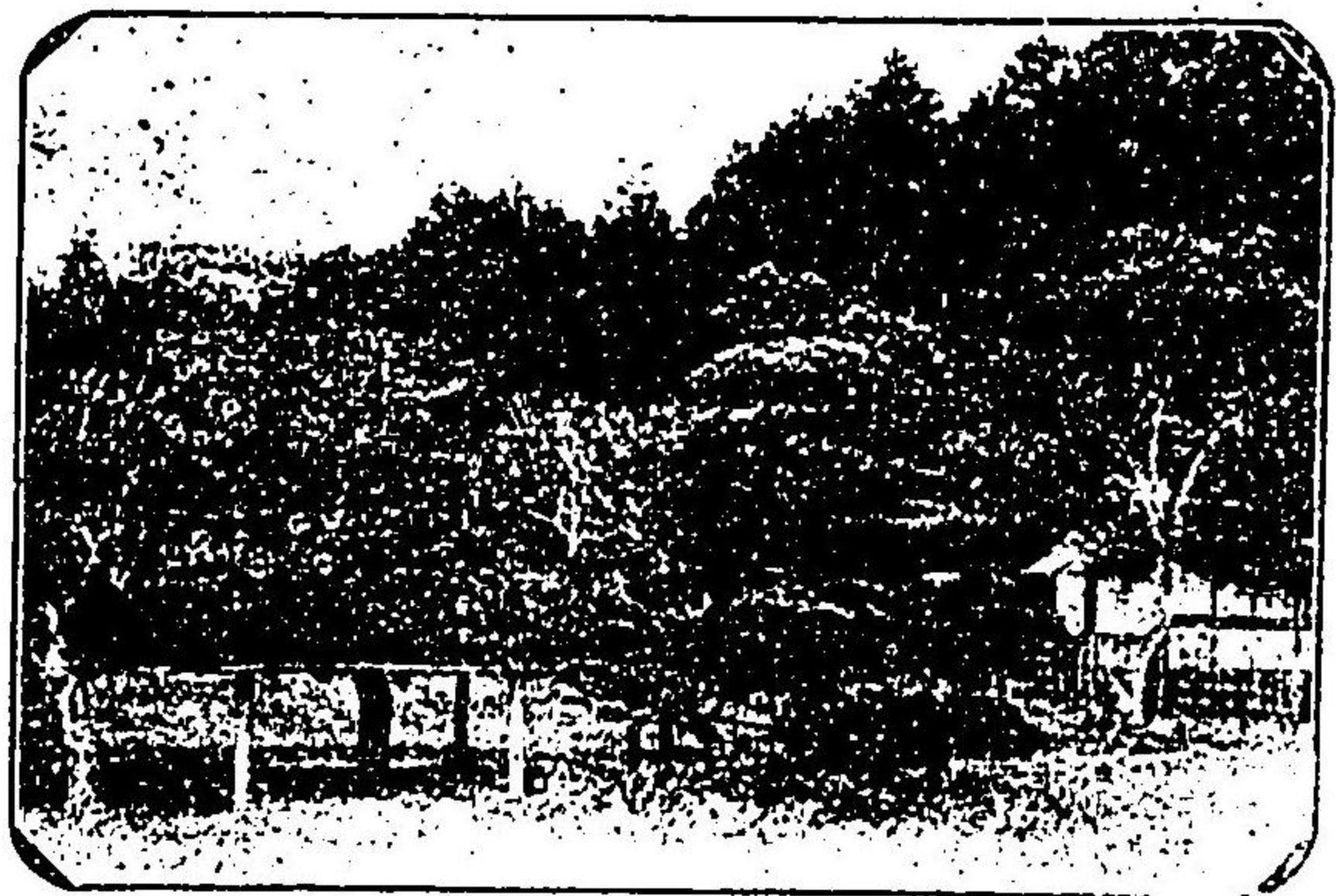
「萬世を松に契りて今日までは
予の日の松にひかれきにけり」

烈公

梅

水戸

(好文章の雑誌)



松余園公盤常戸水

梅

汽車が水戸驛に這入らうと云ふ時、右手に見えるのは光岡卿が八景を選た千波沼、左手に見えるのは烈公の經營に成る、日本三公園の一と云はれる借樂園である、梅は其數五千餘株此公園の西北の側に、苔面白く枝ぶり槎枒として春知り顔に綻び初めるのである、停車場に下りて車を備へば十五六錢、歩いても僅に半里ばかりの一本道、雑作なく公園を尋ね當てる事が出来よう、借樂園は其後常盤公園と改められ、更に停車場の上に舊水戸城三の丸を其儘公園としたのを第二公園と呼ぶに對して第一公園とも云はれて居る、公園に續いて

義公烈公を祀つた常盤神社、園内に入つては烈公筆の借樂園碑、仙湖の碑などあり、好文亭へ上つて下瞰すれば千波湖畔睡るが如き柳色畫の如くである、疎末なれども一寸捻つた借樂焼と云ふ焼物屋もある、梅林に入つては香雲袂に入つて仙境に導かる、が如く、数千株の花遅速あり芬芳同じからず、若し是が東京にあつたら東京中が匂ふだらうと思はれる程である、歸り途第二公園に寄つて舊弘道館跡に弘道館碑孔子廟等を見、此間には似合はしき老梅の小さけれども花咲けるを見て停車場に行く、是で歸るのは餘りにあつけないかも知れず、第二公園より北へ三丁ばかりで那珂川縁へ出る可く、茲から汽船にて祝町まで（停車場から人力車ならば大洗まで五六十錢）行き（此賃錢十六錢）祝町より砂原を凡そ十數町歩いて大洗の海岸に出で金波樓魚來庵に荒海の魚を味ふもよからう、（大洗の章を參考す可し）。

上野より水戸まで哩程七十三哩時間三時間と四十分、急行で三時間、賃金は三等一圓十三錢、二等一圓七十錢、觀梅の時分には上野にて割引往復券を發賣す。

もみぢ

高雄山

(王子山見物)

高雄の紅葉を見るには中央東線淺川の驛まで汽車、飯田町から三十哩六鎖、時間は約二時間賃金は三等五十一錢、二等七十七錢（紅葉時分には割引往復券が發賣される）。

淺川で下車して町へ出たら西へ凡半道で山麓の高雄橋に達する、抑も茲で一寸高雄山の難有い處を説明しなければなるまい、高雄山は天年間行基菩薩の開いたもので、麓より三十町で樂王院、山中杉と紅葉ばかり、新道より舊道の方が少々峻岨ではあるが近い、新道は橋を渡つて直ぐ左に折れ溪川の縁に名も知らぬ草の花が危き崖に咲き亂れて居るのを見ながら割石で疊である細道を傳ひく、十二三町で爪先上りに登つて行くと、崖下に二階作りの宿屋然たる建物屋根には單物、蒲團などの狼籍と廣げてあるのを見付ける、是は高雄山の琵琶瀧に掛つて精神病を癒そうと云ふ病院だそうだ、成る程崖道に左を折れるとだらく下つて突當りには瀧の音聲

々々山氣がぞつと身に染む、薄暗ひ山陰に華美な納め手拭などが掛けてあつて小さい祠がある、其後ろへ廻れば即ち琵琶の瀧、高さは僅に三間あるかなしだが水勢



高尾山琵琶の瀧

二三の美人、驚くには及ばない、狂人、男に捨てられたか親に責められてか、但しは兒に分れて取り亂した狂人ではあるけれども、此御山へ来た限り決して亂暴はしませんと病院の世話人が云ふ、病院には堪へず數十人の精神病者が居るが、難有い

の猛烈なると、手を入れてもちぎれる程の冷さ、山を上つて来た熱さも忽ち忘れて堂守の出す澁茶に茫然として眺めて居るとひよつこりと出て来たのは髪もおどろ、色青ざめて頬きつ立ち、雪の様な肌もあらはに腰にまつはる湯布を引合せく、怨めしそうな目でデツと四方を睨む二十

事にお醫者様でも湯治でも治らぬものが茲へ来るに驚かす、琵琶瀧を見たら元の途を真直に上ると本道へ出る雨側に杉苗何千本何百本の某として奉納の建札、いや建札の扉の間を十町ばかりで本堂薬王院、壯麗な建物の後に又上る事數十歩の富士見臺と云ふのがある、満山は皆紅葉時雨の度々峯より染めて麓の青葉に及ぶ見頃は十一月の中ば頃でもあらうか、元の道を辿つて下山の途中(左琵琶瀧とは反対の谷間)へ下る事十二三町で行基菩薩に得度を受けた大蛇がお禮の爲めにお山へ差上げたと云ふ蛇ヶ瀧、景色としては此方が琵琶の瀧よりも好からう、日光にもあるそうだが此山にも佛法僧と鳴く鳥が居る、けれど精進の悪い人の耳には這入らないそうだから、先づ大抵は聞かれぬものとして諦めたが好からう。

名所、夏も町でも冷み場所になつて居る、浅川から八王子城へは道順としても汽車に乗らずにテク歩きが好い、汽車に乗れば哩數三哩六鎖、時間十分三錢七錢二等一錢、八王子から飯田町までは汽車二十七哩時間一時間半、三等賃金は四十五錢二等で六十八錢。

「浅川を渡りて見れば
富士の根の桑の部に青風吹く」

海水浴

新子安

(浦島寺)

東京附近の海は多くは遠淺なる爲めか、水濁り汚き事限なく、大磯、鎌倉に比す可くもあらぬに、新に開かれし新子安海水浴場は東京灣中にて水最清く波靜にして海水浴場として一日を樂しく暮すには隨一の處なる可し、汽車にて鶴見停車場に下車するもよし、京濱電車ならば新子安まで、(片道十五錢)下車して東へ僅に一丁にて海水浴場へ出る可し、浴場は京濱電車會社の經營なれば費用を要せずして更衣所もあり、醫者などの設備もある筈なれば安心の出来る處なり、行か歸りかの途中見物す可き處は、海岸の東海道を北に生麥にて碧皿の碑と東子安の浦嶋寺なり、碧皿の碑の文久年間嶋津の行列茲を通りし時横濱に在りし一英人が前驅を横ぎりしより供廻はりの一士奮然其無禮を咎めて斬り棄て談判殊に六ヶ敷かりし古蹟にて、松並木數町續く處に芦薄生ひ茂りたる間に小碑の建てるあるのみなり、浦島寺は鐵道線路を横ぎりて山手にあり、護國山觀福寺と云ひ俗に浦嶋寺と云ふは境内に浦嶋太郎

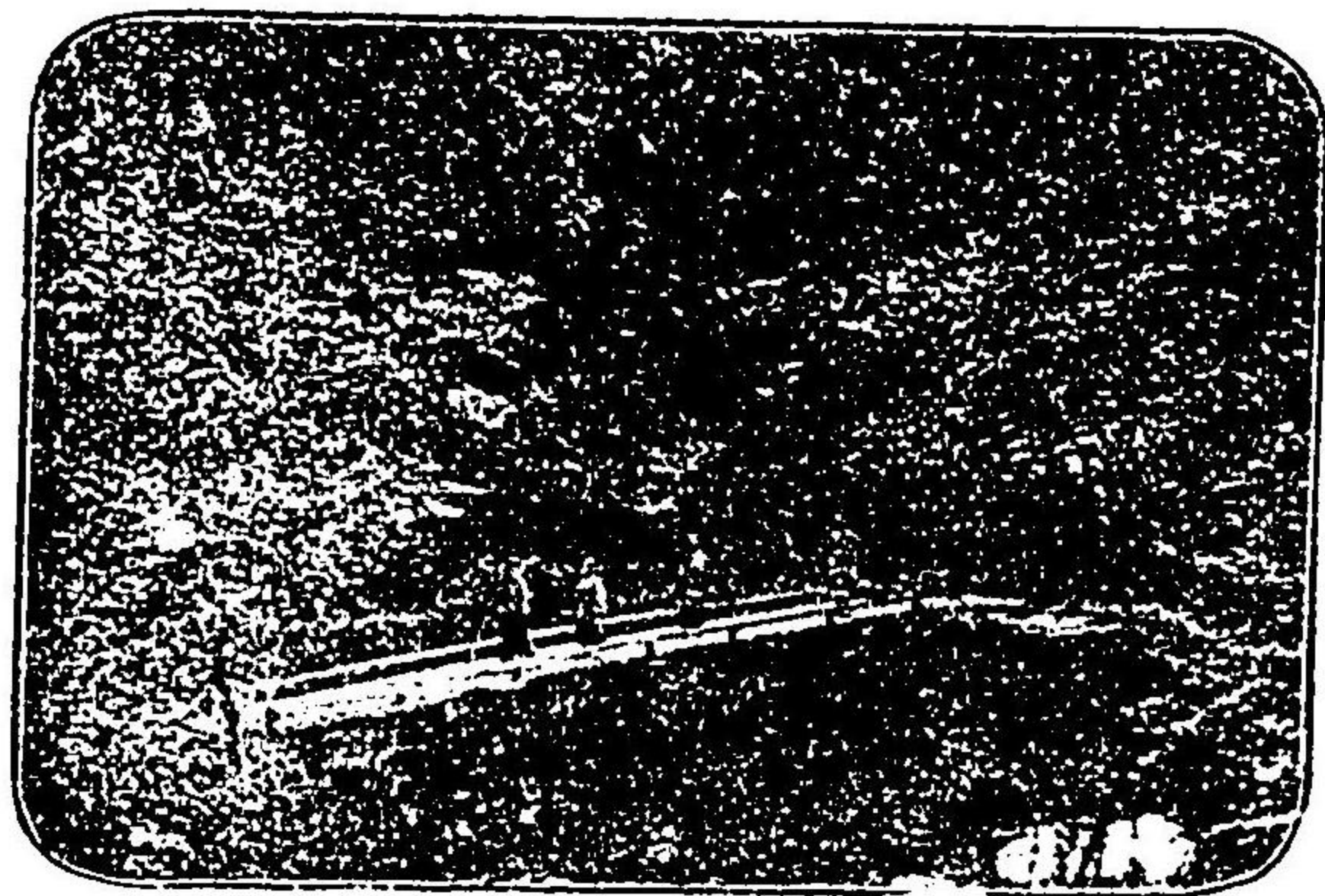
海水浴

の碑あり、浦嶋太郎が如何にして此邊まで流れ来りしものかは舊記も何もなければ
知り難けれど、寺は淳和天皇の勅願所なりと云へば可なり古きものといふ可く、
好事家は一度参詣して大に調べる所ありて然る可きものなる可し。
(64)

そみち

瀧の川

(花鳥山)



瀧の川の紅葉

瀧の川は石神井川の下流、飛鳥山と王子神社の間
を流れる一名を音無川とも云ふ、王子と云へば昔
は東都第一の保養所洒落た遊び場所であつたもの
を、大磁箱根に取られ近くは大森川崎に取られて、
今では王子へなごなど云へば舊幣じみて聞える様
であるが、花はなくとも紅葉はなくとも、山のた
すまい水のかたち扇屋でも海老屋でも静な樓上で
一杯を催して見たまへ、ちよいと訝な處がありま
すよ、夫は兎も角瀧の川へ行くには汽車なら上野
から王子驛まで僅に四哩ばかり時間は十五分賃金
二等十一錢三等七錢、驛を出て踏切を越したらち

きくに王子神社、夫より北に王子の稻荷、瀧の川を溯つて金剛寺の境内は紅葉には殊



飛鳥山の櫻

にも名あり、火の如き紅葉水に映じて美しき事はん方なし、瀧は稻荷の境内にあり、夏には納涼の客が中々に出る、飛鳥山へ近く戻り道は扇屋か、海老屋、昔し風な建物にさびがあつて食べ物も無間にはイカラでない處を買ふ事にす可し、但餘り油物ばかりを望んでお稻荷様の御眷族と間違へられぬ用心は必要なり、楮花の方から申そうなら、停車場を下りたら直ぐ上が飛鳥山、本郷から駒込をドン／＼真直に抜けて來ても、左程に遠い道ではない、満山皆花盛りだけに上野向島の雑沓はなく、ゆつくり落ち付いての花見とまでは行かなくとも、人ませせず鬼ゴツコ位は出来る、大に洒落て八笑人を學び敵討の芝居でも

やつたら大受大當は保護する、歸り途は山の下をぶらり／＼道灌山へ出れば茲にも花は澤山ありまして、昔からの名所花見寺も近し、麗々とした春でも、落ち付いて秋の日でも、唯歩いて居るだけで極江戸式なノンビリした空氣が身に染む様に思はれる、理屈を云ふのではないが、汽車が出来てから上方の贅六式名古屋のオキヤ―セ式などが浸入して關東兵衛は上野から汽車で逃げ出し逃げ遅れたのが此邊に寮の番人でもして居ると云つた風である。

「武士の紅葉にこりす女とは」 私色女

七福神詣

向島

(東京中で七福神詣でが三通り出来る)

年の始めに縁起を祝ふ七福神詣と云ふのが東京市内と附近とで幾通りも出来る、が
 其中で最も著名なのは向島であらう、向島の七福神と云ふのは弘福寺の布袋、白髯
 の壽老神、長命寺の辨天、百花園の福祿壽、三圍の恵比壽大黒、多聞寺の毘沙門で、
 是を参拜の順序で御案内を致そう、第一は『夕立や田を三圍の神ならば』の其角が
 有名な句碑のある三圍社内に鎮座ましまし恵比壽大黒の兩神、三圍神社は宇迦之御
 魂命を祀り一に田中稻荷と云つて、村社で恵比壽大黒の兩神は小かながら別に一
 社をなし、古雅の木彫の像を祀つてある、三圍の社の脊後は長命寺、名物の櫻餅を
 召上る前に参詣なされませう、長命寺は寶壽山通照院と云ふて天台宗延暦寺の末寺
 であるが寛永の末將軍御鷹狩の途すがら此寺に御休息境内の井戸の水を召上り、是
 に長命水との名を下され寺號まで長命寺と改めたとの事、本尊が即ち辨才天、傳教
 大師の一刀三禮と云はれた名作である、牛の御前から東へ半町須崎町、黄檗宗の弘

福寺の本堂左手に布袋像が安置されて居る、次は百花園、太山南畝の春花秋冬花
 不斷、東西南北客争來』との聯が能く其趣を傳へて早咲の梅から秋の七草、
 四時見る物の絶えない園中座敷の床に安置されて居る福祿壽は七福神の一に數へら
 れて居る、其次には水神様即ち隅田川神社の直側にある隅田山吉祥院にある毘沙門
 天、是は吉祥院の本尊として空海上人苦心の作と傳へられて居る、最後は白髯の壽
 老人であるが、白髯神社は猿田彦命を祀り天照大神豊受大神などを合祀した近江滋
 賀郡の白髯神社の分社であつて壽老神がある譯ではないが、白髯と云ふので壽老神
 をあるものとし七福神の一つに數へたのである、此外に七福神詣と云ふのが山の手
 に二つ、一つは神田宮本町の神田明神にある恵比壽大黒、不忍池の辨天、谷中五重
 の塔の毘沙門天、同じく長安寺の壽老神、日暮里花見寺の布袋、田端西行庵の福祿
 壽、もう一つのは目黒不動内の恵比壽大黒、同幡龍寺の辨天、二本榎の毘沙門、白
 金瑞聖寺の布袋、同じく妙圓寺の壽老神と福祿壽。

おまわり

雨降山

(日本武尊の古跡)

日かへりの旅としては少しく困難なれども健脚を誇りとする人には左して六ヶ敷き事にもあらばこそ、大山の河夫和神社へは汽車にて平塚まで、此時間二時間と七分(汽車賃三等六十四銭二等にて九十六銭)平塚より粕屋村まで二里人力車にて一時間と少し此賃銀三十銭より四十銭、粕屋より大山町まで二十町、茲は山駕の外通せず、大山町より絶頂まで一里三十二町、山頂に雨降神社あり石尊大権現と云ふ日本武尊が東征の際腰を掛け給ひし巨石を神體としたるもの、親鸞上人が此石上に歸命盡十方無碍光如來と刻したるなりと云ふ、維新前は眞言宗の寺院ありしも神佛混合を禁せられてより今は別社の一となり毎年七月の大祭には信徒の登山參詣するもの多し、山上不動堂の北三町に上のは高さ三丈六尺、下のは高さ四丈四尺ある二重の瀧あり、一の鳥居より上、霞ヶ原に大瀧あり是亦高二丈幅三間、山を下つて大山町には宿屋翠浪閣伊豆屋駒屋等あり、寄木細工、挽物細工など賣る店も澤山あり。

おまわり

六阿彌陀

(後生願ひの年寄に負けて)

春秋の彼岸に六阿彌陀詣と云つて行基上人の一本六體の彌陀の尊像を安置したお寺六ヶ寺をぐるりと參詣して歩く事がある、お婆さん、是に連れられる娘さん若衆なご胸に頭陀袋を下げ日和下駄に脚半でテク〜と歩いて行く姿を上野附近で彼岸時分には見受ける事があらう、是を年寄に負けずに手輕にぐるりと歩いて見るのも面白からう、六ヶ寺は散在して無精なものには歩けない路順を考へて上手に廻れば一日で時間に餘りあらうとも道草を喰ふ事多ければ廻り残す恐がある、最初の振出を第五番常樂院上野廣小路三橋のそば、茲を起點として次には第四番興樂寺までは上野から山手線電車で田端まで(四銭)行き茲で下車して田端の脳病院の際が即ち興樂寺、夫から西ヶ原道へ出で瀧の川聖學院前を西ヶ原農園を左に見て行くと第三番の無量寺、本尊は弘法大師作の足止の不動、外に恵心僧都作雷除觀世音などもある、無量寺からは飛鳥山に向ひ王子停車場に出で王子と豊嶋の境なる豊王橋を渡り

一丁目からの處より左に曲れば第一番の西福寺へ出る、茲の阿彌陀如來は一木六體とは云へ元木如來と云ひ傳へてあるに依れば第一番である所以も分らう、何故と云ふに元木に優るうら木なし、とは云へ御利益は六阿彌陀を巡禮せざるに於ては授け難しとの事である、一番を出て荒川の下流豊嶋川の渡を渡る、其角が「六阿彌陀かけて啼くらむほとぎす」と詠だのは此邊であらうと云ふ、江北村宇沼田と云ふ處で第二番の惠明寺に至る、惠明寺の松並木を通り田圃の中を二町許で性翁寺に木餘如來と云ふのがある、木あまりと云へば一木六體を作つて尙餘木があつた様に見えるが石標には「六阿彌陀根本木餘如來」とあるのは大に矛盾して居る、性翁寺から十入町で西新井の大帥を次に參詣し、さて第六番はと云ふと龜井戸の常光寺で非常に遠い、茲はよろしく文明の利器を應用して汽車に乗る可しで、西新井の厄除大師を拜んだら、七町を徒歩して西新井の停車場へ行き、茲から龜井戸まで汽車（此間九哩餘時間四十六分三等賃金十三錢二等二十錢）龜井戸の停車場へ下車したら、龜井戸天神の表門前から三町ばかりして常光寺、此間電車と汽車を除いて道程約二里半

遠いようでも左程ではなし、彼岸中は各寺とも鐘を鳴らして道に迷はぬ様にするをうであるから、心丈夫に善男善女の跡に付いて廻れば真逆に車に轢かれる程の間違もなからうと思はれる。

「六阿彌陀嫁の噂のすてごころ」

武州江戸六阿彌陀順禮御詠歌

- 一番 南のぢからまわりはじめしその元木 (豊島) 西福寺
- 二番 無がなへはみのりのふれでこすぬまた (沼田) 惠明寺
- 三番 阿りがたや阿彌陀の淨土にしがぼら (西ヶ原) 無量寺
- 四番 彌なが今此世でたれをまけたばた (田端) 興樂寺
- 五番 陀くさんにさなへしくちのこの下谷 (下谷) 常樂院
- 六番 佛たいなめぐりしまいしかめいごや (龜井) 常光寺

さくら

荒川堤

(熊谷寺と薩摩守 忠度の古跡あり)



荒川堤の櫻

向嶋上野飛鳥山に次いで此頃交通の便利に連れて
荒川の櫻は評判となつた荒川へ行くには上野から
熊谷まで汽車、呷數三十八哩時間二時間と廿分、
三等賃金六十三錢二等九十五錢、花時には大割引
の往復切符が賣り出される、熊谷の町から荒川堤
即ち熊谷大堤までは雜作もない、麥隴菜圃の間を
堤へ出れば花は長堤十里八重も一重も樽金も緋も
熊谷堤だけで櫻の種類が三千とか四千とかあると
これ程で盛りもあれば番もあり時を定めず次第に
咲いて行くのであるから、向嶋あたりの様に一度
に咲いて一度に散るのでなく、眺める時間も餘程

長いと云ふ事、白帆ゆるく上下する荒川の流に向つて大堤の芝生に風呂敷を敷い
てゆつくり腰辨當をつかふ時ソソキ加減愉快さ加減ざれ程であらう、花を今宵の
主人に頼む太平樂を初め、程好く引返へして熊谷の町に戻り熊谷次郎直實の建立し
たと云ふ蓮生山熊谷寺に齎して寺寶たる熊谷の遺物を見更に石上寺に有名なる庭園
を見て歸る可し、此外此邊には妻沼に齎藤別當の信仰したと云ふ歡喜天、大田村の
馬頭觀音などあり深谷で下車すれば平忠度の墓其妻菊の前の墓、忠度櫻などあり。

「入相の黒みを染ぬ櫻かな」

言水

「さくら狩泊る手紙は女房まで」

巴人

「夜櫻や大雪洞の空うつり」

子規

海水浴

茅ヶ崎

(海傳ひに平塚あり)

故市川團十郎の名を記憶して居る人は必ず其別荘の茅ヶ崎にあつた事も知つて居よう、茅ヶ崎は別に南湖と云ふ名があつて大磯よりは近く浪も穏で景色の好い處、嬉嶋の歸帆、柳嶋の落雁、南湖の晴嵐、鳥居戸の夕照、高砂の秋月、真崎の夜雨、鶴ヶ峰の暮雪、八雲の晚鐘の八景がある、停車場から松林を抜けて砂地を行く事南へ八町で海岸に出る、海岸には茅ヶ崎館中村樓、海水館、萬松樓、松旭閣、松本樓等あり、浦傳ひに南へ行けば一里ばかりで平塚の海水浴場がある、茲も浪は平で危険がない上に大磯あたり程に金が費らないと云ふので相應に客がある、おきな家、旭亭、皆屋等の旅館も比較的低廉にて親切に取扱ふ、馬入川まで行けば鮎嶺も出来るし、大磯へも遠くはない、序に此邊の案内をすれば、藤澤驛から僅二十町で鶴ヶ沼の海水浴場は丁度江の嶋と相對して景色もよし、東屋、鶴沼館、待潮館などは便利の好い宿屋、磯傳ひに江の嶋へも行かれるし、茅ヶ崎の方へ向つて行けば明治村

に明治館と云ふ海水浴場もある、新橋から茅ヶ崎までは哩程三十五哩、時間は約二時間、賃金は三等五十八錢二等八十七錢、平塚までは三等六十四錢二等九十六錢。

あさがほ

入谷

(歸りは笹の雪かさて
け池の端で一風呂)



蓮の池忍不

怠け者の朝寝坊は朝顔の開く處を見る事が出来ぬ
と云はれて、一日大勉強大奮發にて夜の明け方に
目を覺し朝顔の鉢を前に置いて睨み合つて居ると
朝顔パチンと開いたが、忽ちに元の通りに蓄んで
仕舞つた、是は怠け者の見て居るのでさては晝近
いかと驚いたのだこの話、朝顔今も尙此意氣あら
ば寝坊なる諸君には入谷行をお勧めは出来ないが
東京に居て入谷の朝顔を見ないのは少しく面目を
失する者と云はなければならぬ、割引の電車を
急がせ車坂で乗り換へて坂本で下車、入谷へは何
方へなご、田舎者らしい事を聞かすとも人のぞろ

行く方へ行けば間違はある可からずさ、寢惚眼をも覺めさす可く、珊瑚、紅、
白、綾、亂れ咲、狂ひ咲のいろくが露の干ぬ間の美しい色澤で諸君を迎へるであ
らう、金拾錢を投じて一鉢買つて、歸りには笹の雪で豆腐に海苔の朝飯か、更に若
し勇氣あらば上野の山を越えて不忍に出、蓮の花の濁らぬ染まぬ清い處を賞観す
るもよし、左様なれば揚げ出しか忍ぶ川か丸萬か、いづれも早朝より風呂湧いて居
りますと電車の中にまで廣告をして居る、夫でも行かぬ人は是非もなし、來年の夏
に是非行き給へ。

「蓮の花少し曲るも浮世かな」

一茶

鬼子母神

(山吹の里と穴八幡)



神母子鬼谷ヶ司雜

電車を江戸川の終點で下車して音羽の大通りへ出で西の方へ坂道を上つて左りへ左りへと歩く事十二三町で、目白の女子大學の前へ出る、茲から數町で雜司ヶ谷の鬼子母神に行かれる、鬼子母神は法明寺の寺内大行院にあつて平素でも可なり参詣者があるが、十月には會式と稱して法華宗一流の南無妙法蓮華經を唱へて講中の繰出すもの其數を知らず萬燈の光、太鼓の響で賑やかに夜を徹する程である、夫より南へ山吹の里は昔太田道灌が「七重八重花は咲けども」の歌の意味で賤の女が出した山吹の謎に困つて閉口した舊蹟だと傳へられ

て居る、夫から程近き高田の馬場、是は赤穂義士の一堀部安兵衛が叔父の仇を討つたので有名な處水稲荷、穴八幡。さては早稲田大學、など見物する處は中々多い、目白から此邊にかけて雑木林多く、秋は紅葉の色面白く所謂枯野見物の心で小春の寒からぬ日なご一日の行樂面白事であらうと思はれる。

日比谷公園に躑躅の多數を奪ひ去られてトラストに壓倒されて閉口したる小商人の如き觀ある大久保は近年少しく寂れたる様なるも日比谷には人形なき爲か、日比谷で見ただのでは氣が濟まず、矢張躑躅を茲のものと思はせる大久保は郊外探勝の榮には抜く事を得ざるものであらう、大久保へ行くのは市ヶ谷若くは牛込よりも道あれども普通は甲武線の電車に依り大久保まで行き東へ、四五町戻るを便利とする、躑躅は團子坂の菊と同じく各園競つて花を養ひ珍花奇樹を誇とし、外に團子坂式に躑躅人形を作つて見物料を取つて居る、歸りには新宿で下車して角筈の十二社を訪ふもよい、茲は十二社権現と云つて熊野から勸請したもので靈驗顯たかなもの云はれて居るが、裏手に池あり老松其周圍に鬱蒼として居る間に茶店と料理店を兼帶の段實張軒を並べ太さ僅に一二寸の小瀧を呼物にして夏は涼み、秋はもみじ、春も冬も相應の人出のある所となつて居る、飯田町から大久保まで昌平橋から六錢、飯

田町から五錢、新宿からは昌平橋まで五錢、飯田町まで四錢。

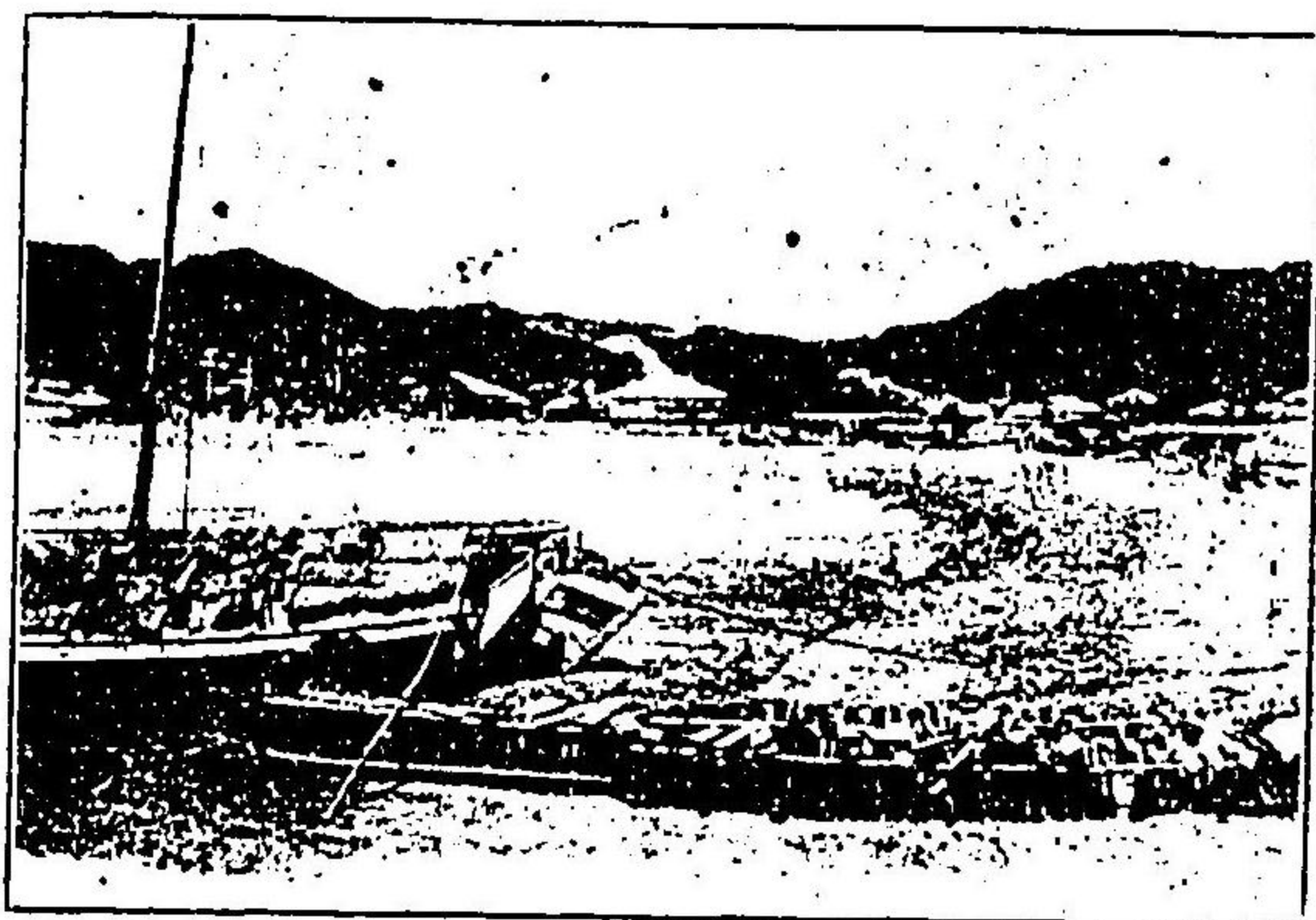
「岩に腰我頼光の躑躅かな」

蕪村

海水浴

葉山

(小坪の古戦場六代御前の墓ある櫻)



葉山森戸明神

小説不如歸で名高い森戸の濱、萬葉集に『あしかりの秋名の山』の歌ある大楠山、其他鎌倉時代の不朽の歴史とも見る可き名所舊蹟に富む逗子葉山は新橋から逗子まで三十三哩、汽車賃は三等五十五錢二等八十三錢、横須賀行では其儘、國府津其他行は大船で乗換へ、二時間と十分ばかりで行ける、逗子の海岸は停車場から西南に十町許り、西には相模灘を隔て、伊豆相模の遠山、中に白扇倒懸の景色を眺めて、水は清し浪は静なり湘南第一の好風景であらう、宿屋には養神亭、日陰の茶屋、柳屋等あり、名所舊蹟の探ぐる可きは北條早雲と

戦ひ敗軍の末茲に逃れて自殺せる三浦道寸の墓ある延命寺、平の維盛が遺子六代の墓ありと云ふ櫻山、島山重忠と三浦義澄とが戦ひし小坪の古戦場等あり、逗子の停車場よりは南の方約一里と半ばかりで葉山に達する、海岸のそゞろ歩きを續けて逗子より葉山に向へば先づ名島の勝景を海に見松原續き、海中に突出せる長者ヶ崎に到る可し、葉山御用邸前を過ぎ長者ヶ崎に着く旅館長者園に到る、長者園の樓上より見れば江の島を點景に富士を見て相模灘一帯は盆景の如し、東には秋名山即ち大楠山あり、高さは七百餘尺、登れば風景は天空海澗更に一段の妙を展じ來り壯絶快絶を叫ばざるを得ず、逗子驛の東は田浦驛、茲にも海水浴場あり、其次は横須賀驛にして日歸りの旅としては兎も角、閑あらば便を求めて軍港一覽も有益なる可し。

「美しきくらげ浮きたり春の海」 子規

粕壁

(一房五尺もあり、一株五十坪に餘る藤の花)



藤の島牛壁粕

兩國橋から東武線の汽車に乗つて粕壁まで行く、
總武線に乗つたら龜井戸で乗換になる、距離二十
四哩賃金は三等三十九錢二等五十九錢、一時間と
十數分で粕壁へ着く、粕壁は春日部で東鑑に春
日部甲斐守實景が此地に起り三浦泰村と相謀つて
北條氏を滅さんとしたと出て居る、春日部を粕壁
に誤り傳へたのであらうと云ふ、粕壁でおかしい
のは「彼の業平中將の東下りに名にしをははいさ
言問はん都鳥」と詠だ隅田川の渡は現在の向島で
は無くつて此粕壁より數町内枝村字梅田と云ふ處
だとしてある、其處には川は全くなく唯小さい池

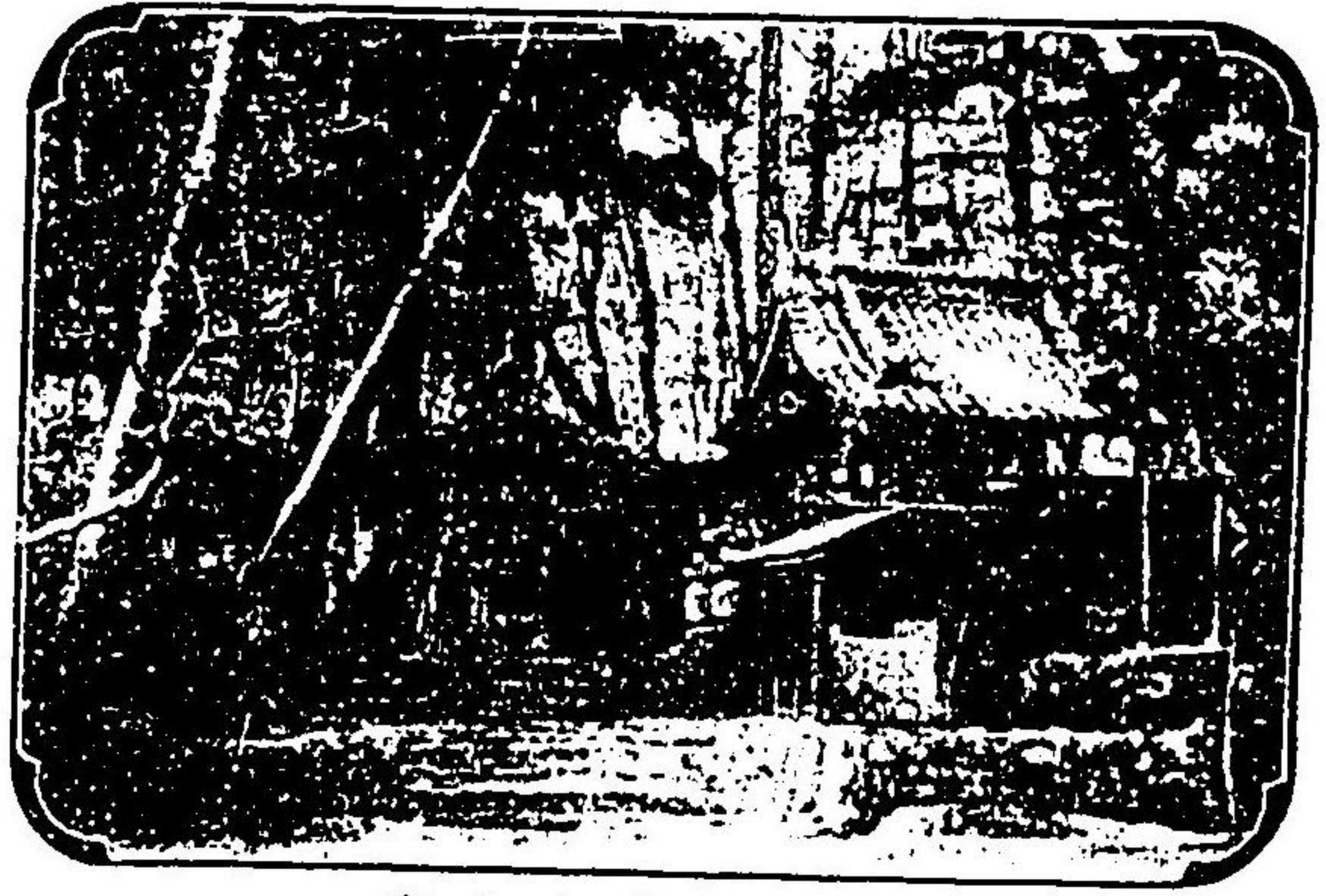
と堤の形のものがあつて梅若塚とさへ云ふものもあるけれど、業平朝臣もいさ言
問はんの都鳥も埼玉縣への管轄争ひは願下げであらう、有名な藤と云ふのは停車
場から僅に十六町人力で行く事が出来る南松村牛島と云ふ處にある、幾百年とも齡
を知られぬ古木で一本の幹より蔓の延び廣がる事五十餘坪、夫ばかりではない、ぶ
らりと下がる藤の花の穂が、出來の悪い時でも三尺より短からず、出來の好い時に
は、五尺位まで延びて地を匍ふ程の事があると云ふ。
同じ東武鐵道には沿線に桃で名高い越ヶ谷がある、兩國橋から越ヶ谷まで哩數十八
哩時間は一時間、汽車賃は三等で二十九錢二等で四十四錢、停車場を下車すると直
き四五町で桃林があり、三十町許で西方不動の境内にも桃林がある。

「藤の花あやしき夫婦休みけり」 蕪村
「藤の花長うして雨ふらんとす」 子規

つゝじ

館林

(呑龍様へ詣り茂林寺
には文福茶釜を見よ)



開山呑龍上人廟

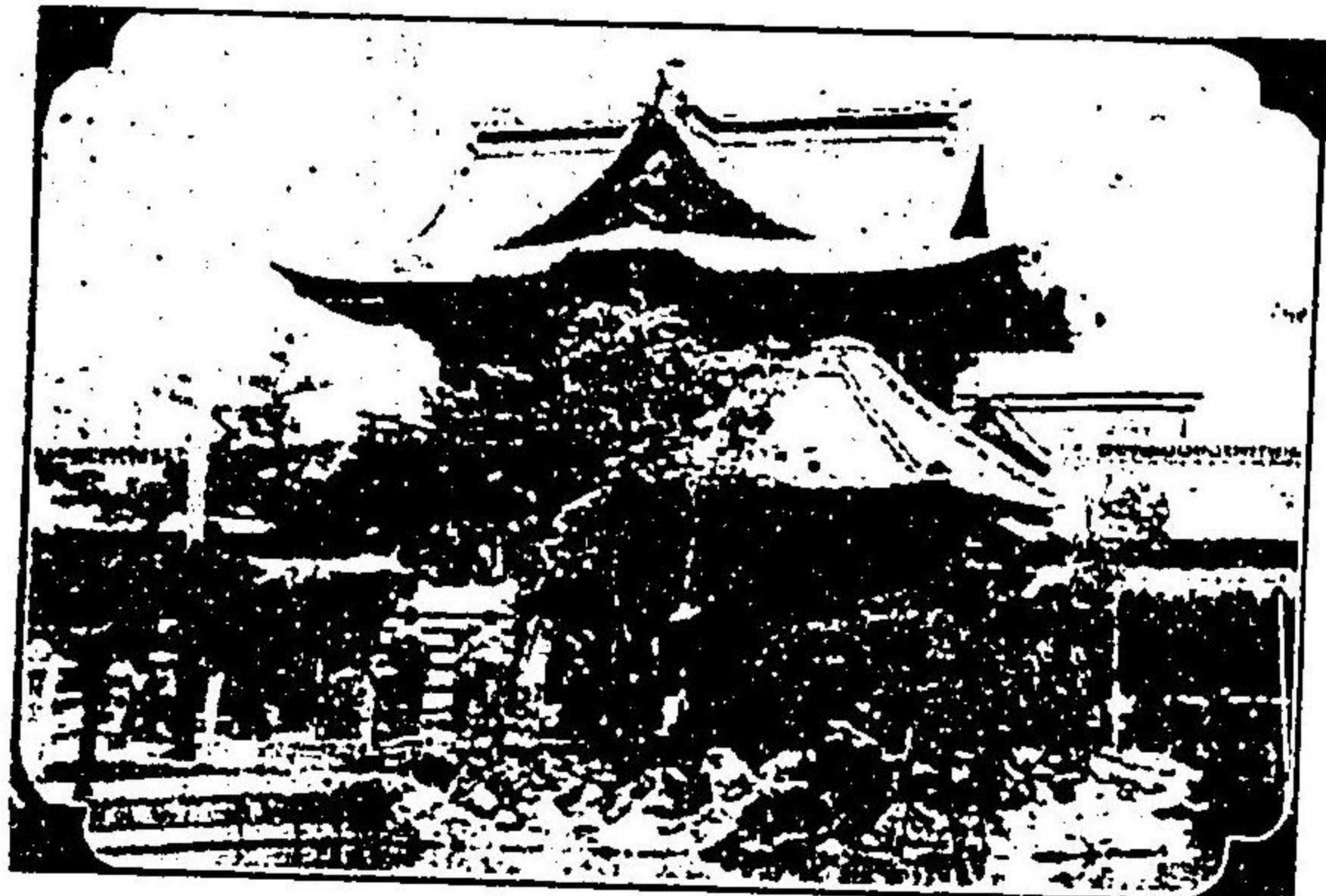
館林の躑躅は新田義貞の妃勾當内侍の手栽である
と云ふ、何人が植えたにせよ、躑躅としては茲に
勝る處はなからうと思はれる程、停車場を出て館
林は舊幕時代秋元但馬守の居城たりし舊城址を見
物し濠を隔て、向ふ側に躑躅ヶ岡がある老幹若木
高く低く相連なり花盛の時は誠に全山悉く錦繡
であつて、美しいとも何とも云ひ様もない、躑躅
を見た後程遠からぬ青柳村の茂林寺に行けば有名
なる文福茶釜を見る事が出来る、序に再び汽車に
乗つて太田で下車し、呑龍様へお参詣をするも好
からう、呑龍様は義重山新田寺、院號を大光院と

云ふ、呑龍様と云ふのは開山呑龍上人の事である、太田の町から門を這入つて本堂
まで七八町、境内は坪數九千四百餘坪、梅も多し、櫻も多し、臥龍の名ある老松も
あり、呑龍様の忌日と云ふのは八月の八日であるので八月は毎年七八九の三日、近
傍の人々は云はずも各地方からの参詣は非常な人出となる、大光院より十數町
で義貞が築いたと云ふ金山城の城跡がある、高百丈平野の間に在り、櫻の眺望は非
常に好し今新田義貞を祀りし新田神社あり。

ふじ

龜井戸

(柳島の蘭玉)



龜井戸の天神

本所停車場前より東へ十數町、南葛飾郡龜井戸村に龜井戸天神社あり、一月には初卯の日替換の神事あり、二月には社後に數百の梅樹芬芳を發し杖を牽く人絶えず、梅林中には有名なる臥龍梅あり、天神社の縁起はと云ふに太宰府の僧靈夢を感じ飛梅の幹をもて菅公の像を形り是を守護して江戸に出で地を下して龜井戸に天満宮を勧請したるもの、境内廣からぬが壯麗、社殿廻廊美しく前池ありて、太鼓橋を架け、池には紫と白の藤咲き廣がりて池上に其色を映じ美しく事限なし、季節は變れども天神社より遠からず俗に秋寺の名あり

龍眼寺あり底上秋非常に多く袂すしき秋の朝露を踏み分けて踏ぬるもよく、川ある夜蟲の音尋ねて訪ふもよかる可し、其又川向ふには「白蛇の出るのは柳島」と詠はれし柳島の妙見堂あり、茲では毎年一月初卯に蘭玉を出すを以て替換の歸りにも是非立寄る可し、境内に古松あり、其幹の洞穴に白蛇が住み居り時々は人目に觸れる事もあると傳へられて居る。

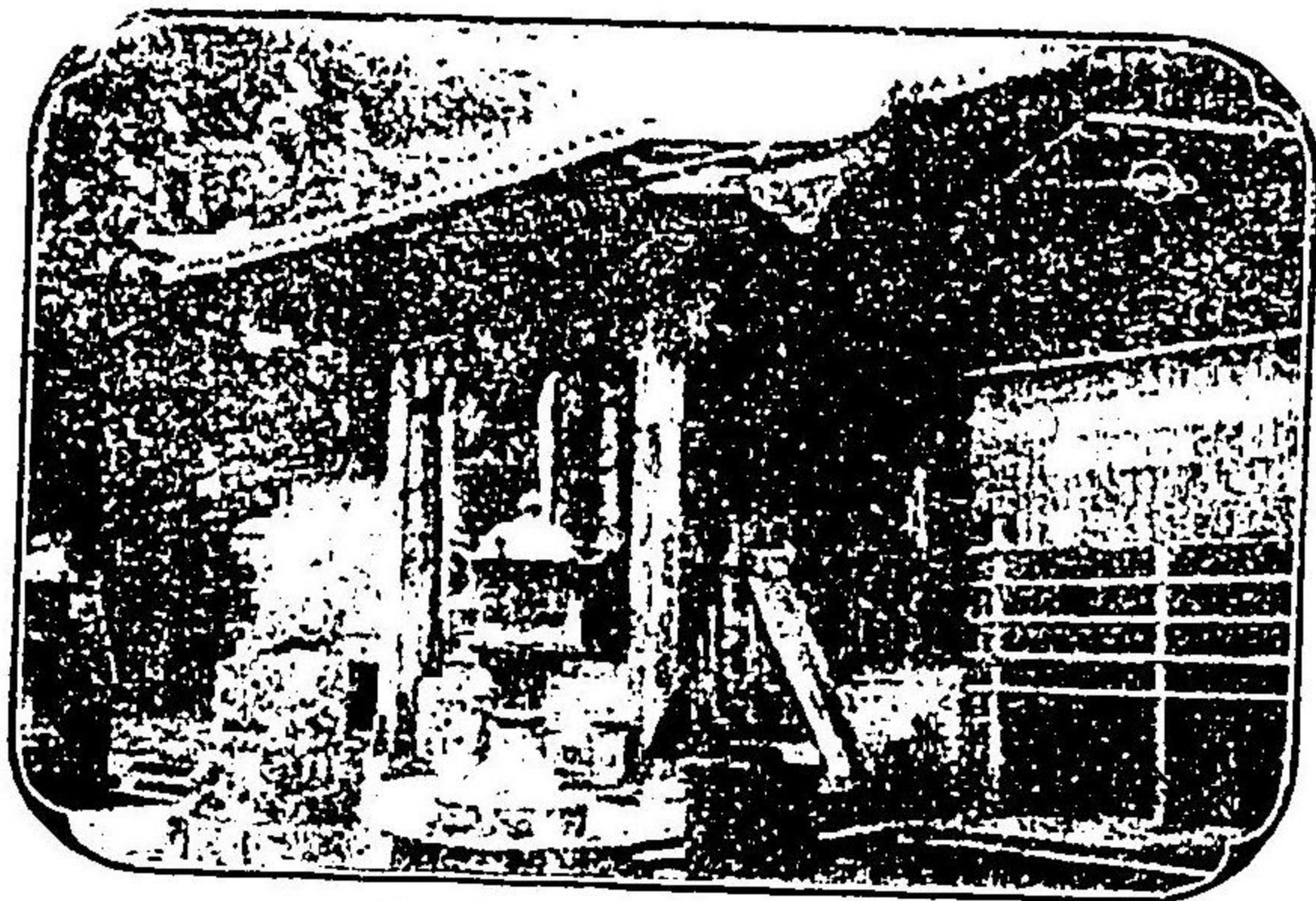
「藤の花春隠れ行く裾見たり」

紅葉

おまゐり

目黒

(橋八小紫の比翼塚甘
諸先生の墓もあり)



目黒不動本堂

目黒へは山の手線電車に依る可し、上野からでも有楽町からでも品川からでも又飯田町牛込邊からなら代々木で乗り換へて行く事が出来る、目黒の停車場を出て右へ線路の上の橋を越へると真直にだらりと降り坂、是を下り切つて約七町で、不動院へ着く、寺號は龍泉寺大同年中慈覺大師の草創である云ふ、仁王門を入ると左に獨鈷の瀧あり、石段を上れば本堂、本堂の後には大日堂、虚空藏堂、鬼子母神堂などあり、本尊は不動なればとて目黒の不動とまで名を高くしたる筈なるに實は不動ではなくて日本武尊が野火の中に立ち草薙

の劔を提げて立ち給へる御姿なりと云ふものもあり、人に教へて饑饉の備をなさしめし甘藷先生青木昆陽の墓あり、門前には料理屋軒を並べ春は竹の子飯秋は栗飯に客を呼ぶ、一日の散策には手頃の處なれば參詣人は中々に多し、門前より右に半町ばかりの處に權八と小紫とを葬れる比翼塚あり、北へ二町にして日本武尊を祀りし大鳥神社あり毎年十一月西の日に西の市あり、祐天寺は目黒不動院より約十町、本尊は恵心僧都作の阿彌陀如来にして其前に祐天の像あり、祐天上人は彼の下總埴生村與右衛門の妻累の怨靈を解脱せし人、其時祐天が着せし法衣女院より賜はりし蜀紅錦の袈裟等寺寶として珍藏し蟲干の時參詣人に拜觀を許す、

上人の墓は本堂より左の林中にあ



目黒比翼塚

り、祐天寺より更に西へ一里許にて奥澤の九品佛あり、本堂に聖徳太子作の阿彌陀佛を安置し其左に上品、中品、下品の三堂あり一堂に如來三體あり、是を稱して九品佛と云ふなり、毎年四月不斷念佛を修行の際には近郷近在よりの信者澤山に集り東京より態々出向く信心者も甚だ多し。

もみぢ

海晏寺

(谷重の伊藤公の墓東) 海寺に澤庵の押石



品川海晏寺紅葉

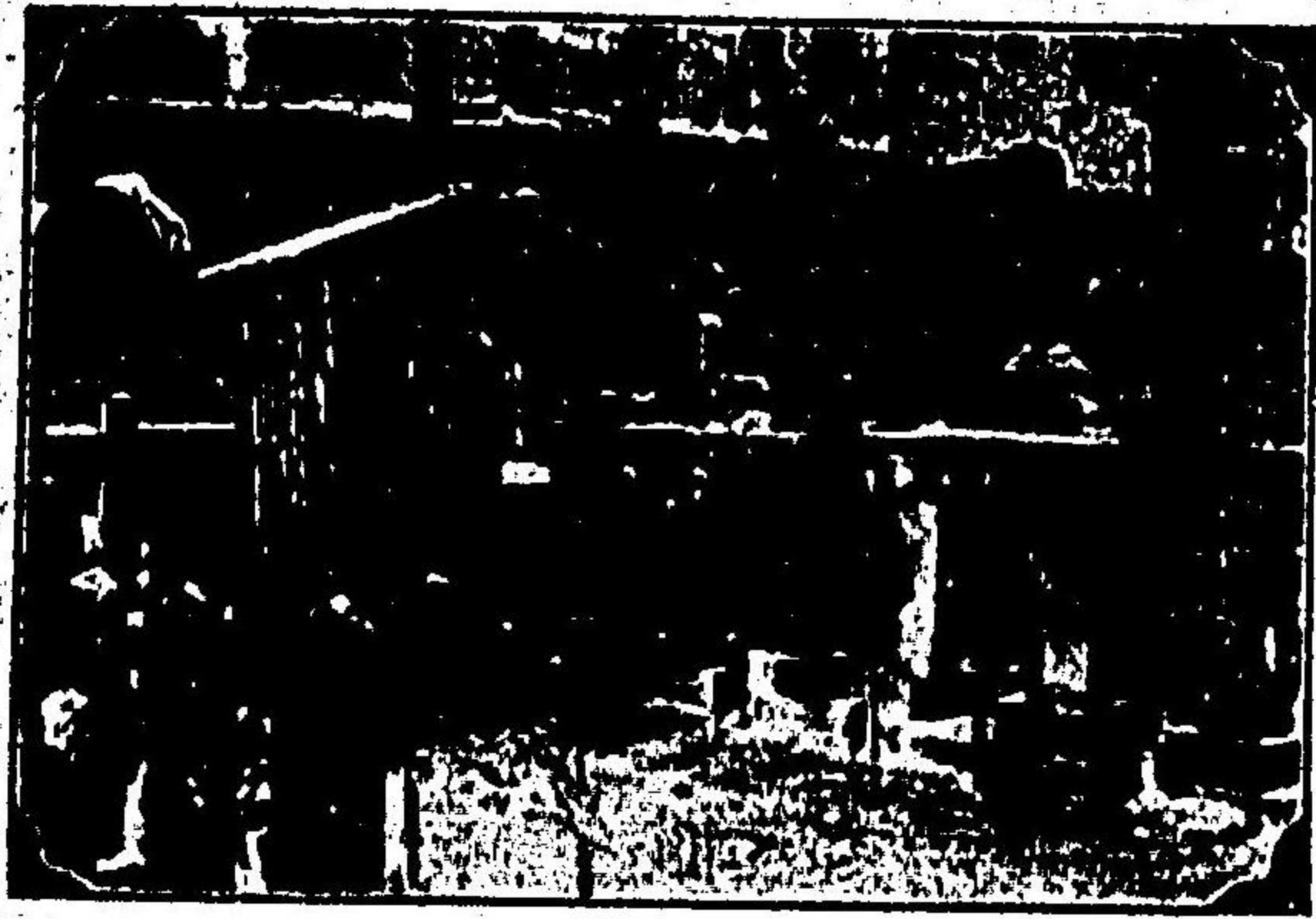
「アレ見やしゃんせ海晏寺」は紅葉では高雄龍田も及ばないと云ふ名所、品川八ツ山より京濱電車に乗り鮫洲(片道四錢)まで乗り同所に下車して本街道に出で少しく北へ戻るとちきにある、大覺禪師を開山として北條時頼が建立したものの壯嚴なる伽藍は昔、火災に逢つて焼けた儘假堂のみである、本尊は鮫の腹より出た觀世音で、此鮫の揚がつた濱の名を鮫洲と云つたのが今も地名に残つてゐる事である、寺内の丘陵一帯に楓樹多し、一度「林間暖酒」の風流でもなく無闇に伐採したるも近年楓樹を澤山に植付けたれば紅楓の間道に品川沖を

眺むるの光景絶佳である、境内に岩倉具視の墳墓あり歸途青物横町を左に十數町にして伊藤公の恩賜館、谷垂の墓地を訪ひ更に本道に戻り千體荒神に賽し北番場の品川神社の前を過ぎ右に折れれば東海寺に至る、東海寺は有名なる澤庵和尚の開山三代將軍の建立にして維新の際殿堂悉く火災に罹り今は坊中の春雨庵を本堂として釋尊の像を安置しあるのみ鐵道線路を横ぎり西手墓地の中に開山澤庵和尚の墓あり八尺許りの天然石を置く、是は澤庵流の押石のつもりなる可しと云へども餘り穿ち過ぎた話なり。

おまゐり

泉岳寺

(御直首洗の井戸(泉)の遺物を見落すな)



泉岳寺大石瓦葺の墓

「四十七士の墓所」と鐵道唱歌にある、東京名所の隨一、高輪の泉岳寺へは市内電車品川行に乗りて泉岳寺前の停留場に下車、大道より右へ進入れば兩側は茶屋料理屋軒を並べ、直ぐに萬松山泉岳寺である、同寺は曹洞宗の寺院として有名であつたが、更に赤穂四十七士の墓地がある爲めに何人も殆ど知らぬ者はない程になつた、元祿十四年十二月十四日臥薪嘗膽の境に入する事一年有半で漸く優曇華の花咲く春に逢ふ心地、思ひの儘に仇吉良上野介を討取り四十七士悉く切腹して今は皆一基の墓石、内匠頭長矩の墓石に近く列を正して相

並びならびこけ蒸じしたる石碑せきひの下もとに永とこしへに眠ねる忠魂ちゆうこんは生いけるが如ごとくたうじ當時たうじを人ひとに語かたつて情夫だふを
して起たたしむるの概がいがある、境内けいだい首洗くびあらひの井戸いどは、水清みづせい列雪れつせきの朝あさの寒さむさを思おもはしめ、
遺物いぶつ陳列所ちんれいじよに至いたつて兜頭巾かぶとぎん、鎖帷子くさりかたびら、槍太刀やりたちを見みては更さらに歸かへつて義士傳ぎしでんを讀よむ事こと一
回くわいならざるを得えざる心持こころもちがする。

「ごん尻に腹を切らせる五十両」

○ 市

「定九郎後光の様な傘をさし」

みや子丸

「祇園町きつて由良さん通りもの」

長 松

欠

MISSING

おまゐり 喜多院 (三芳野神社)

喜多院は川越町の大字小仙波にあり、上野寛永寺と同じく天台宗で、開祖天海上人の入寂の地で慈覺大師の創建に掛るものである、で幕府時代には寺格も高し待遇も非常に好く寺領は七百石、寺の境内の廣さ四萬坪と云つた大したもの寺の内に東照宮を祀つて壯麗な社殿を設けてある程の處である、近年盛に參詣者あり、序に川越町の太田持資入道の築きし城跡を見物し、城の北隅にある三芳野神社には參詣す可し、神社は持資が築城の際守護神として勸請せしものなりと傳へられ素盞雄尊、稲田姫を祀りたるもの、本社拜殿、神樂殿等頗る壯嚴の建物であつて、境内に櫻多し、喜多院の境内にも櫻多ければ先づ花見かたぐひに来るを好しとす、道順は飯田町より甲武線汽車に乗り國分寺にて川越鐵道と云ふのに乗り換へて川越まで行く、哩數は凡そにて三十五哩、時間は二時間半、賃金は三等にて五十五錢、二等は八十五錢。

おまゐり

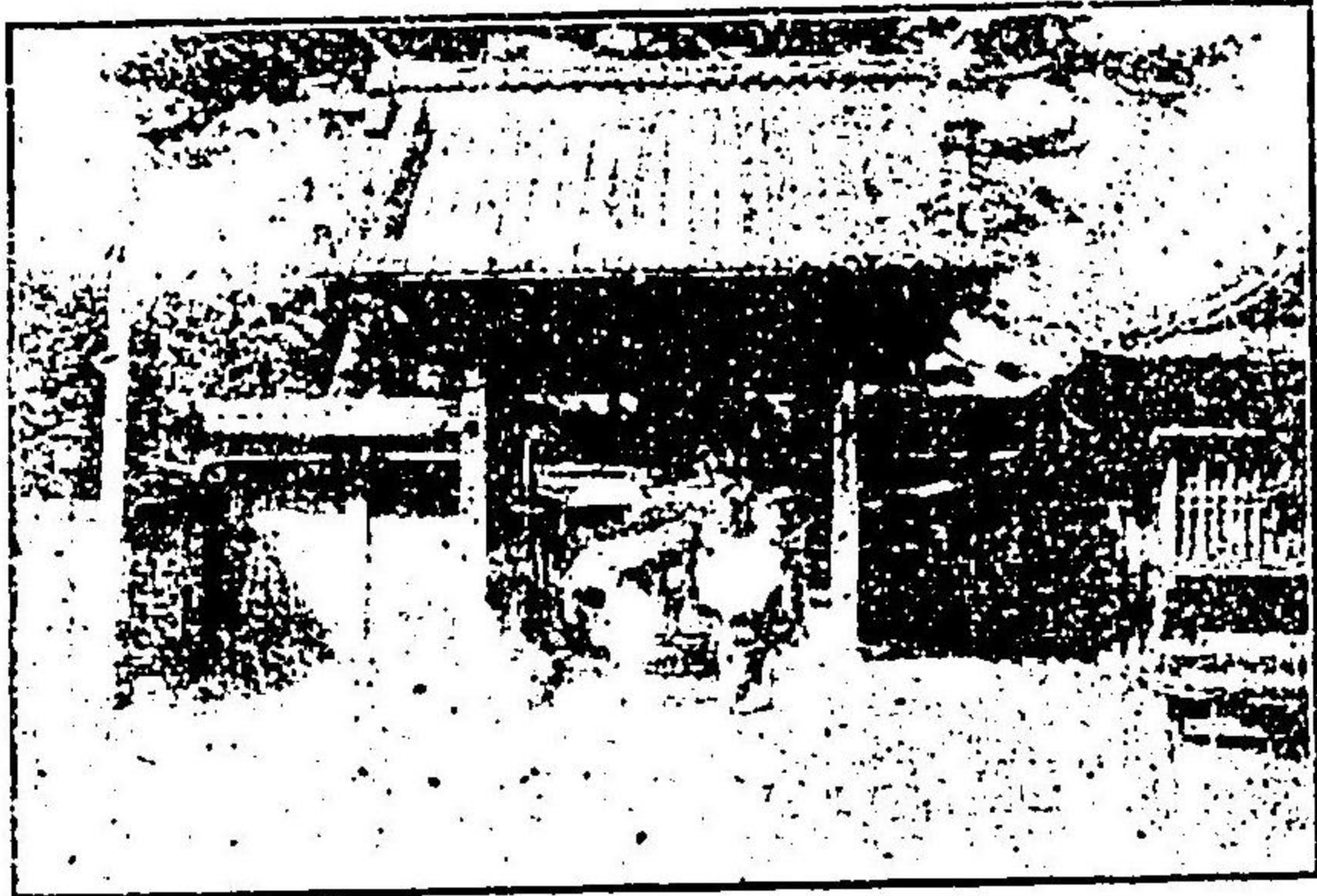
おまゐり

東京の八十八ヶ所

(東京市郡に亘る名所と靈地)

弘法大師が開ける四國の八十八ヶ所は靈場巡拜の志はありても容易には行かれぬ所なり、是を悲しみ關東の人否、東京の人にも八十八ヶ所詣させ度しとて、牛込辨天町の多聞院の僧正等と云ふ人今より百五十年前、四國の四百五十幾里あるを廿餘里に縮め御詠歌も其儘に是を各寺に割り付けて拵へたるものなり、されども番號は順にはよらず、飛々に道順を量つて詣るより仕方なし、辨天町の多聞院は第三十一番、茲には八十八ヶ所草別の正等の墓あり、夫より二三町の千手院は第廿九番なり茲には大師堂并に大師の石像八十八體を置き是に四國八十八ヶ所の寺號と地名及び其距離を記し順次に禮拜して八十八に及べば四國は更なり東京の八十八ヶ所を廻はるも同然、夫と同じ利益を受く可しとは手つ取り早き好き工風もしてあるものなり次は牛込笹筒町の南藏院は第廿二番、千手院より南へ市ヶ谷柳町に光徳院は第五十八番津の守阪を上り四谷の通りに出天王横町の右側に第廿一番東福院、左側に

第十八番愛染院あり、愛染院には堀保巳一の墓あり、愛染院の隣四谷寺町に第八十



音羽護國寺

三番蓮乘院、第三十九番眞成院、南へ南寺町に第四十四番の顯性寺あり、赤坂區には一木町に威徳寺あり第七十五番の札所とある、深川公園永代寺は第六十六番、同じく高橋を過ぎ彌勤寺橋を渡れば第四十六番の彌勤寺あり、兩國橋の東回向院の南に大徳院は第五十番

是にて一廻はり了りて更に又出直しては、先づ戸山の原を抜け上戸塚の觀音寺が第八十五番、戸山學校の裏に戻り高田八幡に出づ其傍の放生寺は第三十番音羽の護國寺が第八十七番、目白不動の境内新長谷寺は第五十四番、高田村にて第卅八番の

金乘院と第卅五番の根生院と向きあへり、金乘は濁して讀み、根生は澄みて讀むな

りと、目白の停車場に近く長崎村に金剛院あり、是第七十六番夫より、南に下りて下
 落合に第卅六番の薬王院、上落合には第廿四番の最勝寺、柏木の電車停留場より西
 へ四五町にて寶仙寺に達す、茲は第十二番の札所、大師堂并に一面に二十二體宛四
 面に八十八體の大師像を刻りたるものあり、寶仙寺の門を出淀橋に向ひ、路を轉じ
 て幡ヶ谷に莊嚴寺に達す寺は大師よりも不動にて知らるゝもの境内に梅多し、茲は
 第十一番、南へ甲州街道へ出で第廿五番の長樂寺あり、甲州街道を新宿へ七八町の
 所に第三番の多聞院、千駄谷は停車場より南に當つて第九番の龍岩寺あり、大師堂
 の前に蛇體の辨天あり、夫より北に第十番の聖輪寺、是にて二廻はり、澁谷にて第
 七番の寶泉寺に達し、目黒停車場より白金通りを二三町にて第四番の高福院、夫よ
 り又東に第八十八番の文珠院、打止めだけに立派なる寺、白金臺より二本板に出で
 第一番の長壽寺、魚藍阪を上り魚藍寺より先に第八十一番眞然院、第八十四番明王
 院、第七十七番佛乘院、第六十五番大聖院、第六十九番の寶生寺、第八十番長延寺
 あり、三の橋を渡り麻布本村町に第五番の延命寺、同區櫻田町に第廿七番の正光院

市兵衛町に第六番の不動院、愛宕山の下に第六十七番の眞福寺と第廿番の鏡照院と
 あり、飛で京橋は越前堀の圓覺寺は第十三番、深川へ渡り福住町に第三十七番萬徳
 寺、龜住町に第七十四番の法乘院、此寺には大師堂の外に閻魔堂あり、も一つ曾我
 の五郎の足跡石と云ふもあり、深川區猿江町に第七十三番覺王寺、序に浦里時次郎
 の墓ある慈眼寺、龜井戸停車場側に第四十番普門院、境内に將軍應狩の際腰を掛け
 られしと云ふ松あり、是より兩國は藥研堀にも第廿三番の不動堂、是にて三廻はり、
 早稲田大學に近き下戸塚の觀音寺第五十二番、音羽より小石川茗荷谷へ下りる所に
 第七十九番の専教院、本郷仲町に第八十六番の常泉院、本郷元町二丁目に第卅四番
 の三念寺、第卅二番圓満寺は本郷の通り、新花町に第廿八番の靈雲寺、下谷南稻荷
 町の第七十八番成願院、淺草には松葉町の法光院が第十九番、永住町の吉祥院が第
 六十番同密藏院が第四十一番、觀藏院、龍福院、延命院が第四十五、第八十二、第
 五十一番なり、南松山町に第六十一番の正福院、第四十三番の成就院、第六十二
 番の威光院と第七十二番の不動院は榮久町にあり、戻つて上野より谷中に出で多寶

院は第四十九番、自性院は第五十三番、第五十五番長久院、第六十三番観智院、第



新井の薬師

武線中野に近き新井の薬師と云ふ梅松院が第七十一番、茲より北へ十町には下池袋

五十七番明王院、第六十四番加納院、第四十二番
観音寺と寺町は廻はるには樂なり、田端に降りて
第六十六番興樂寺、第五十六番東覺寺、道灌山の
平塚神社の側に第四十七番の城官寺、夫より西へ
西ヶ原に無量寺は第五十九番の札所、染井より巢
鳴の通りに第三十三番の眞性寺、是にて四廻はり
おはり、も一廻はりにてお仕舞となる可し

八ツ山より京濱電車に乗り鮫州にて下車、大井村
の來福寺は第二十六番の札所にて境内に梅あり櫻
あり、夫より西南へ五六町にて光福寺を過ぎ馬込
に長遠寺は第八番なり、此外残りの所を拾へば甲

第四十八番の禪言院、更に七八町にして第二番の東福寺、東福寺より西へ十三四町
にて第十五番の南藏院、夫より南へ十町餘にして第十四番は下鷲宮の福藏院、夫よ
り谷原の長命寺は第十七番、下石神井禪定院は第七十番、同じ三室寺は第十六番、
是にて八十八ヶ所全部おしまいなり、此廻はり方は遊行記の著者が廻りたる道なれ
ども、同じ所を二度廻はりたる所もあり、試みに地圖を開きて、八十八ヶ所に朱點
を置き道巡を研究し、放れたる所は乗り物の利便を考へて巡拜せば急げば二日、三
日ならばゆるくと巡禮する事を得可し、區別すれば郡部に三十一ヶ所、市内に五
十七ヶ所、うまく廻はれば八十八ヶ所のみならず、東京の名所は悉く序に見物す
る事が出来るなり

おまゐり

布施と柴又

(手賀沼の魚料理)

布施の辨天は手賀沼にあり、手賀沼へ行かんには上野より海岸線の汽車に乗る我孫子に下車、(時間一時間と十分、三等にて三十五銭)下車すれば直に、手賀沼なり、沼は長さ四里幅半里、鰻を産し冬は鳥類の着くもの多ければ漁獵ともによろし、東へ八町行けば子の神社あり、西へ三十町行けば布施の辨天に達す、堂は山の上にあり、境内に大師堂ありて相馬八十八ヶ所の一となり居れり、山より利根川へは僅に十町掛間より白帆の去來を眺めて見晴よく、山より南は櫻山と稱し櫻樹多く又楓樹もあり、春も好く秋も好き處、柴又へは我孫子より又汽車にて戻り金町驛に下車(上野よりは時間三十七分、賃金十五銭)人車鐵道ありて柴又の帝釋天まで行く、参詣者の多き成田の不動、川崎の大師にも劣らざるものにて、境内町中の光景も又似たり寄りたりのものなり、帝釋堂のうしろ敷町にして利根川邊に出る、茲に川魚料理にて有名なる川甚あり、料理

は美味し、座敷も場所には似ず、鰻、鯉の料理は東京の人には珍らしく確に土産話となる可し

えんそく

飯能

(能仁寺の十六羅漢
子の権現の深山幽谷)

飯田町驛より汽車に乗り國分寺にと乗換へ入間川に下車す、(時間二時間、賃金三等四十八錢)入間川より飯能まで鐵道馬車一時間にて着す、飯能の能仁寺と云ふは上野寛永寺に關係深かりし故か上野戰爭に幕兵敗れて走れるもの逃れて此寺に籠りし爲め、官兵襲撃し、飯能の町は焼かれ、能仁寺も公辨親王の筆に成る扁額を殘して皆焼拂はれたれば、今は凡べて新らしきものなり、寺の山上石の十六羅漢あるを以て、羅漢山の名ありしが、先年主上の行幸ありてより天覽山と名を更む、寺は山中腹にあり、山は秩父の連山を脊に脚下に飯能の町を眺め風光好し、能仁寺の谷後に穴あり、立つて歩む下し、穴は向ひの山に達するものにして幕兵の茲より逃れし跡と傳へらる、飯能の町より名栗川の岩根橋を左に、子の権現に向ふ、途中樫の古木の古碑を挾めるものあり、飯能より約二里、名栗川に次ひで中藤上郷に至れば、茲より子の権現まで六十六町と記さる、溪流に沿て七丁目まで達すれば龍ヶ谷龍の

り右に阿字の峰絶頂に大日如來像を安置し、左方が即ち子の権現の祠なり、祠の右手は經ヶ峯と云ひ奥の院あり、天狗岩、籠石、坐禪石などあり、規模大ならざれども深山幽溪の姿を備へ、御嶽高雄に優る事數等、安政年間の火災に堂塔寶什悉く烏有に歸したるも亦一名刹として遠足の目的地たるに過ぎたり

えんそく

荒 幡

(狹山の茶園と人造宮
土井に元弘戦死碑)

新宿驛より汽車に乗り、國分寺にて川越行きに乗り換へ、東村山驛まで行く、(汽車の時
間一時半ばかり、賃金は三等で三十六錢)東村山村は例の癩療養所のある處なれど其
様なものを見る要はなし、北へ十町ばかり行くと徳藏寺と云ふに到る、堂の前に元
弘戦死碑あり、是は元弘三年新田義貞に従つて相州に戦死せし土地の豪族飽間三郎
と同孫七孫三郎の三人の爲めに建てられたものにして凡そ五百年も経べく東京附近
には珍らしき古碑なりといふ(筆者は扁阿彌陀佛)、西北一帯は有名なる狹山の茶園
丘上に小高き原あるは元弘三年義貞が此地に屯して兵を集めし處、今將軍塚といふ
塚は狹山の東隅にあり、是より西へ一二町、北に狹山を下り、西北に又山を攀づれ
ば佛眼寺、水天宮、八幡宮等あり、山上を西南に向つて行く事凡そ半里にして、人
造の富士に達す、所謂荒幡の新富士なるものにしてその名を八國山と云ふは頂上
の眼界八ヶ國に及ぶが故なり、頂上は疊三疊敷ばかり、狹山の連山を眼下に武蔵野

の起伏は眼中に集まる、若し夫れ空晴れて雲の遮ぎり無くんば富士は固より筑波も
赤城も淺間も歴々指摘し得可し、山を下つて附近を探ぐれば山口の觀音、北野天神
などの靈地あり

おまわり

小岩不動

(星下り松と琴弾の松)

兩國停車場より汽車にて小岩まで(時間約三十分二等賃金拾壹錢)小岩より南へ十
 五町江戸川に近く善養寺と云ふが小岩不動なり、小岩不動は星下りの松あるが爲め
 に聞えしもの、山門を入れば直ぐ右手に見上ぐる許丈高き枝垂れ松あり、松の傍に
 不動堂あり、山門より左手に鐘樓ありて、其前には横に擴がる事十間四方にも及ぶ
 影向松あり高きと廣きと松では東京附近茲を置いて他にはある可からず、星下り松
 とは今より二百年前、善養寺の住村の高徳を慕ひて星、天上より降り來りて此松に
 下がる事數夜遂に落ちて石となりし故に名づくる所にして、其石は今に寺の寶物と
 なり居れりと、境内は幽邃にして泉石のたゞまひ面白く、半日を暮すに惜しから
 ず、夫より江戸川に出で、行徳に菖蒲を見るも悪くはなし、松の序に川を下り今井
 村に勝興寺の琴彈松を見るも好かる可し、此松は今折れ朽ちて無く唯其空間より生
 せし二代目の松あるのみ、北條氏康の武藏野遊行の序茲に宿りしが一松風の吹く音

聞けば夜もすがら、しらべことなる音こそ變らぬ」と嘆みしよし名付けたるものな
 りといふ

すゞみ

桐ヶ谷の瀧

(大圓寺の五百羅漢)
(安樂寺の連理の塚)

目黒停車場より行人坂に至り坂の中途、大圓寺に詣で、五百羅漢を見る可し、明和九年の江戸大火に死せし人の供養にとて作りしものと、本所のは、比す可くもあらねど石に刻めるものだけ珍らしき心地す、坂を下り目黒川を渡り、甘藷先生の墓、新田義興の妻が衣を掛けたりと云ふ衣懸の松を遠に眺め、不動堂を過ぎ十町ばかりにして桐ヶ谷に達す、安樂寺と云ふ寺の境内に池あり、池畔に連理の塚と云ふがあり、小紫が夫を慕ふて自及せしは眞は行人坂の上にて其處にありし印の石を此の安樂寺へ移せしものなりと、左すれば目黒不動にある此翼塚は偽せ物ともなる譯なり、寺の北に當り氷川神社あり、山の中腹より瀧落つ、桐ヶ谷の瀧とは是なれども、繪に描いた瀧ほごにあらず、唯樹木鬱蒼として晝も暑さを知られざる處なれば緑蔭に讀書三味の樂みには適せる所なり、茲より數町、大崎の停車場へ出で、山の手線電車にて歸る可し

しやうぶ

堀切

(隅田川の青葉)
(綾瀨の風景)



堀切菖蒲園

何れより行くとしても吾妻橋までは電車が好かる可し、吾妻橋より一錢蒸氣に乗り鍾ヶ淵まで(一人前金三錢五厘)向島の青葉の色を眺めながら行き、鐘ヶ淵から十五六町道々菖蒲園の道しるべを當に行けば少しも迷ふ事なく堀切に出づ可し、堀切には菖蒲園の名あるもの二つあり、小高園に武藏屋、小高園には小丘あり松の根本に立つて眺むれば、池より田へ續き見晴よし、紫、白、絞、美しき事云はん方なし、武藏屋は池の周圍に小亭幾つか拵へあり、思ひくりに陣取つて酒を叫び肴を呼べる客少からず、春夏秋冬花より團子の噺は

持つて廻はるものなる可し、歸りには綾瀬の景色を見る河岸づたひゆるくくと流る
る水に従つての散歩も風流の極みなる可きか、菖蒲に傘はつきものゝ如し、雨少
し降らば、花の色も艶一しほまして眺めば一段の事なる可し

欠

MISSING

海水浴

堺住吉

(お土産には庖丁に緞通
焼蛤に水はいい薩摩芋)

堺住吉濱寺と此三つは大阪に近い海水浴場として先づ第一等の處であらう、又いづれも公園になつて居るので春も秋も中々に人出の多い處、難波の停車場から十六分毎ぐらゐに電車が運轉されて居るから出入りに苦勞はいらぬ、賃金は濱寺までが十七錢、堺へは十二錢住吉へは七錢、住吉神社は官幣大社、底筒男命中筒男命表筒男命と神功皇后を祀り海上を守らせ給ふ神様として昔から參詣人信心者は夥しいものである、社殿は八陣の法で建築したので、魚鱗鶴翼悉く具備して居ると云ふが是等は見ても分りはしない、唯例の反橋と高燈籠は誰にも珍らしい、毎年六月十四日御田植の神事には大阪は新町の遊廓から選抜の美人が出て色々の神をいさめのお神樂然たるものがある、社殿を出て前は一帶の松原茶店あり料理屋あり、美しいのを連れての鬼ごっこ子供連れの散歩、大勢仲間の運動會のいづれにもよし、堺は桃山時代の外國互市場、庖丁の切味と今では緞通の出来るので人が知つて居る

海水浴

堺と云つても町は殆ど見るに足らない、海岸は大濱公園と云つて是又白砂青松の地
攝津淡路を遙に眺むる海の景色を肴に茅海樓一力川芳などの料理屋で一杯やる可し
歸途妙國寺に立寄り日本無双と云ふ蘇鐵を見る可し、濱寺も海濱き百人一首のうち
にある『高師の濱の仇波は』と詠まれた高師の濱の事、住吉よりも堺よりも砂は愈々
白く松は愈々青い、料理屋もあり、茶店もある、同じ様な三つの場所とり／＼に趣
きの違つて居るのは往つて見てからでなくては分るまい。

おまゐり

野崎の観音

(古戰場飯盛山
に四條畷神社)

『野崎まゐりの屋形船卯月中はのはつあつと』と油地獄にある、お染久松でも先刻の
野崎村、野崎の観音と云ふのは櫻の宮の停車場から四條畷まで汽車、哩數十二哩三
等賃金十二錢二等は十八錢時間は四十分ばかり、四條畷で下車して東南へ十町野崎
山の半腹にある、本尊は十一面の觀世音、所謂野崎参りと云ふのは五月一日から十
日間無縁經の修業中を云ふので丁度此時分此邊の名物とも云ふ可き菜の花の盛り、
見渡す限り唯もう黄金の世界、得庵堤と云ふのを行く陸路と舟で行く人との喧嘩口
論は昔と變らず今でも其儘中々に面白い事であるそうだ、歸りにでも行き路にでも
四條畷神社に参詣するのを忘れてはなるまい、神社は停車場から東へ五町ばかり、
飯盛山の中腹にあつて楓、櫻、躑躅など多く花時には中々人が出る、天氣の好い時
には南の方播州淡路の山々を眺め天空海淵の所である、小楠公の墓と云ふのは此お
宮の外に西へ九町ばかり往つた處に『贈從三位楠朝臣之墓』と誌した三丈餘の

墓石建てられ春後には見上げるばかりの楠の大木が天表に聳へて居る。

おまわり

ゆ
さ
ん

宇
治

(頼政の扇の芝、佐々木
梶原の平等院など)



宇治平等院鳳凰堂

宇治は茶所の茶を一杯味はんにも大阪からよりは
京都からの方が都合よし、京都より奈良行の汽車
で木幡若くは宇治に下車する、木幡まで三等十六
銭二等廿四銭、宇治までは十九銭の二十九銭、ご
ちらにしても時間は三十分ばかり、木幡から道順
に見物すると停車場から西北へ十四五町で明智光
秀の殺された小栗柄、今崩塚と云ふのがある、宇
治で有名な黄檗の本山と云ふのは萬福寺と云つて
五箇庄の南隠元禪師の開山で境内に黄檗十二景の
勝地あり、槿に俗地を離れて居る、西國十番の札
所で三室戸寺には圓浮檀金の立像あり、南に續く

ゆ
さ
ん

宇治山には、菟道稚郎子の陵、三室戸寺より東南に當つて一里ばかり階てた處に喜撰法師の庵したと云ふ喜撰嶽がある、宇治は宇治川の南岸宇治橋の東にあつて古戰場である、佐々木梶原の先陣を争つた橋の小島崎は橋より川下二町の處、橋の社は橋の西、平等院は橋の南にあり有名なる鳳凰堂の外に源三位頼政が自殺した扇の芝駒紫松、鎧掛松などあり、宇治の町には旅館も中々に洒落たのがあり、ゆつくりと茶味を味ひ黄檗流の禪味を味ふにもよし。

「宇治川は頼みに思ふ川でなし」

奈良

(三笠山に猿澤の池)



奈良猿澤五重塔

奈良を見物するのに僅に一日と云ふのは無理であるが、忙しい旅ならば致方はない、湊町の停車場一番で出るのが四時四十五分、六時四十七分には奈良へ着く、奈良へ着いてから菊水樓、對山樓などいくつもある旅店に就いて朝飯を喰ひ夫から、大奮發にて歩き廻はる覺悟なかる可からず、先第一は猿澤の池、池から北へ興福寺に金堂東金堂を見日本三大松の「花の松」を見五重の塔南圓堂北圓堂春日一の鳥居を潜り毎年二月に有名な新能のある菩薩院を見、鳥居の北東にある博物館を見物す、是を町寧に見た日には三日や四日で歸れるもので

なければ、老杉の間神鹿に餌をやりながら春日神社に参詣す、三笠山、若草山、手向山を見て東大寺に賽す、東大寺に大佛を見、二月堂三月堂四月堂を巡拜す、南大門に名作北向の狛犬、二天門には洪慶作の密迹、運慶作の金剛は二つとも有名なるもの、東南院は南大門の内にあり、手向山神社は三月堂の西手にあり、開山良辨僧正の住居跡なる良辨の杉は二月堂の側にあり、天平時代の古寫經充滿すると云ふ、尊勝院日本三戒壇の一と云ふ戒壇院には名作の四天王あり、正倉院は大佛殿より西北三町の處にあり聖武天皇以下歴代の御物敷を知らず、東大寺の碾磑門は景清が大佛供養に際して頼朝を窺つた處と云はれて居る、此門から北へ十餘町で般若寺に達す樓門を入り十三重の石塔、俗に般若寺形と云ふ石燈籠あり、元弘の時護良親王が經櫃に匿れ給ひしは此寺である。

う

め

月ヶ瀬



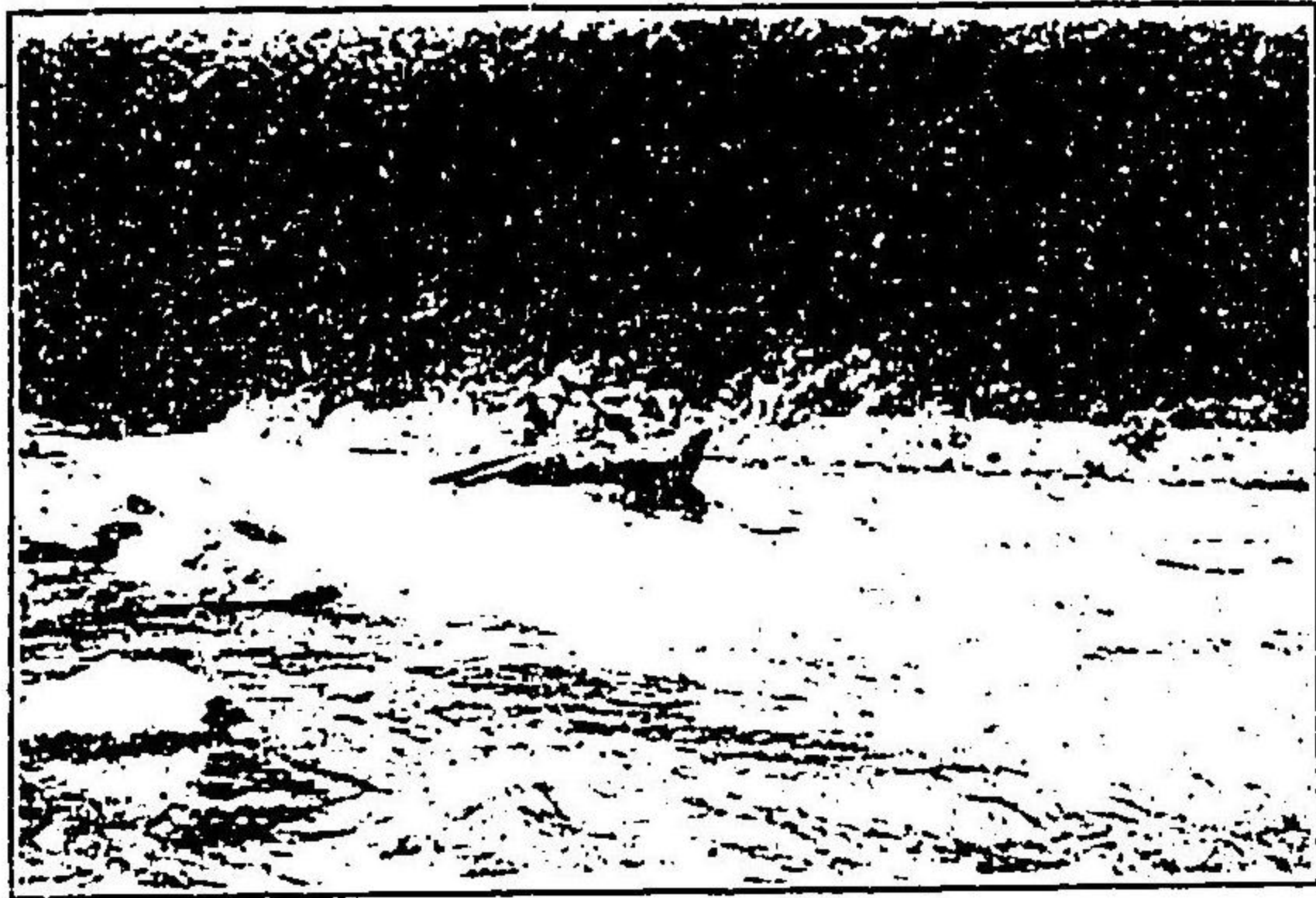
月ヶ瀬一目萬本

月ヶ瀬の梅を見ようとするれば關西線に依り、島ヶ原まで湊町から汽車に乗る、哩數四十五哩、時間二時間と四十七分、三等で七十五錢二等は一圓十三錢、島ヶ原で下車したら直に人力を備ふて月ヶ瀬に向ふ可し、月ヶ瀬のみ云へども梅花は此邊の數ヶ村尾山石打長引桃香野等のいづれにも多けれどる中にも就き名張川に臨める月ヶ瀬尾山桃香野等を第一とす此邊は満目唯銀世界、芬芳衣袂に著るしくて、羅浮の境にあるが如く一目千本の大觀などは到底繪も筆も及ぶものならず、旅館は月ヶ瀬に多し、吟香館、香雲亭、騎鶴樓等あり、是等

に就いて船を舳せしめ、名張の川を上れば興味更に數倍す可し、一目千本の外勝地として名の顯れたるものは大谷、杉谷、菫蒲谷、祝谷、鹿飛などあり。

ゆみぢ

保津川



保津川

京都は奈良に次ぐ舊き都、寺院や神社などに名ある、名作の美術品に人工の美を見飽きたる人は嵐峽の奇勝を探つて自然の美術が如何に京都の美を成せるかを見ねばなるまい、嵐峽を舟で通るのは春は躑躅を見るに宜しく夏は青葉の緑深きいづれも優り劣らず美しい立派なものではあるが最も適當な時季を選めば秋で、満山の紅葉燃ゆるが如き時であらう、保津川を棹して下るには京都鐵道線で京都から龜岡まで汽車に乗る、哩數は十三哩半、賃金は三等で廿三錢二等で卅五錢、朝一番は五時四十分、京都を發して龜岡へ六時廿六分に着く、

遅いので約一時間、龜岡の停車場から約二町で城丹株式會社と云ふ舟の會社があつて注文次第で舟を出して呉れる、折さへ好ければ乗合も出るが借り切りとして三圓から五圓の見當、連れさへあれば借り切りにして、美酒佳肴を積み込むのが好い、纜を解くと同時舟は矢を射る如く急湍に走り入り奇巖聳え怪石横はる間を飛沫を揚げて流を下る兩岸の紅葉は錦繡を曝すが如くなご、筆では盡し得ぬ光景、水勢異り山容變ずるのに應接の遑もない内に清瀧川と合して大堰川となり、嵐山の麓渡月橋の近くに舟は着くのである。

おんせん 寶塚

攝津名所圖繪に鹽尾の湯又川面の湯と記されたものが即ち今の寶塚温泉である、昔は有馬に押されて行く人もなかつた程だが大阪から程遠くないので近年は大繁昌、新舞鶴線へ大阪から乗り込むと寶塚驛で下りる、哩數は僅に十五哩、三等で二十六錢、二等で卅九錢、箕面電車に依れば梅田から乗つて寶塚まで往復卅九錢、時間も僅に五十分ばかりで行かれる、停車場を出ると二町で武庫川、對岸に二階や三階の宿屋を見ながら橋を渡れば夫がもう寶塚で茶店は門並、宿屋はいづれも建築はよし湯槽は清潔である中にも分銅屋、寶樂屋、炭酸ホテル、泉山など名の知れた宿屋である、泉質は炭酸泉で皮膚病には非常に効能があるとしてある、温泉場から少し先きに天然炭酸水の湧いて居る所がある寶塚タンサンとして賣り出しているのは茲から取るのである、上の山は有名な櫻葉嶽と云ふのがあつて満山ゆづり葉ばかり。

もみぢ

箕面山

箕面はもみぢの名所であるが甲州の御嶽ほどの偉観はない、が夫れだけに又紅葉としての見處はある様だ、以前は阪鶴線で往つて大分に歩かなければならなかつたのだ、今度箕面電車と云ふのが出来て梅田から乗ればスーツと行く、往復僅に廿九錢だ、町を外れて茲から箕面の山となるに既に水聲の涼々たるのを聞く、山の奥に高さ十一丈幅三間と云ふ京阪では外にない箕面の瀧の流れに添ふて山を上つて行くのである、流は急である、山も急、紅葉の薄き濃きを賞しながら瀧安寺に達する、役の小角の創立した處で本堂には竹生島、嚴島、江の島と相並で日本に四ヶ所と云ふ辨天様が祀つてある、瀧安寺を過ぎて更に十五六所水愈々急に山愈々窮まつた處に瀧がある、瀧の奥更に又奥の瀧がある、紅葉瀑布、此外に箕面の名物は唯一つ楓の葉の揚げたのである、食傷せずには歸る事が出来れば誠に結構な事であらう。

ゆさん

須磨、明石



明石城

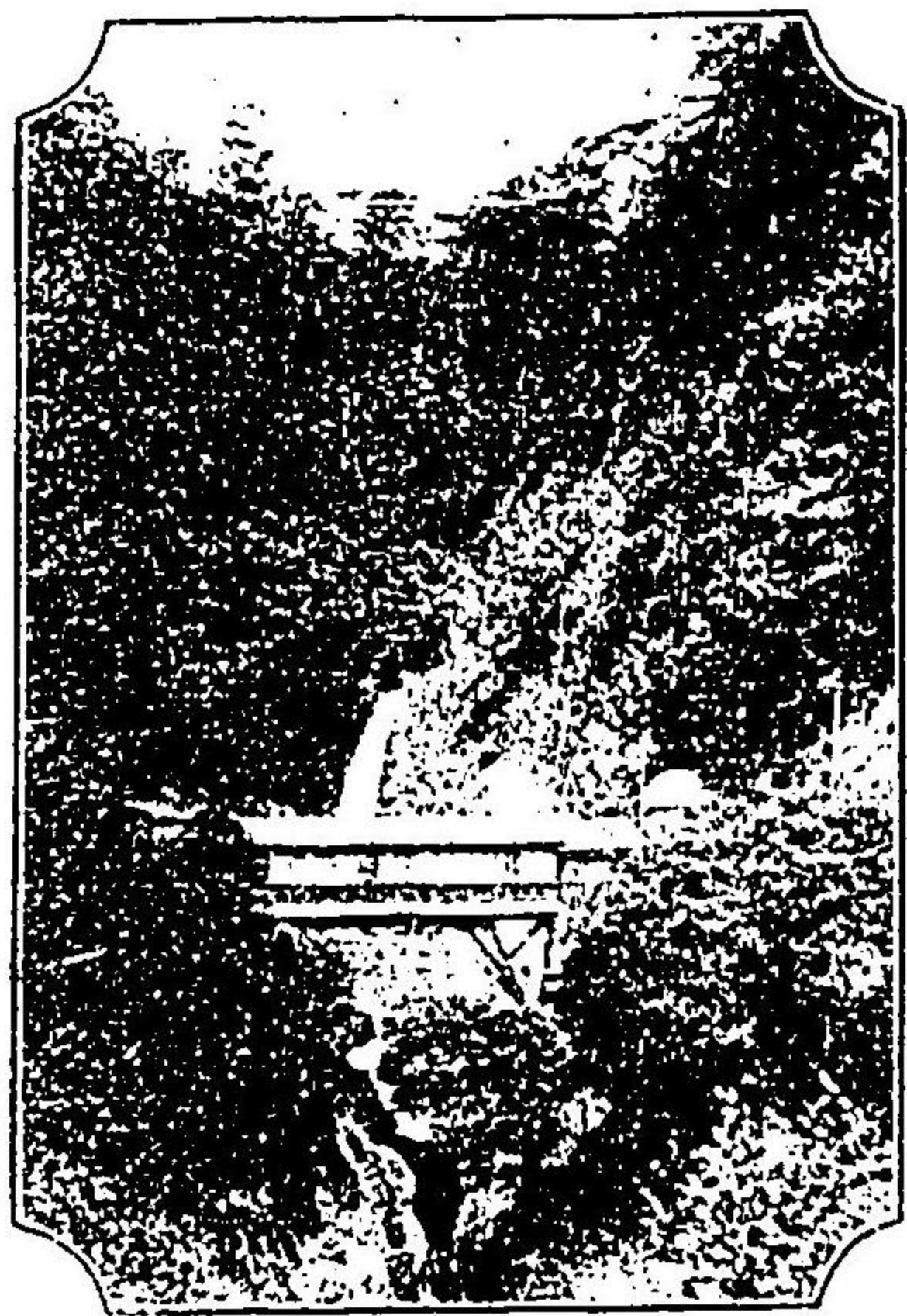
須磨、舞子、明石是等を見物しようとするれば大阪からなら、須磨の停車場で下車して見物するか、又は兵庫まで汽車に乗り兵庫から兵庫電氣軌道に依り須磨寺に下車するのである、大阪から須磨まで二十四哩、時間は一時間と十分、三等賃金四十錢二等六十錢、電車賃は兵庫から須磨寺まで五錢である、須磨停車場よりから案内すれば西へ十三四町で一谷、鵜越、敦盛塔、松風村雨の墓、須磨寺には敦盛の携へたる青葉の笛を見、海月館、松の家、などの旅館にて飯を認め食後一里ばかりを人力に走らせ白砂青松の播州の海岸を通り抜

けて舞子の公園に入る、前には淡路島、老松の盤蛇たる千態萬状を見ながら講中の人となつて明石に行く、明石にては舊城、人丸神社等を見物し、明石鯛の瀬淵たるを料理させ晚餐をして歸途に就くか、去らざば所謂播州廻りを企て更に西行して土山驛に下車し高砂の相生の松、尾上の松や、曾根の松などを見るとき急がぬ旅には話の種ともなる可し。

おまわり

楠公神社

大阪に來た序と云ふ序ならば神戸を見物に行く可く、神戸へ行くなら是非楠公神社



神戶布引の瀧

宮驛を出て北へ四五町して生田神社生田の森、梶原の井敦盛萩を見、東北に轉じて布引の瀧を見、戻つて北野山より諏訪山に出で、鑛泉に浴して諏訪明神に賽して楠

公社へ志す可し社は多門通三丁目市内第一雑沓の處にあり、社内社後には見世物勸工場などありて淺草の公園と異らず、表門を入りて右手に『嗚呼忠臣楠子之墓』の碑石を見、更に本社に額き菊水の幔幕引廻らしたのを見ては何故此様な處に建てたらうと思はざるものは幾人もあるまい、社の左手は福原遊廓、其又左は楠公戰歿の地淡川。

おんせん

有馬

大阪からでも日歸りはちと六ヶ敷いかも知れぬぞ、關東の草津と相並で古來温泉場として誰でも人の知つて居る有馬を紹介したい、是は神戸からも行かれるが道が遠い矢張新舞鶴線で三田の停車場まで大阪からは哩數二十六哩、時間一時間半、三等賃金四十四錢二等で六十六錢、神戸から行けば住吉の停車場で下車して六甲山を越へて三里の山道、三田で降りても矢張三里ばかり馬車がある、町の名を湯山と云つて、温泉は内湯ではなくて宮殿風に堂々たる構へに建築した元湯が一軒是へ各温泉宿から入浴に行く様にしてある、鹽類泉で鹽化鐵が遊離する爲めに手拭でも何でも赤く色が付いて仕舞ふ、有馬の湯染と云つて態々反物に色を付けて賣つて居る位だ、皮膚病、中風、リユーマチス、子宮病などに好いそうである、温泉宿は兵衛、御所坊、池の坊、中の坊、なごあり、有名な湯女は今でもある、有馬節と云ふ鄙しい俗歌も今でも聞かれる。

著 作 權 所 有

明治四十四年六月十一日印刷
明治四十四年六月十八日發行

探外
勝その日歸へり終

著 者	落 合 昌 太 郎
發 行 者	神田區相生町十二番地 沼 尾 榮 三 郎
發 行 者	本郷區湯島三組町八十三番地 下 田 兵 太 郎
印 刷 者	麴町區有樂町二丁目 中 村 政 雄
印 刷 所	右 報 文 社
發 行 所	東京本郷區湯島三組町八十三番地 有 文 堂 書 店
賣 捌 所	日本橋區日本橋至誠堂 日本橋區本石町 檜物町六合館 神田區東區東京堂

探外
勝その日歸へり終
(錢十五金假定)

82
708

者冠面覆
作

雄浪合落
著

聞奇界世

内案遊漫

艶

七

魔

日

傳

の

旅

洋装新形最美全一册
（一名世界色物語）
正税 金八十五錢

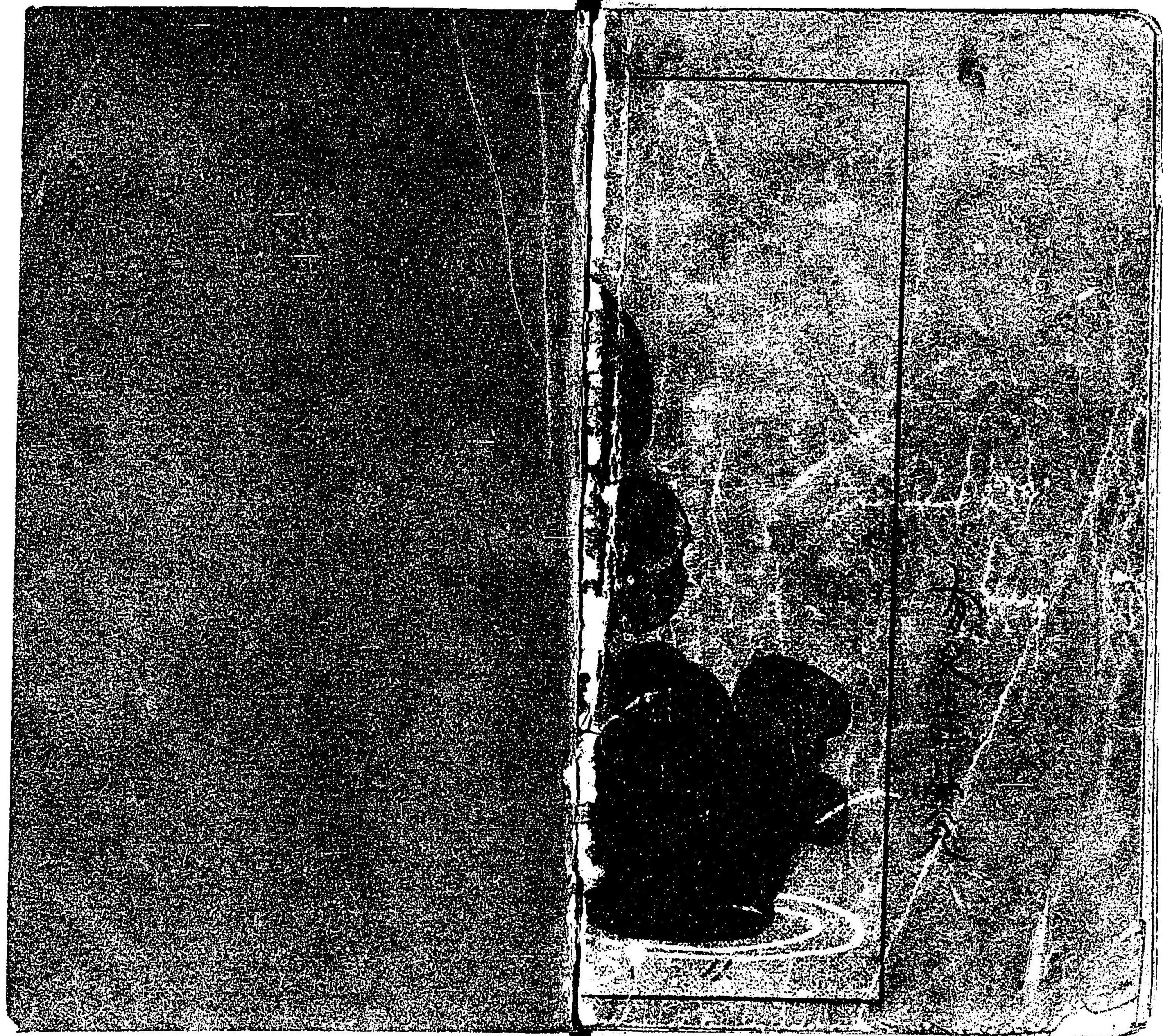
ボツケット形美製全一册
案内地圖挿入
名勝寫真數十入
正税 金七十錢

◀版二第▶

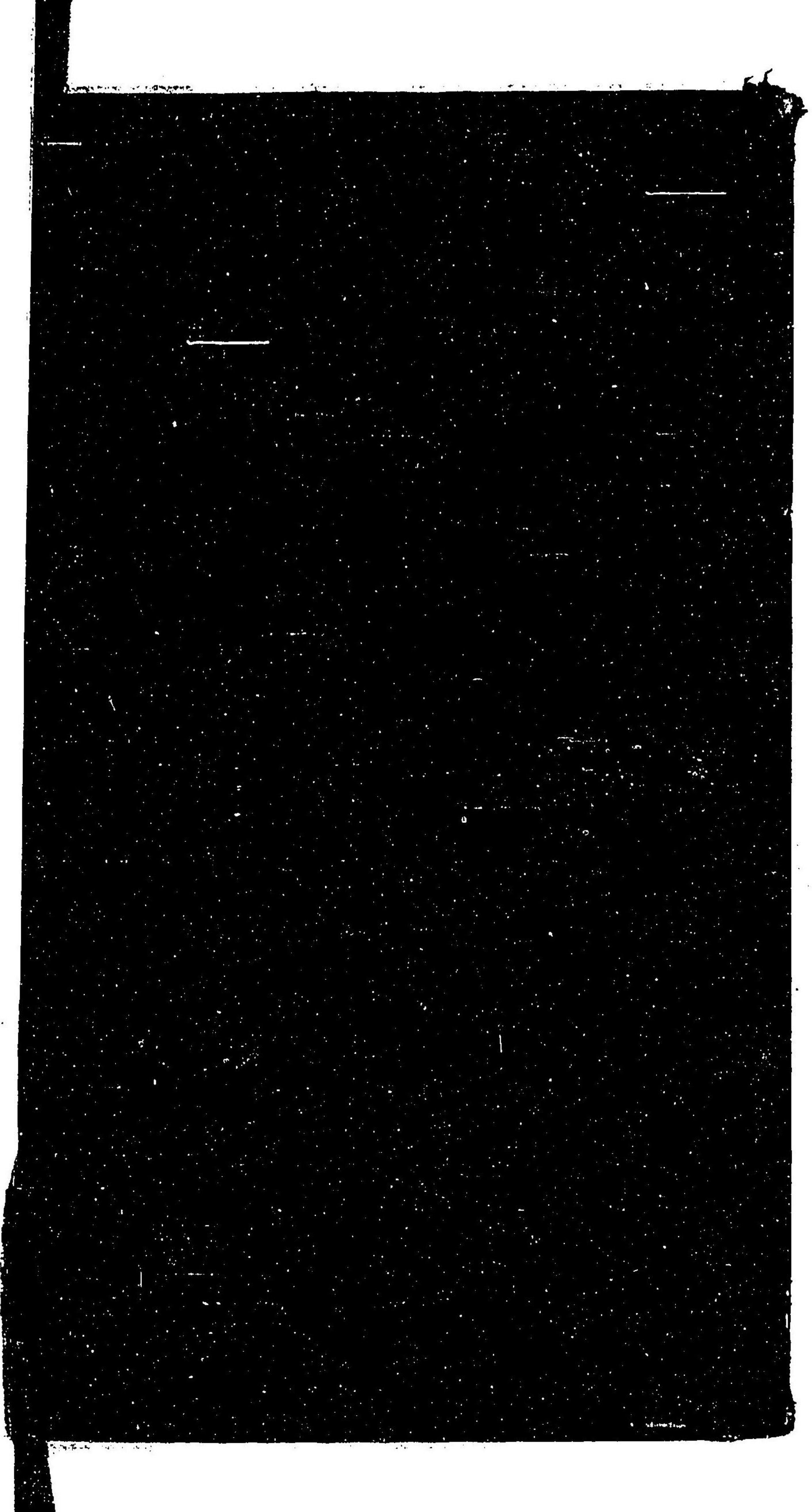
◀版三正訂▶

仇名を尋ねてアメリカへ渡り女不
人た事よアメリカへ渡り女不
圖大陸を航してアメリカへ渡り女不
米大陸を航してアメリカへ渡り女不
及ぶ今東に吸ふ二何年か
そが本深に話の無一物
物の味し給は直に話の無一物
の世の中知深に話の無一物
る恐るしに美女の墮落の経路
の恐るしに美女の墮落の経路
ります。此の文位國の本は御座
な見ると。此の文位國の本は御座
いません。は歌米位國の本は御座

時金は云ふに人手もな
料方と云ふに人手もな
問と云ふに人手もな
六日何時か旅費は何
錢日御土産問入何
切な御案内者一は
道連れ鳴呼水はこれ
白い枕山水はこれ



82
708



92
708

023846-000-0

82-708

郊外探勝その日帰り

落合 昌太郎 / 著

M44

ADC-0862



